0053457000

0053457-000

183-589

変態文献叢書

文芸資料研究会

追加　第2巻

昭和3

AIA

東京帝國大學文科大學漢書

九卷 二卷 軟派伝書 洋本

133
539

軟派珍書集 全

135
580

石川巖著

軟派珍書往來

變態文獻叢書
追加第二卷

發行所
文藝資料研究會

例言

一、本稿を上下二編に分ち、上を男色篇、下を花街篇とした。本稿はもと〳〵『男色考』を作成する積りであつたのが、會の當事者から、急に如上の如き題目に改めたのである。それ故勢ひ前者に厚く、後者に薄くなつた所以である。

一、殊に花街篇の如きは、少くも元祿期までを入れる積りで執筆したのが、紙數超過の爲め、約三分の二を割愛せざるを得なくなつたのは稿者の甚だ遺憾とする所である。且つはし書の宣言には、雜篇をも添へる筈であつたのが、以上の次第でそれ等は全部省略せざるを得なくなつたは重々稿者の不始末不本意勝からざるものがある。それ等は機を見て、第二第三の『珍書往來』として發表するの期もあらうと思ふ。偏に覽者の寬恕を請ふ次第である。

例言

一、本稿を上下二編に分ち、上を男色篇、下を花街篇とした。本稿はもと〳〵「男色考」を作成する積りであつたのが、會の當事者から、急に如上の如き題目に改めたのである。それ故勢ひ前者に厚く、後者に薄くなつた所以である。

一、殊に花街篇の如きは、少くも元祿期までを入れる積りで執筆したのが、紙數超過の爲め、約三分の二を割愛せざるを得なくなつたのは稿者の甚だ遺憾とする所である。且つはし書の宣言には、雜篇をも載せる書であつたのが、以上の次第でそれ等は全部省略せざるを得なくなつたは重々稿者の不始末不本意砂からざるものがある。それ等は機を見て、第二第三の『珍書往來』として發表するの期もあらうと思ふ。偏に覽者の寛恕を請ふ次第である。

軟派珍書往來　目次

はしがき……一
上、男色篇……三
一、若衆を詠める歌……三
岩つつじ上下二卷——岩津々志叙——岩つゝ志上——岩津々志下
二、若衆に寄せたる戯文……二四
古今若衆序——尻を咏へる狂詠——若衆の袋——上林の岩鋼川園斎——井上の本入——千於——春於——利倉三十郎——千代——山田久三——二君七童
三、若道禮讃の戯文……二八
井筒文九郎若道の動意帳——文覺と六代御前——辨慶と義經高野六十郎智八十——
四、徳川時代以前の稚兒物語七種……三〇
男色物卷——稚子草子——秋の夜長物語——兒敎訓——松帆浦物語——幻夢物語——鳥邊山物語——嵯峨物語——若衆物語
五、江戸初期刊行の若衆物……三一
心友記——滿屋物語——男色義理物語——衆道物語
六、稚兒秘傳物……三二
隆道秘傳一卷——滿尾貞友——稚兒手取機——稚兒見樣——鶴道秘傳
七、稚兒に關する笑話集……三四
江戸初期の笑話本——
戯言養氣集一卷——
——織田信長と貞女——
高野の聖と若衆——
田の谷家來——
醒睡笑八卷——
人はそだち——雄長老と天の橋立の歌——廢忘——兒の噂——稚兒と食不足——若道不知——若道と歌道——泊鄙——守護不入——鹿の卷筆——せりふのけいこ——市村竹之丞頭見世出來——島吉之亟かげま時代——客の夢を驚かす——吉之亟顔見世狂言の復讐——やぼのかげまもち——勘三郎芝居——染之亟
八、稚子若衆に關する假名草紙……三五
竹齋二卷——竹齋物語は江戸期男色戯作の元祖——少人若衆の會合——寛永十一年家光の上洛ならん若衆いでたち
田夫物語……三三
男色女色論——男色は道に外れ女色は天理に叶ふ——田夫物語の起源——若衆狂ひ
犬つれづれ二卷……三四
犬短歌——若衆短歌
僧崎記……三八
よだれかけ……三九
男色二會衆——羅山のことばの言ひぐさ——白玉の草子——七歳より廿五迄を若衆の一期
九、武家小姓と歌舞伎野郎を描いた繪本……六一
浮世繪繪卷……六二
武家と小姓……六三
江戸諸武家小姓……
歌舞伎野郎……六四
京大阪の野郎役者江戸に俳優——堺町野郎の服裝——島原狂言——奴作兵衛、庄左衛門、坊生小兵衛——野郎の舟遊山——野郎の屋形舟に群がる見物の舟
十、若衆歌舞伎と野郎評判……六四
道頓堀出待若衆の顔ばいせの白粉——
三芝居子供推量物語三番叢——若女形上村吉彌——世の中の敎訓——女形の開山——川思軒——同上村長彌——
一哈

雨夜三百機線……七七
三絃若女形の評判記——昇平館座の華代——女形の風姿
はは御女郎にもなし——木笛恋塚牛……六八
水木館三國一之助……六九
雨夜三百機線口上——男色を嘆く歌——美少國歌——歌
岡辨千——恋尻屋——野郎を愛する歌——牧童の詩……七五
古今四場居百人一首——芝居の色林——色魔四場居童しの歌
野郎長記評林序……七七
梁塵千歌……七八
遊女言川歌
延命子嘆歌
遊名「野郎評判記」……八四
野郎評林嘆——中村七三郎……八三

十一、男色を描いた浮世草紙……八三
男女を描いた浮世草紙の元祖——空前絶後の男色大鑑——
竹塚文學の骨董化——男色を正系の浮世草紙

下、花街篇……八六
小引……八六
花街本の元祖——あづま物語——そぞろ物語——吉原物
——吉原遊客の變化——吉原評判記類の集成——此頃の
評判記は信用出來ず——太夫拂底の元祿時代——遊女な
ぜ評した廓で發賣禁止——こそぐり草……九九
桃源集……一〇〇
烏原は十餘年前六條町より移轉——烏原の隠名山鳥……九〇
清佐利久佐……九一
大阪最古の遊女評判記——增り車の著者——作者の抱負……九一
吉原鑑と嵯物語……九二
吉原鑑と嵯物語の相違——嵯物語の創見……九二
吉原大全新鑑……九八
吉原大全新鑑の序文と跋——吉原評判目錄……九九
吉原根元記……一〇〇
吉原歌明記時之太鼓……一〇〇

歌明記流布本の梗概……一〇三
吉原袖鑑本文の由入……一〇三
四天王……一〇三
若四天王と若四天王……一〇三
吉原よお子島……一〇三
よし原六方……一〇五
吉原大鑑者……一〇五
吉原評判……一〇八
吉原あくた川……一〇八
吉原下職原……一〇九
吉原三茶三鶴一對……一〇八
朱雀諸分鑑……一〇八
朱雀遠目鑑……一〇九

挿繪目次

浮世絵（口繪）……三
秋の夜長物語……一〇
鹿の祭筆……四
竹齊……五
田夫物語……五
犬つれづれ……五
浮世……五
雨夜三百機線（四葉）……五
古今芝居百人一首（二葉）……六、七、七、七、七、七、七、七、七、七
奏記評林（二葉）……七、七
延命子學集……八、八
歌明記時之太鼓……八
朱雀遠目鑑……九

軟派珍書選集

石川巖

はしがき

近代に於ける珍書複刻の元祖は、明治廿五六年頃に出た博文館の帝國文庫あたりで、それ以後明治末より大正にかけ硬軟珍書の一大集成となつて現はれたのが國書刊行會本である。この二大叢書の刊行によつて、日本の文化がどれだけ恩惠を蒙つたことであらうかは今更繰説する迄もない。次で記憶すべきは有朋堂文庫あたりであらうが、これは從來曾て翻刻されたものを精選して比較的親切に讀者の便を計つて呉れたといふ點で感謝して良いと思ふ。これと前後してさゝやかな企てではあつたが、宮崎三昧の珍書會發行の「覚奇樓叢書」は貧弱な本ではあつたが、僅少な讀者を相手に能くあれ丈の期間を繼續されたと共に、珍書の宣傳の功を沒することは出來まい。その後拙子が大正六七年頃『珍書保存會』なる名目の下に、從來の

帝國文庫叢書刊行會
覚奇樓叢書
珍書保存會

鉛活字版では、古書複刻の本旨に合致しないといふ見解の下に、原本通り透寫して簡單な謄寫版印刷として五拾部内外の會員に配布したのが、約五十種許り、專歌派の稀書珍藉を複製したのが、昭和の今日尙ほ繼續刊行しつゝある『稀書複製會本』の木版複製本を呼び起す素因を爲したことを誇りとし、又立派な後繼者のあつたことを悅ぶものである。かゝる意味で、引合はない難事業を繼續し行く事業こそ、眞に讃れたる功勞者、文化事業の恩人として、吾等はどの位恩惠を蒙つて居るか知れない。その點に於いて水谷不倒氏などにも感謝して良いと思ふ。本書の加きも是等數氏の拿き努力に待つもの多きを德とし、且つ感謝するものである。

玆に收採する珍書は、今日必ずしも珍書と稱すべきものでないかも知れない。その多くは、一度は何等かの形式で發表されたものであるから、原本その物は珍書であつても、これは敢て珍らしくはないのである。だがしかし、文運隆盛の今日、悉く未發表、未刊行の珍書をもつて一部を爲すといふことは判底望んで得られないのみならず、本書刊行の目的は、興味中心の珍書を網羅するといふ發行者の希望に據つて編成したものであることを諒め諒として欲しい。それ故七面倒な書藉の解題や考証は第二義として、專本文の面白き部分を抄錄し、なるべく挿畫を多くして興趣を添へ、さりとて餘り雜駁に亘らず、各題目の下に自ら一大系を成す文獻資料たらしめんと期したのが本書である。

江戸文學中、最人氣あるものと言へば、遊里と劇場の二大惡所に歸することは多言を要しない、したがつてこの二大惡所に關する文獻資料位華麗にして興趣をそゝるものはない。今それ等の惡所を中心に、更に雜纂としてエロチックな特殊の文獻をも參考に添へることとした。

稀書複製會

江戸文學中の人氣物遊里と劇場

岩つつじ　北村季吟

正德板の繪入本

男色沿革史

男　色　篇

一、若衆を詠める歌

岩つつじ　上下二卷

北村季吟編、延寶四年に編めるらしく序文に見ゆ。正德三年に至り繪入として京都から出版されてゐる。但し板本は極めて尠なく殆ど見當らず。無論江戸時代の編纂ではあるが、內容は中古以來の男色關係の歌文集としては最古の部類に屬するもので、專古今和歌集以下の勅選集から重に僧侶の作が大部分を占めてゐるのは、女色を禁じられた當然の歸結として邪淫戒を犯し、不自然な行爲に出たものであらう。表面は聖僧と呼ばれてゐても、人間としての情欲は抑へんとして抑へ切れない所に人間味が現はれてゐて面白いと思ふ。古への高僧とか聖僧とか呼ばれた坊主の醜い半面が如實に暴露された一種の照魔經として注意すべきものである。選ばれた歌集には、古今を始め、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載新古今、續詞花、拾玉集等で、歌集以外は、大和、宇治拾遺、袋双紙、古今著聞、徒然草、秋夜、松帆等で、補遺に、玉海、大內義隆記、源賢法眼、井蛙、眞光院紀行、宗祇筑紫紀行、坂士佛伊勢太神宮參詣記、宗長記、萬葉集第四大伴家持久須麿に贈つた歌三首等で、男色沿革史として貴重な一文獻である。

因に、本書は太田南畝の『三十輻』に收められてゐるものであるが、先年正德の刊本によつて多少訂補した箇所もある。當時挿畫を撮る暇なかつたのは返す〳〵殘念であつた。

岩津々志叙

うましおとめをよろこぶは、女神男神の神代より、人の心のまさにしるべきことはりなるを、うまし男をしも女ならでさるすける物おもひの花に酔るは、あやしくことなるに似たるわざながら、その妹背の山は佛のいましめさせ給へる所なれば、さすがに岩木にしあらぬ心のやるかたにて、法の師のわけ入初めし道なるを、筑波ねの峯のしたゝり流れ落ては、みなの川の淵となれることの如く、末の世にはかへりて女男の情よりも猶そこひなきこととなりて、上達部うへ人などはさらにもいはず、たけきもののふの心をもなやまし爪木をこる山賤も、なを此若木の陰に立よらずといふふとなくぞなりにたる、しかれど是をやまとうたによみ出たることはさまで多からず、まづ古今和歌集のなかには、高野大師の御弟子眞雅僧都のときはの山のひと歌あり、これやかの色好みの家の風をつたへ、花薄かくほに顯れて、まめなる人にも語り傳ふること成けらし、其外にも代々の撰集にのせられし言の葉、拾遺集より新古今まではわづかにちりまじりにたれど、その後十三代集の中にはつや〳〵見出るふしも侍らず、もしはありもやすらん、わが見るところの委しからぬにや侍りけん、伊勢・源氏の物語・狭衣・枕草紙などにも、さま〴〵戀草の色をつくして書つらねたれど、猶この一くさはもらしき、かくまれなる物はわりなく見まほしき人の心のくせなればにや、ある人此くさぐさのふる言の葉を見出てよとしゐてのぞまるゝに、こよひ延寳四とせ八月十六夜つれ〴〵とふりくらし雨にむかひて、むなしく月を戀るもあやなければ、ひとり燈をかゝげて、かの古今集よりはじめ、數島の道の草雙紙、また歌ならぬ繪物がたりの中などにても、やさしく捨がたきことあれば、見るにしたがひて書あつめつゝ、岩つゝじとなん名づくめる、近き世がたりにはいとけやけく目おどろかるゝこと多かれど、これにはのせず、此ごろの事は人も耳なれてめづらかならず、かつは世にはゞかるべきことも、をのづからあるべければなり。

岩つゝ志　上

北村季吟書之

古今和歌集第十一戀一　　讀人不知

思ひ出るときはの山の岩つゝじいはねば社あれ戀しき物を

此歌北畠准后親房、古今抄云、眞雅僧都の業平につかはしける、弘法大師弟子眞觀寺僧正と號す、同序云、花に鳴うぐひす、水にすむ蛙の聲をきけは、いきとしいけるもの、いづれか歌をよまざりける古今集の古き序抄云、孝謙天皇の御時、大和國高間寺に住ける僧の、最愛の兒身まかりにければ、限りなくかなしみけれど、月日へてやう〳〵忘れけるに、あるとしの春、庭の梅に黃鳥の來りて、初陽毎朝來不相還本栖と鳴ぬ、僧あやしみてかきてみれば、初春の朝ごとにほ來れどもあはでぞ歸るもとの栖にといふ歌也、かの僧これをみて、兒の生をかへて來れりと思ひて、今更に哀歎の涙をながして、さまざまの弔をなしけるとなん、予おもふに、此說古今の本意にはあらず、事好む人のみだりに附言せしことならん、しかれども世にいひ傳ふることなれば、捨がたくてしるし侍りし、

拾遺和歌集第十一戀一

大管會の御禊に、物見て侍ける所に、わらはの侍けるをみて、又の日つかはしける、

數多見し豐の御祓の諸人に君しも物をおもはする哉　　寬祐法師

古今集

（頭書）　覃按

後拾遺集十一戀一

うれしきといふわらはにふみかよはし侍けるに、人にものいはれて、ほどなくわすられにけるとき、

拾遺集

後拾遺集

て、つかはしける、

鶯しきを忘るゝ人もあるものをつらきを戀る我や何なる　源政成朝臣

つらかりけるわらはをうらむとて、音し侍らざりければ、わらはのもとより、われさへ人をといひおこせて侍ければ

恨ずばいかでか人にとはれましうきも嬉しき物にぞありける　律師朝範

○校訂者云、按ニ後ノ歌ハ同集十六雜二ニアリ、

後拾遺集十三戀三

頼めたるわらはの久しう見え侍らざりければ、よみ侍りける、

頼めしを待に日數の過ぬれば玉の緒よはみ絶ぬべきかな　律師慶意

おもひけるわらはの久しう音もし侍らざりければ、よみ侍りける、

逢坂の關の清水やにごるらん入にし月の影も見えぬは　僧都遍救

かたらひ侍りけるわらはの、こと人にかたらひつきにければ、久しう音もせで侍けるに、さすがにおほえければ、よみてつかはしける、

餘所人に成はてぬとや思ふらん恨るからにわすれやはする　前律師慶運

金葉集八戀下

たつといふわらはをよびにつかるはしたりけるに、見えざりければ、月のあかかりし夜によめる、

待人の大空渡る月ならばぬるゝ袂に影は見てまし　權僧都永緣

詞花集七戀上

三井寺に侍りけるわらはを、京へいでばかならずつけよと契り侍りけるを、出たりとは聞けれど、音

信も侍らざりければ、いひつかはしける、

影見えぬ君は雨夜の月なれや出ても人にしられざりけり　僧都覺雅

同集八戀下

弟子なりけるわらはの、親にぐして人の國へあからさまにとてまかりけるが、久しく見えざりければたよりにつけていひつかはしける、

御狩野のしばしの戀はさもあらばあれそり果ぬるかやかたをの鹿　最嚴法師

いとおしく侍りけるわらはの、大僧正行尊のもとへまかりければ、いひつかはしける、

雲は木傳ふ花の枝にても谷の古巢をおもひわするな　律師仁祐

返事わらはにかはりて

黄鳥は花の都も旅なれば谷の古巢をわすれやはする　大僧正行尊

千載集九哀傷

かたらひけるわらはの、思はずうとく成ける後、なく成にけるを、人とぶらひて侍りければ、

悲しさを是よりけにや思はましかねてならはぬ別なりせば　靜嚴法師

花ぞのの左大臣の家に、わらはにて侍りけるを、笙をおしへ侍るとて給へりける文に、としへて後かのために佛くやうし侍ける時、笛にそへて侍ける、

思ひきやけふ打鳴す鐘の音に傳へし笛のねをそへんとは　法印成清

同集十一戀一

横川の麓なる山寺に籠りゐける時、いとよろしきわらはの侍ければ、よみてつかはしける、

世をいとふはしと思ひし横川路にあやなく人を戀渡る哉　仁昭法師

詞花集

新古今集夢四上人
秋夜長物語

後書

詞花集六離別

弟子に侍りけるわらはの、親にぐして他國へまかりける、さうぞくつかはすとてよめる、

別路の草葉を分む旅衣たつよりかねてぬるゝ袖哉　　法橋有譽

千載集九哀傷

奈良に侍從といふわらはの泉河に身をなけて侍ければよめる、

何事のふかきおもひの思ひ川そこの玉もとしづみはてけん　　僧都範玄

此二首また戀慕のこゝろあるにこたれば、筆のついでにしるし侍りし、

新古今集二十釋教

人の身まかりける後、結緣經くやうしけるに、即往安樂世界の心をよめる、

昔見し月のひかりをしるべにて今宵や君が西へ行らん　　瞻西上人

此歌の事秋夜長物語にあり、其略に云、後堀河院の御宇に、西山の瞻四上人とて、道學兼備したりし人、元は北嶺東塔の衆徒に、くはんがく院の宰相の律師敬戒といふ人にてぞおはしける、道心堅固ならんことをいのりて、石山に七日こもられし夢に、容顏美麗の兒の、花の雪を袖につゝめる有樣をみてのち、道心はわすれて夢のみ身をはなれぬここ地すれば、せんかたなみにうれありきけるに、三井寺のほとりにて、雨にあひて聖護院の御房の庶に立よりければ、二八ばかりの兒の、水魚紗の水干に薄紅のあこめ重ねて、こしのまはりほけやかに、けまはしふかくたをやかなるが、花を手折て、

(補)ふる雨にぬるとも折らん山さくら雲のかへしの風もこそふけ

と歌ずしてたゝずみたり、花ぞののおとゞの御子、梅若君と申にてぞおはしける、ありつる夢のたゞちにたがはねば、心も空にて、其夜は金堂の緣にひれふしてながめかして、

提燈に螢を入る

これや夢有しやうつゝわきかねていづれにまよふ心なるらん

かくておもひ佗て、彼君のつかひ給ふわらはにかたらひつきて、文奉る、

知せばやほのみし花の佛に立そふ雲のまよふ心を

とばかり書たり、彼童も　參りて見せ申ければ、

頼まずよ人の心の花の色あだなる雲のかゝるまよひは

律師御返事を見て、いとゞ心うかれて、山へかへりけるに、梅若君より彼童して御文あり、

儒のある世としらで契りけん我心さへうらめしの身や

あひ給ふべき御心ありて驚させ給ふなれば、此わらはとつれて、また三井寺に行けるに、童しばしの程の宿をかりて、學問所に律師を置て、さるべき隙をうかゞはせけるに、ある宵過てから垣の戸を人のあくる音して、かの童提燈に螢を入てさきに立り、其幽なる光にみれば、かの君金紗の水干なよやかに、うちしほれたるさまにて、見る人もやとやすらひたれば、みだれてかゝる青柳の、いとゞいふばかりなきさまに見えたり、かくて我ぬる所にいれ奉りて、むつごともまだつきなくに、閨寒くして、しののおざさの一ふしに、あくると告る鳥の音もうらめしく、おのがきぬ〳〵ひやゝかに成て、立わかれなんとする窻の月影に、寒亂髪のはら〳〵とかゝりたるはづれより、眉のにほひほけやかにほのかなる顏の面影、又逢までを待ほどの命あるべくも覺えずかし、律師は君をおくりて出たるまゝに、やがてねやへもいらず、門のからいしきの上に立やすらひたるに、かなたより彼童して、吾袖にやどしやたてん衣々の泪にかけし有明の月

律師書院にかへりて、御返事、

ともに見し月を名殘の袖の露はらはで幾夜歎き明さん

扨山に歸り人にも見えず、只臥沈みてのみ明し暮すに、若君其よしを聞て、もしさてはかなく成なば、なからん跡をとひても甲斐なからん、たとひしらぬ山路成とも尋行ばやと思ひたちて、かの童一人を具して立出給ふに、あゆみもならはぬ道につかれて、唐崎の松の木陰にやすらひつゝ、あはれ天狗こだまやうのもの成とも、我をとりてひえの山へゐてのほれよかしといひゐたるに、年いとたけたる山伏の出來て、四方輿にうちのせつゝ、鳥のとぶやうにていづちとも知らずうばひ行ぬ、かくて此君うせ給へりとて、三井寺山門の大にさはぎて、終に山門の衆徒敬戒律師をはじめとして、如意が谷より亂入て、四角八方を切まはり、律師が若黨五百餘人はしり散て三井の院々谷々に火をかけつゝ、新羅明神の外、殘る所なく燒うしなひぬ、さる程にわか君は不思議の霧にたすけられて、からうじて天狗の手をのがれて歸り出給へりけれども、わが事のゆへ、かく故なくこゝらの佛閣殿舍のむなしく成て、聖護院の門主の御跡も、そこはかとなくならせ給へるをかなしみつゝ、なく〳〵文を書て、御供の童にもたせて律師のもとへ、

わが身さて沈み果なば深き瀨の底まで照せ山端の月

といひやりて、瀨田の橋の下行水におち入つゝうせ給へり、律師まどひ來て、はかなき御かゝ岩のはざまより尋ね來て、血のなみだをながせど、いひがひなし、扨しも有べきならねば、其夜やがてはうぶりおさめ參らせて、其遺骨を首にかけて、山林にいたり、さま〳〵修行して御あとねん比にとぶらふとて此歌をよめるよし、されば此詞書の結緣經も、此御ため、むかし見し月の光をとよめるも、彼ともにみし月の名殘をおもへるゆへなるべし、

大和物語　在原滋春撰、花山院御增補　參議三善清行子

のうさんの君といひける、淨藤とはいとになうおもひかはす中なりけり、かぎりなくちぎりて、思ふ

かたをも云かはしけり、のうさんの君、
思ふてふ心はことに有けるをむかしの人に何をいひけん
といひおこせければ、淨藏大とこのかへし、
行末のすぐせをしらぬ心には君にかぎりの身とぞ云ける

字治拾遺物語略

一乘寺の增譽僧正は、經輔大納言の御子にて、二度大峯に入、鉢をみる法を行ひ、龍の駒を見などして、あられぬ有樣をして行ひたる人になんおはしける、共御許に呪師小院と云童ありけるを、餘りに憐愛し給ひて、たゞ法師に成て、夜晝かたはらをはなれずつきてあれとの給へるに、童いかゞ候べからん、今しばしかくて候はゝやといひけるを、僧正猶いとおしさに、たゞなれと有ければ、わらはしぶ〳〵に法師になりてけり、扨過る程に春雨打そゝぎて徒然なりけるに、僧正人をよびて、呪師小院が兒なりし程の裝束は有かととはれければ、おさめ殿にいまだ候と申す、とりて來よとめしよせて、これをきよといはれければ、此呪師小院見苦しく候なんといなびけるを、只きよとせめてのたまひければ、かたはらに立忍びて打さうぞきて、からうじて出きたりけり、其さま露も音にかはらざるを、僧正つく〳〵と打みて、かいをつくられにけり、小院も打泪ぐみて立りけるに、僧正眞わすれぬ一曲をかなでよと望まれければ、いと面白くかなでけるに、僧正忍び兼て聲をはなちてぞなき給ひける、扨こちこよとよびよせて、かきなでつゝなにしに出家をさせけんとて、なく〳〵くやみ給へりければ、小院もさればこそ今しばしと申候つるものをと云に、裝束をかさねて障子の外へ具して出たまへり、

續詞花和歌集第十一戀上

一院山にのぼらせおはしまける御供に侍けるに、僧どもの具して物語せさせける童の、心にかかりて覺えければ、房を尋ねていひつかはしける、　參議隆季

君ゆへに思ひ入ぬるみ山べの谷の心はふかきとをしれ
心がけたりけるわらはの、ふみをかりて侍けるにつかはすとて、
ふみ分てかる計にぞ成にける物思ふ人の宿の庭草

同集第十二戀中

房より西に、ちか鄰なる人の許に侍る童に、忍びて物申ける比、月のあかき夜いひつかはしける、
よがれせず浦山しくぞ西へ行月は人めもつゝまざりけり　律師延眞

同集第十三戀中

かたらひけるわらはを怨じて、しばしとはず侍けるに、彼童文をおこせて侍けるに、薄墨にて書たりければ、
うす墨にかくにて知ぬ君はさは見えぬをよしと思ふなるべし　僧都覺基

同集第十四別

あひしれりけるわらは、のみちの國へまかりなんとしけるに、月のあかき夜、人々別惜みて歌よみけるに、「頭書」此歌又見二新續古今卷第九離別部一
おもひ出よ今夜の月の光をば誰も雲るの餘所に成共　實叡法師

同集第十八雜下

あからさまにひえの山にのぼりて侍けるに、かへりなんとしける折、童の手本かきてと申ければ、書

浄厳法師

袋草紙行願僧正雅兒錦織八郎

惠仲法師

てとらすとて、

うき雲に跡も定めぬ身なれども山のうへこそ立うかりけれ

雑の部のうたながら別を惜む心あれば、しばらく爰に書つらねて、智者の明辨をまつものなり、

袋草紙云　藤原清輔朝臣之説也、中納言經家息、

眞如院の僧都公圓は定頼卿の孫なり、若かりし時錦織の僧正行觀の本に、錦織八郎といふわらはを得意にて侍けり、彼童歌はよまざりけれど、此僧都をりふしには、相たすけられければ、歌よむ名きこえけり、僧都三井寺におはする程に、人々此わらはをさそひて、日野の三位のもとに行ぬときゝて、定めて和歌あらん、いかゞすらんといとおしく思ひてければ、日の入程に三井寺よりかちにて日野に行て相むかふに、此わらは縁に出てたゝずみけるに、相逢ていかゞととひ給へるに、山家秋月をよむべきよし侍るに、凡慮やるかたなかりけるに、今なん心やすきとよろこびて、さりけなくていりぬ、此時此うたをよみて、ひそかにとらせてかへられ侍しとぞ、

いか計さびしからまし山里の月さへすまぬ今宵なりせば

當座ほまれありて、いよ〳〵歌仙の名をあけたりとぞ、云々、

梨下の座主若く侍りし時、蓮仲法師いかで心ざしを達せんと思ひける間、おもひがけざる所にて契り申て悦びにたへず、名籍を奉るとてよめる歌、

うれしさに命たへぬる物ならばなからん世にも此名わすれな

座主返事

誰さきとしらぬ命に頼めては空ごと人になりも社すれ

演こそといふ童の四十九日に、誦經の文にかきておくる歌、

拾玉集

稚兒千手

古今者聞集

紫金堂寺御室

千手今様を歌ふ

をしてるやよさの演社變しけれ泪をよするかたのなければ

慈心上人

横川の覺超僧都導師にてこれを和する、

世の中にありがひもなき我が身をばかく惜まるゝ人に替ばや

拾玉集第五　慈圓僧正集也、

千手と云兒の外へ行なんとすると聞て、其事など尋ねにつかはすとて

終にさは流れとまるか山河の底計こそきかまほしけれ

古今者聞集云　橘南資撰之

紫金堂寺御室に千手といふ御龍童ありけり、美目よく心ざま優なりけり、笛を吹、今やうなどうたひければ、御いとおしみ甚しかりける程に、又三河と云童、初參したりけり、拳引歌讀侍りけり、是も亦龍ありて千手がきらすこしをとりにければ、面目なしとや思ひけん、退出して久しく參らざりけり、ある日御酒宴の事有て、さま〳〵の御遊ありけるに、御弟子の守覺法親王なども共座におはしまして、千手はなどさぶらはぬやらん、めして笛ふかせ、今様などうたはせ候はでやと申させ給ひければ、則御使をつかはしめさせけるに、此程所勞のこと候とて參らざりけり、御使再三に及びければ、さのみは子細申がたく參にけり、花紋紗の兩面の水干に、袖に村小荻に雀の居たるをぞぬひたりける紫すそごの袴を著たり、ことにあざやかにさうぞきたれども、物を思ひたる氣色あらはにして、しめりかへりてぞ見へける、御室の御前に御盃をさへられたる折にて有ければ、人々千手に今様をすゝめければ、

過去無數の諸佛にも　捨られたるをいかにせん　現在十方の淨土にも、

往生すべき心なし　たとへ罪業重くとも　引接し給へ彌陀ほとけ、

とぞうたひける、諸佛にも捨られたるといふ所を少かすなるやうにぞいひける、おもひあまれる心の

色調はれて哀なりければ、聞人皆涙をながしけり、興宴の座もことざめてしめりかへりければ、御宿塩かねさせ給ひて、千手をみちびき給ひて御別所へ入御有けり、　浦座いみじがりのゝしる程に、其夜も明ぬ、御室御遊所を御覽じければ、紅のうすやうの重なりたるに、歌を書て御枕屏風におしつけてありたりける、

尋ぬべき君ならませば告てまし入ぬる山の名をばそれ共

あやしくて能々御覽じければ、三河が手なりけり、今やうにめでさせ、又古きに御心の花を見てかく讀し侍りけるにこそ、さて御尋ね有ければ、行方しらず成にけり、高野にのぼりて法師になりにけりとかや聞えける、

徒然草云

春の暮つかた、のどやかに艶なる空に、いやしからぬ家の、おくふかく木立物ふりて、庭に散しほれたる、花見過しがたきを、さし入て見れば、南面の格子皆おろして、寂しけなるに、東にむきて妻戸のよき程にあきたる、御簾の破れより見れば、かたち清けなるおのこの、年廿計にて打とけたれど、心にくゝのどやかなるさまして、机のうへに文をひろけて見るたり、いかなる人なりけん、尋ねきかまほし、あやしの竹の編戸の内より、いと若き男の月影に色あひさだかならねど、つややかなるかりぎぬに、こき指貫いと故づきたる樣して、ささやかなるわらはひとりを具して、はるか成田の中の細道を、稻葉の露にそぼちつゝ分行程、笛をえならず吹すさびたる、哀と聞知べき人もあらじと思ふに、ゆかんかたしらまほしくて、見をくりつゝゆけば、笛をば吹やみて、山のきはに總門のある内に入ぬ、

羅山氏抄云、此段と上の段とをみれば、東坡が李節を尋ねて、鳳水洞の遊びし景氣あるやうに覺え侍り、云云、

松帆物語公卿の息侍從

古人未發の說、いととめづらかなれば、用ひて爰に書加へ侍りし、此外仁和寺の童の法師にならんとする餘波とて、をの〳〵遊ぶこと有けるよしいひける、御室にいみじき兒の有けるを、いかでさそひ出してあそばんとたくむ法師有て、など書るゝ段も、兒を愛せし事ながら、そのこと優ならねばとらず、猶此類あまた侍りし、

松帆物語略云

公卿の息に侍從の君とて、十四五にて優に情有し人を、岩倉の宰相法師人しれずかたらひて、三年に成ぬ、其時の相國の御子大將殿、此侍從の君をきゝ傳へて、せうそこし給ふに、勞のよし申て參り給はねば、五月雨の比なるに、

時鳥うらみやすらん待ことを君にうつせる五月雨の比

心地すこしすゞしく成給はゞ參給へとありければ、

五月雨の晴間もあらば君があたりなど問ざらん山時鳥

此侍從のかくうけひかざるも、彼宰相法師がわざなりと聞腹立てつるに、宰相法師を淡路の松帆の浦に追放つゝ、侍從の兄の中將にあひかたらひて、侍從の君を殿にむかへとりつゝ、とかくついせうし給へど、いとゞ大將の御心をうらめしくのみおもへば、かゝる玉の臺も心にそまず、罪なくしてうきめみる宰相法師がむぐらの宿のみ、思ひやられて悲しければ、宰相が岩倉にとめ置し土佐といふ法師をぐして、忍びてまぎれ出つゝ、松帆の浦を尋ね給へるに、須磨の浦にて、光源氏の心づくしの秋風をおもひ出て、

宰相法師追放

侍從宰相の後を追ふ

秋風に心づくしの我袖やむかしにこゆる須磨の浦波

など打詠めつゝ、舟にて淡路にてえて、彼京極中納言のやくやもしほとよみ給へりし浦なれば、身も

宰相法師戀死

伴侯高野山に入る

こがれつゝ爰かしこ尋ね給へるに、ある小屋に老僧の松の葉ふすべてひとりあるに、あないして立よりつゝ、宰相法師の行衛を問給へば、彼禪僧能知て、其法師こそ此庵に常に來りて、都のうへ人を契り置し事などかたりつゝ、朝夕戀佗給へるが、終に戀死て、七日に成ぬ、此文こそ便あらばなど申置給へれとて見すれば、さま〳〵のことをかきて、

悔しきはやがて消べきうき身共知らぬ別の道芝の露

など鳥の跡のやうにかけり、誠に今はのきはまでおもひわすれずせしわざと見るに、悲しきこと限りなし、なく〳〵宰相が塚にまうでて、しるしの松に侍從の君

おくれじの心もしらで程遠く苔の下にや我を待らん

と書付つゝ、やがて此海に身をなけんとし給へるを、土佐からうじてとゞめ參らせければ、ぜひなくてつるにかしらそりて、高野山に入給へりとなん、

或藏人なりけるが、子を山へのほらせたりけり、彈衆行人の房になん有けり、見めかたちよろしき兒なりけるを、さとへかへりたるつるでに、寺法師すかしとりて寺に置てけり、山僧いきどをりのゝしりて、まづ兒の師の行人にことの子細をとふに、兒共の里に久しく候事常のならひと存計なり、三井等に候はん事つや〳〵うけ給及ばず、先狀をつかはして見候はんとて、紙と硯と取寄て、かくぞいひやりける、

山の端にまつをばしらで月影のまことや三井の水に住とや

寺法師これをみて戀して秀歌返事なしとて、別の子細に及はず、山へおくりけるとなん、

鎌倉に或僧房の兒、師をうらむること有て、他の僧房へ行けり、物の具足とりおとしたる中に、詞花集をわすれたりけるを見出して、送りつかはすとて、本の師、

此兒歌にめでてまたかへりにけり、たがひにわりなく侍り、

いかにして詞の花の殘りけん移ひはてし人の心に

正德三癸巳年三月吉祥日

帝都　書林澤田吉左衛門版

岩つゝ志の一帖は誰人のかけるとも見えぬを、北村季吟老人の述作し給へる書とて、頃の年人のもとよりやつがれたふび得侍りしかば、座の右にして常にもてあそび侍るまゝに、或時隱士鳧舟子閑壽法師の披見に入れ侍るに、かの師の云、此一草いづれにもなみ〳〵の人の撰定にはあらず、めづらしくも集記せられたり、誠に男色を好める人の分て美歎とするに足ぬべきもの也と、是によりておもふに、われのみ見てたのしまんは佛の道にもしるてもとめざる聲聞の意地とやらんにひとしかめれば、此情をしれらん兒童も、共に見そなはし、世の人の入興にもなりねかしと、今所々に畫圖を加へ、あづさにちりばめておこなふ事しかり、

于時正德第三曆　　仲春日

洛邊散人

萱草生行書之

補遺

○玉海月輪關白兼實公記云、承安三年夏四月二十七日丁未、雨降、此日建春門院百日御懺法結願也、中略、少將惟盛

大内義記

源賢法眼集

井蛙眼目

眞光院紀行

美しき若衆

瓢囊、卿子　衆人之中容顏第一也、

○大内義記云、陶の尾州いまだ五郎と申て若りし時、戀慕の心ありて、宮田へかよひ給ふに、路次にて出向ひ、松ヶ崎の寺にてあひけるが、夏の夜しののめふかく明行ば、暇ごひせず歸られけり、心うしとや思はれけん、そのあしたの歌に、

もぬけなりとせめてのことは空蟬の世のならひとも思ひなすべし

とよみて、跡より宮田へ送られける、

○源賢法眼集

わらはの法師になる夜、

ふりかけしねくたれ髪をかきさぐり人たがへたる心地もやせん

としごろもろともにあるわらはの京にのぼるに、

なにをかもなぐさめにせん冬山のふりつむ雪のとくるまにまに

○井蛙眼目頓阿云

一能譽は故宗匠の被執く歌讀也、故香隆寺の僧正の愛弟の兒なり

他人の心にならへ郭公うきにぞやすくねはなかれけん

とよめる歌新敕撰に匿名にて入れたり、

○眞光院紀行　天文二年也

おはりの國やなといへる所に、一夜を明し侍れば、その里にいとうつくしき若衆ありけり、酒などたうべて。そのあしたおきわかれければ、

あづさ弓やなの里人一すぢにおもひわかるゝ横雲の空

宗祇筑紫紀行

坂士佛伊勢太神宮參詣記

垂髮

○同紀行云

これより富士みむとて立出ける道に、原といへる所に、庵に手ならふ人の童あれば、そこにいたりて、夜もすがら若き人たちとことかたり侍りて、

夢うつゝなにと定むに◎ひ枕かはすことばのうちに別れて

○宗祇筑紫紀行

守護所陶中務少輔弘詮の館にいたり、傍の譚林にやどりて、又の日彼館にして、さま〳〵の心ざし有折ふし千手治部少輔、杉次郎左衛門尉弘相など有て、一折有り、

ひろく見よ民の草ばの秋の花

此國の守代なれば、萬性の榮花をあひすべきの心也、終日いろ〳〵あそび暮し侍るに、此あるじ年廿のほどにて、其樣艷に侍れば、思ふ事なきよしも侍らで、おほへず勸盃時うつりぬ、云々、

○坂士佛伊勢太神宮參詣記

所々巡禮之後、山田の三實院に歸て侍し程に、當所の好士あまた尋來て、一折あらまほしけにすゝめ侍しかば、手向の心ざしある折節なり、宿願の機熟するゆへかと思ひたちて侍しに、人々云、本朝を大和の國といひ、歌道をやまと言葉といへり、國の開闢既に當宮にあり、歌の根本豈我神にあらずや、然れども諸社參籠の懐紙は常に見へきたれり、兩宮法樂の連歌はいまだ聞およばず、神の緣にあひましまさぬか、人のことはりをしらざるか、今既に參籠ついでであり、數寄たよりを得たり、一夜の會をのべて、累日の席をひらかんと申侍しほどに、面目をうしなふ藝をわすれて、心肝をつひやす席のつらなる、著座十餘人笠著群集せり、其中に垂髮あひまじはりて、はなやかなる句なんどをいたし侍しかば、老氣いよ〳〵まどひやすく懸案さらにおよびがたし、

わするなとかきをく文の一筆に

といふ句待しに、

人の涙を思ひいでけり

と垂髪のつけて備しかば、諸人の秀吟耳を驚し、滿座の感歎腸を斷こと、ひさしくこの道に心をかけたる身は、あけくれきゝとり、わざのふるきことをのみつらねて、胸のうちよりいづる誠はさらになきものを此垂髪の、よはひよも志學をいでじとおもふこゝろの底より、かゝるやさしき言の葉のきこへ侍るありがたさよと、あやしくてすみかはいづくなるらんと、ゆかしくおぼへしかども、心ざしをつけやりぬべき花鳥の使もなし、夜といふもじを懐紙にとゞむるばかりにて、行衛もしらずなりぬ、云々、

○著聞集

醍醐の櫻會に童舞面白き年ありける、源運といふ僧、その時少將公とて、みめもすぐれて、舞もかたへにまさりてみへけるを、宇治の宗順阿闍梨みて、おもひあまりけるにや、あくる日少將君のもとへいひやりける、

昨日みしすがたの池に袖ぬれてしほりかねぬといかでしらせん

少將公返事、

あまたみしすがたの池のかけなればたれゆへしほるたもとなるらん

といへける、時にとりてやさしかりけり

仁和寺佐法印成海法印師也、わかくて醍醐の櫻會見物の次に、寺中巡禮しけるにや、山吹きぬきたるわらは二人おなじすがたにて花みて侍けるは、いづれもいみじくえんに覺へければ、たへかねて歌よみかけける

山吹の花色衣みてしより井手の蛙のねをのみぞなく

著聞集

仁和寺佐法印

宗長手記

若衆

みづからかくいひかけて、にけける袖をとらへて、ちとあんじてすなはち返し侍る、

山吹の花色衣あまたあれば井手の蛙はたれとなくらん

○宗長手記

此濱の夕立いでて、渺々たる遠近、いせ尾張の海づらくまもなく見へわたされ休ふほどに、こゝかしこより若衆誘引、所に付たる酒肴笛鼓などまできたりて興に入りしかば、かの花も紅葉もなどの歌まで心に、贈答して、

この夕べ花も紅葉もあるものを浦の苫屋の人の心に

夜に入りてかへり、誠に海をまくらの心地せしに、けふの若衆いづれにかありけん、旅寢をとぶらひ、やがてかへりしあしたいひつかはしける、

思はずのあしのかりねのせゞの波しきすてられし名殘なしやは

○又、

神戸をたちて、高岡寺のこなた一里あまり、長門守うちおくり、若衆右引具して日暮酒の中に、

ながらへばけふの心もみゆべきに老しす物はかひなかりけれ

又若衆の中へとて

さそはるゝ人ならませばふじのねのするがへいざといかましものを

萬葉集

○萬葉集第四

大伴宿禰家持贈藤原朝臣久須麻呂歌三首

春之雨者彌布落爾梅花未咲久伊等若美可聞

如夢所念鴨愛八師君之使乃麻爾久通者

浦若見花咲難寸梅乎殖而人之事重三念曾吾爲類

又家持贈藤原朝臣久須麻呂歌二首

情八十一所念可聞春霞輕引時二事之通者

春風之聲爾四出名者有去而不有今友君之隨意

藤原朝臣久須麻呂報歌二首

奥山之盤影爾生流菅根乃　勤　吾毛不相念有哉

春雨乎待常二師有四吾屋戸之若木乃[illegible]

奥沖云、往來の歌の始終をもてみるに、これは久須麻の美少年にて、家持の思ひかけて、よみてつかはされけるなるべし。

二、若衆に寄せたる戯文

古今若衆序

本書著作年代不詳なるも、天正十七年十月三日の話あるにて、略其著作年代を知るべきであらう。作者は細川玄旨法印「幽齋」太田南畝輯の「三十輻」の中にある「百和香」の一文で、古今和歌集の序に擬へた戯文で、戰國時代に於ける稚兒小性が武家の寵兒たりしは言ふ迄もなく、果ては陣中迄も伴はれて近習の役を勤めて重寶がられたものである。この序は當時に於ける稚兒小姓の評判記共見るべきものである。夫若道は人の心をたねとして、よろづの事業とぞなれりける。世の中にある人、淫犯しけき物なれば、

心に思ふ所をするらのさするものにつけて出せる也。（以下略之）

かゝる小姓の流行は、率て江戸時代に入り、若衆歌舞伎の賣色が盛んになつた結果、延寶頃には、大阪新町に若衆女郎といふ異風な男裝した遊女の一群をすら呼び興すに至つた。人間の奇を好むも此に至つて極まれりと謂つべきである。この大阪若衆女郎の起つた次第については、例の島山笑山の『色道大鑑』に委しく說かれてゐる。この若衆女郎を古今集序に擬した『古今若女郎衆序』なるものが世に出てゐる。『古今若衆序』の代りに左に全文を附載する。

古今若女郎衆序　一卷　延寶九年刊

江戸歌は人の心を種として、萬の浮氣とぞ成れりける。世の中にある人あだほれ繁きなれば、心に思はぬ事を見る物聞く物につけて、口說出せる也。花になつむ女郎、廓に往む乞食、何れを戀か知らざりける。貧をも言はずして、末社をも遣手をも、目に見えぬくつはにもむつとしても、わけのよき違縛と思はせ猛き挑灯持の心をも和らぐるは實也。此實後藤庄三郎より黑印を打けり、したかれは方々にて拂へ、姉小路にて拂め、一分小判とする[illegible]り。伊丹のものなれど、京　又都にあつまる置けり。

しかあれども、世に金持少なければ、吾妻請け出す山本氏とは言はれず、八千代は尼になり、清松とて、今は飛彈の國に家作りして安の土にしては、八千代よりぞ流行ける。千話やすき髪をきる迄は、女郎の心定まらずいふりにしてごと

の心わき難かりけらし。爪を放し指を剪るよりぞ、心中は大やう見えける。

く住みけるかたゝ袖ふれし昔は、人の紙を火にして花を貰ひ嬉しがり、おつときたとて霞をひかれ、今はけがなく、飛彈るくもなし。かくてぞさきを

つかけ、わる〳〵といふて露をうたれ心言葉多く、さま〴〵になりにける。遠き所も出たつ足下より初り、江戸は二丁たちから究め、京は六枚の早駕籠、高き愛宕山も麓の雨雲たなびく迄を下に見なし上る如くに此道もかくの如くなるべし。難波津の野間屋の萬太夫は、今の女郎の初めともならんかし。阿波の國の人の妻、歳、浅香山のなどとふることをも吟じ候は、三浦の高雄、奥村氏八千代高雄は江戸にて人の妻となりぬ小雪とは江戸のき

れにて、島原より新町へ越けるに、七軒のはやりことも如何そかなりとて、左衛門もうけ奉したりけれど、すまじければ、井筒屋のか、又いがりなりけん女の手取て歌ふ歌に、大坂大臣の御ふけにける　此二人こそは、女郎の母のやうにてぞ、手ならふ人の印にもしける。抑戀のさま六つなり。唐土にもかくのたまけも有るべき、そのうつけの一人には、

藤本宗仙をそへたる戀

難波津をのゝやこのほん京のもの今は末社になるやこのほんといへるなるべし。

二つには悲しき戀

さく花に思ひつくせるあんふつは身のくつをほることも知らいでといへるなるべし。　これはぶんぶくのいひて、ものゝ識分も知らぬや、この戀いかでいへるにかあらん。その心得がたし。いつくにかたり此さなんいへる、これにはかなふべし。三つには露ちらす戀。

君が今朝あしたの露を切ていなばなんどきにても君や來たらんといへるなるべし。　是は歌詠き戀にて、又是口に似たり。この戀歌深きさも見えず、たちちれの親い金を盜みても、たゞ買ひたきば女郎なりけり、かやうなるもおりなん、是はかふもあるべし。四つにはふか間の戀

我戀詠むともつきじいたちほりの川のまさこはよみ盡すともいへるなるべし。これは馬のことわざも身にしれば、いよしもにくからず、併そうかも知らで、長堀のあかれをふまず、めつたに深く思ふ心なく煙草をいたみ、思はぬ方にたなびきにけり、氣の毒なる戀にや。　五つにはねれの戀

いつはりのなき世なりせば女郎衆のぬれの言の葉うれしからましといへるなるべし。　これはうそのまことにてあるべし。思はぬ人には、ぬれをかけても互にむづかしからむ、かたし人のあくまで顔を見たきかなうき世を捨てゝ命限りに　六つにはひつかく戀

この殿はむへもとみけり何百兩三つ四つはに家作りせよといへるなるべし　是は嘲き男のそたてゝ、ひきにさせんどのつやならん、大臣にいかゞさりけん。鼻上をひしさにくみもうけたくやおもふ。これらは少がなふへが　今の世の中よくにつき人らむ。をほよそ初心なる男は、女郎のいふ事を誠と思ふからしてひしさともならん。の心濡れになるけるより、仇なる中戸契り、色好みの家に埋木の人知れぬことなどと、まめなる男は夜々格子に立ち、煙草烟管吸つきちから紙を喰かはせくどきより、春の花のあしたには、はねつく〳〵と御けんを待かね、秋の月の夜毎に太鼓女郎をめして、赤石や香膳のよるやさと唄ひ、あるは三味をもて

あそぶとて、たよりなき舉屋にまよひ、あるは月にのみかけんならんそやとて、緣はなに出るしかあるのみにあらず、双六の石をさゞれ石にたとへ、湯氣のゑつきなけ頭巾、しんきの山にかけてよねをねがひ、大臣めきては、なにやらむやまぶき色したる。此やうなるものにたのしみもつきて、富士の煙によそへておろせを呼び、松蟲の音に秀を忍び寄せ、うなぎのかばやきの匂ひもあひをへのやうにおほへ、よそのおとこだてをおもひ出して、うなりたる長羽織に、四角なる大袖にて、りきみたる草履取を連れ、驕ぎありき又春のあしたに、餅花光散を見、秋の夕暮にほた餅のすべりたるを見、あるは年毎に鏡の影に見ゆるかほのしはを見て我身をなげき、物まへの書出しを見てはわが身を驚き、あるはきのふは大臣となりてはぐはんさいをつれんことをねがひ、末社となりては隨軒がかねのほどをうらやみ、世にしたくきつれもうとくなり、追出し太鼓の音に驚き、あるは昊竹の憂ふしを人にいひ、大溝のかはづの聲に、世の中をうらみつれども、たゞうか〳〵とのみ心をなやます、今は富士の山ほど金をほしくなり、宇治の橋かくるなりと聞人は那波屋かたはけたることに金を遣ふたとへに出したり。今の御代にも大黑屋かの長崎屋の左門、上林の斑女をうくる、されど左門は、今は三井ふく鳴瀧にありけり。丹波屋のお琴は豪名屋也お琴は尼に成て後身まかりぬ。是皆大もめそわきたんへいなるべし。　さかい町四條道頓堀にて狂言にも出せり。江戸にてはかねの數も定まらず、すなをにしてねぎるといふ事もなく、大名大臣なれば、いひかけ次第に請出せるなり。町人大臣となりてはねぎりて又はまけるといふ事初りたりけん。大坂にてはかの岡本氏なん此みちの聖なりける是は敵も我も身をあはせめす小袖帷子自由たりといふなるべし。秋の夕べ横堀川に流るゝ紙屑をもめんをさらすと見、春のあしたには喜多八左衛門、吉野が正月買を思ひ、又奥州のつゝけかいと云ふ事は、岡本氏よりおこりける。井筒なん戀しりなり高天とてあぢなるわけしり、すいぶんのすいきやう也。井筒は、高天が上に立たんことを思ふ。　奥州が歌に、

嗜癖にちりやみだれて戯るめりわたらはあくたなかやたえなん、弁慶、かれしちや、それとも見えず、すいなもば雲若さしになへてふべし。ほんのりとあかつきがたに鶯鳴れて、あきこみにくる客はいやなり。高天巷の日に、をくから來り、太鼓までつとむるは、はかなくぞおもふ。わが身男じんはりなれば、かたもぜもあしもなへつゝ・・いくそうし。この人々を擬て、又優れたる人も、川竹の末の世にも流れの身かた、京のよりよりに禿は女郎となりたえずぞあるべし。これよりさきの女郎を集めてなん、江戸吉原大全、京に犬枕、大坂に增草と名付たるは草紙也けり。こゝに古への事をも、女郎の意氣張をも知れる人、幾に一人二人なりき。しかあれども彼是忍たる所得ぬ所、互になんある。かのときよりこのかた年は三十年にたらず、世は三つきになんなりにける。中比の事をも知れる人、譯よく知る人多からず、今この事をいふに司位高きにも見えたる人、又衆戯ならぬはいれず、外に近き比名を得たる女郎は本夫の内にはあらず、萬手はすこし蒼なり、戀の樣は得たれども張合なし、例へば大名大臣と聞及びて、（以下略之）

三、若道禮讃の戯文

井尻又九郎若道之勸進帳

文明十四年に書いたと稱する戯文の一種で、作者井尻又九郎忠助は出藍目の洒落に過ぎまい。中に、雅兒の別名を、小僧、喝食、少人、若衆、童子、新發意、若人などゝ呼び、叡山の如きは、一兒、二三王など珍重がりその年齢の如きも七歳より廿五歳位迄が普通で時には、高野六十、那智八十の例外も稱家などでは適用しだとあり。隨分巫山戯散らした妙文句である。

高野六十那智八十

文覺と六代御前

弁慶と義經

文明壬寅冬末、平朝臣井尻又九郎忠助謹白、小僧喝食、少人若衆、言天惟混沌已分、日月發レ光以來、有二山河一有二人民一、有二草木一、有二鳥獸一、皆陰陽以二和合一成レ生云々、爰有二一須彌山一、其四方有レ國、南名南二贍部州一、此内有二身毒・支那・扶柔三國一、彼三國有二密道一、其用雖レ同其名別、身毒謂二之非道一、支那謂二之押瓶一、扶柔謂二之若道一、通二用於三國一、眞俗賞翫矣、殊本朝者、桓武天皇御宇、從二弘法大師一、此道專盛、而京・鎌倉諸五山、和州・江州之四箇之大寺、其外都鄙之諸宗、又公家・武家、雪月爲レ便二詩歌一爲レ媒、不レ選二貴賤一、不レ論二貧福一、皆以レ志爲レ本、契二比翼連理誓一、山河帶礪矣、故捨レ財輕レ身得二官位一開二名譽一、皆因感二此道一志深、然又比叡山者、言二一兒二山王一、專翫レ之用、其年齢則上自二七歳一至二二十五一、是諸家通用之道也、雖レ然高野六十、那智八十、諱家不レ論二年齢一、以望レ達レ之、諸家之用凡如レ斯、可レ貴不レ可レ廢矣、嗚呼悲哉、從二應仁文明頃一一々見二此道消息一、邪心苦二人面一雖レ爲レ困、不レ謂二志淺深一、財寶爲レ據、徑二樽簡一爲二媒介一、裏二懇切一、表二名利一、或選レ貴、或捨レ財、縱令雖レ有二眞成一二盛語一、更無二憐愍心一、剩以二蜜道一、容易流布、推二羅女子小兒一、請レ之擇レ之廢哉、然又詢二愛人一、眞實靈レ情、無二嘯レ月吟レ花、歌無レ爲レ節、戀慕情薄、故富士之烟斷云々、洩猿哉々々々、古不レ明、文覺憐二六代御前一、續二頸於千本松原一、辨慶仕二九郎判官一、捨二命陸奥衣川一、豈不二是此道威氣一、濁世導師觀音大士、變二淫女姿一與二馬郎籠盟一、本朝山城國奏聖德太子、現二少人姿一叶二法師望一、是又憐レ人專二慈悲一故也、豈不レ見鳴レ花鶯栖レ水蛙、皆讀レ歌通二詞此道一契深故也、又伊州阿閉郡有二一山寺一、山後有二深山一、老狐棲妖爲二蟄居一、徘二徊彼寺中一、嬲二童子一誑二法師一、或坊小新發意、竊二彼妙姿一、寤寐不レ忘、縣二思高閣月一、寄二心志賀波一、遂結二一夜盟一、爲謝二其芳志一、有二色々贈物一矣、從レ古人畜孳、忽有二其祟一、翌日彼狐於二後山穴邊一、枕二双紙一挾二扇子首一岳死矣、魯語曰、朝聞レ道夕死可矣、其斯謂歟、雖レ爲二無レ證妖畜類一、尙不レ顧二身失一達二人望一、況爲レ人無レ心同二草木一、無レ情劣二於鳥獸一、北州之千年稀有レ極、何況此界之人生、幾不レ滿レ百乎、世間離此可レ過二一生一、只夢中夢也、若時困者、老後物語、

妖艶春花、卒眞散レ之、嬋娟秋月、狂雲藏レ之、由レ之觀レ之、阿羅曳ニ當代ニ、若人各起ニ誓願ニ再ニ興此道ニ、垂ニ眞實ノ慈悲ニ、施ニ無緣人ニ、施者受者現在共有、衆人愛敬極ニ浮世榮花ニ、來世必依ニ三寶擁護ニ、得ニ生天巢報ニ焉、穴賢々々、善道之勸進、

文明壬寅臘月日

井尻又九郎忠助敬白

四、德川時代以前の稚兒物語七種

前記の諸篇と多少前後するが、室町を中心に所謂稚兒物語と稱するもの五六種の多きに及んでゐる。更にそれ以前に溯つては例の醍醐三寶院所藏の「男色繪卷」それが詞書を「稚兒の草紙」として最初に發表されたは名古屋の江戸軟派子であるが、發表こそはしなかつたが、既にこれあるを知つたは大正六七年頃當時東京帝大文科史料編纂掛在職時代既に繪卷も稚兒草紙も目擊したものである。その後尾崎氏によつて之を世に公にされたことを聞き、その勇氣と大膽さに驚いた一人である。更に「江戸軟派雜考」として春陽堂から再刊され、最近には坂田某なるもの「江戸猥談」にそつくり轉載してござるので、今更くど〳〵敍言する迄もなからうし、本書を躋讀する位の者は百も承知二百も合點と思ふから、それ等はよろしく前記二書に讓るとして、今日世に傳へられ居る稚兒物語としては、被史籍集覽に收錄され居る秋の夜長物語兒軟訓、松帆浦物語、幻夢物語、鳥部山物語、嵯峨物語の六種に過ぎない。就中、「秋の夜長物語」が尤も有名で、且つ德川時代に入り、寛永前後には可なり流布されたものらしく、正德六年といふ新版も出て居る異板數版各文詞に幾多の出入がある。それに「兒軟訓」が「若衆物語」と改題して寛文頃にかけて繪入として數本開板されて居る。前者は玄惠法師作、後者は宗祇作と稱されるものである。尙ほ「幻夢物語」二冊寛文四年版もある。其他はあまり行はれなかつたと見え、寡聞にして板本あるを聞かない。以上は何

男色繪卷
稚兒の草子
秋の夜長物語兒軟訓
松帆浦物語
幻夢物語
鳥部山物語
嵯峨物語
若衆物語

心友記
蕗屑物語
男色義理物語
衆道物語
聽道秘傳

れも活版本で流布されてゐるものばかりで、本文そのものは敢て珍とするに足りない。それ故一切省くことにした。

五、江戸初期刊行の若衆物

寛永二十年の板本に「心友記」二冊一名「若道物語」とあるは、或は寛永十七年の刊寶鳴を繼つた「蕗屑物語」江戸時代に於ける男色の元祖と稱せらるゝ淺草慶養寺に傳へられた一件の外題替であるかも知れない。更に元祿十二年に文辭に修正を加へて「男色義理物語」四冊としたのがこれ又蕗屑物語と同本だとのことである。以上は藤井博士の「江戸文學研究」に據る。又寛永年間のものに「田夫物語」一冊繪入本で、男色女色の論、次の「假名草子」の部參照。更に時代は稍下るが、寛文元年には「衆道物語」二冊、京都書坊門通東洞院東入町甚左衛門板、挿畫師宜風、上卷は衆道物語、下卷は若衆物語とありて、卷末に「身はこゝろ心のやみをはなるれば悲も情も有明の月」と一首を詠じたものを最近目擊した丈で、內容は記憶するを得なかつた。

六、稚兒秘傳物

聽道秘傳 一卷

板本の所在を知らないが、寫本にて傳へられてゐる稚兒を手なづける傳授物の一種、慶長三年と奥書をしてあるも、信ずべき限りでない。作者滿尾貞友なるものも、實在したものかどうか、例の若道勸進帳の井尻又九郎の類かも知れない。殊に薩陽廳府などと肩書したるが抑怪しい代物である。書名の聽道は衆道の意を特にこんな醜穢な文字を撰んだなども近世人の遣りさうな疑點である。

抑醜道とは、其古弘法大師文周に契りを込められしよりはじまりしぞかし、醜道といふは、双方より思ひを懸けて親しみ、深く兄弟の約をなせしこと他の書にも見えたり、其昔弘法大師の初め給ふと雖も極古今ともい奥朝は勿論、我朝にても流行せし事ぞかし。弘法大師一首の歌に曰く、

戀といふその源をたづねればばりとぞ穴の二つなるべし

醜道の根本を深く尋ぬるに、三六樂極まりたり、たま〳〵人と生れ來て、道の極意を知らざれば、まことに口惜しきことかな、我數年この道に心懸るといへども、其極意を明らめず、爰に薩陽の住人滿尾貞友といふ人あり、大乘院の大師堂に一七日參籠して祈り、誓ていはく、夫れ弘法大師、日本醜道の極意を敎へ給へと、一日に三度水にかゝり、不淨をきよめ、祈りしに、七日に當る夜、弘法大師若僧の形にあらはれ給ひ、汝よくも心懸るものかな、たま〳〵人間と生れて道の極意を知らざれば、誠に口惜しきことかな、此世に人間の生を受し甲斐もなし。山野に棲む獣さへも戀の心は知るぞかし。汝こゝに參籠せしこと、感ずるに餘りあり、汝に一卷の書を授く、已後他見する事勿れといふて、聲火消す如く失せ給ふ、此書知音の外他見する間敷者也。

△稚子樣御手取樣の事（以下二十項目あれど、悪る節あるに依り略す）

日本醜道之開山弘法大師よりの傳授致候間、他見有之間敷者也。仍如件。

慶長三年三月吉日　薩陽鹿府醜士　滿尾貞友

七、稚兒に關する笑話集

江戸初期の笑話として最古のものは、著作年代は別として、刊行年代では、最近世に公にされた三田村氏編輯の未刊隨筆中に收められた元和活字版『戯青葉集』で、それに次ぐは寛永活字版『昨日は今日の物語』それにつぐ寛永版『醒睡笑』である。この三書は、何れも戰國時代の話題から得たもの多く、中には同一の材を併用せられてゐる箇所も少なくない。就中、稚兒若衆に關する話題の最も多く占めてゐるのは卷數も多いが安樂庵策傳作の『醒睡笑』である。今以上の三書から十中の二三を抄錄する。

戯青葉集　一卷　元和活字本

大小の稚兒利鉢の事

天正八年の春、貞安、あづち山へ出仕申されしかば、信長公おねんごろ有て後、御ふしんなされけるは世間多く小兒をばりこんに、大ちごはおろかに云ならはし候。大ちご小兒の成上りなり。ちいさき時さへ利根ならば、大になる程猶々利發にこそなるべけれ、いな事ぢやと仰せなり。貞安御尤の御不審にて候。大ちごはねるし、やうだうちかうなる故にやとの返答なり。又嵯峨の策傳和尚へ御不審なされしかば、最僧もさやうに存候。大かに推量申候に、小ちごの間は、未だ里心御座候故、武家の利發、才覺、身にも心にもつきそふて、おはしまし候故ならんか、ひたもの寺じみてのちには、長袖のねるゑたちふるまひを見なれ聞なれ、自ら心劣りし侍るかと答へ申されければ、事外御悦喜にて、一段尤の返答ぢや、出家にもそれ〳〵のたちが有とて評して、仰せけるは、

一、佐久間が家來の者は、大略しとやか分に別もありそう也。

一、瀧川家來の者は、士風きちよく、丈夫にあるべきやう也。

一、柴田家來のものは、どこかもむたいにおし破りさうなり。

とかく人はかしこきになれずば、中々よきしなは出まじき物なり。又其間の風あり。その時の風ありとのたまひし。

○うたの事

ある山寺の兒たちあはんとて、武士衆登山有けるに、(「昨日は今日の物語」には三井寺の法師衆とあり)これ〳〵とあり)二たび物思ふといふ題にて歌あり。

春は花秋はもみぢを散さじととしに二度後思ふなり。「コノ歌醒睡笑と少し異ひあり」大ちご

朝めしと又夕食にはづれじと日々に二度物をこそおもへ「コノ歌醒睡笑ト全く異なり」小ちご

以上の二歌「昨日は今日の物語」とは全く同じ

かくて武士衆士衆へも所望ありければ、取おへず、

國　望み國を取ては亂さじと更に二たび物おもふかな

評して云、かなしひかな、二たび物を思はざりし故に、うき事をのみ高人につたふ。

國を望み國を取ては亂さじと更に二たび物おもふかな

評して云、かなしひかな、二たび物を思はざりし故に、うき事をのみ高人につたふ。

○ちご法師よりあひ、寒夜をなぐさまんとにや。でんがくをさんせうからにして、あぶりけるが、いさみつはねたる事を云くはんとて、うんりん院の、こんけんたんの、なんはんしんの、せんさんひんのとて、めき〳〵としやうくはんすれど、小兒計一も得いはず、やう〳〵のこりすくなになれば思ひ出したる事有とてきほひかゝりつゝてんかんくんと云もあへず、五くし六くし引たくり、くはれたれば、清川の中將殿けうさめ顔に成て、一段たつしやに御座あるといはれた。

○又ある時でんがくあり、今度はしゆうくにて、物せんとて、

清壺むさうの長刀

なぞ〳〵いつくしまでたまはつた

大ちご

佛のあたま

何ぞ〳〵みくし

いしやの本尊

なぞ〳〵八くし

侍

小兒

侍從殿少腹立して、とかく小ちごさまは物かずをすかせらるゝと申された。

○山寺の下ほうし、お兒さまへおそれながらお無心申たき事御入候よし云しかば、情をかけよとの事なるべしとおほしめし、さでも〳〵やさしき事を申ものかな、何時なりとも、やすき程のことなりと仰ければ、かたじけなく存候とて、ほゝゑみけり。有とき院主、里坊へ御下候へば、かの者ぢうばこを持てしかゝり御やくそくにまかせ申上候。めんざうにあるみそを、これに一ばいをしつけて御ぬすみ候てくだされ候へと申した。

○おちごさま、山上一のとある二和尚とね給ひて、大いきをつゝけさまに十計つき、いや〳〵と仰けるをなふ〳〵何事ぞ〳〵と、ほうゐん申され候へば、はもじなる夢をみてと計ありしを先御かたり候へかしと仰せければ、小袖二つ三つ御きせ候て、その後もちを事外しゐさせられ候つるを、つよくしんしやく申たるやうに覺えて、ゆめさめたると、のたまひけるを、そうじて春のゆめは、あひかゐる物じや、御心やすがれと申された。

○山寺にての事なるに、宰相殿おちご樣、法師はるすにて御座候やと問はれしかば、いや持佛堂にかおしておはしまし候と答へられた。かきとは何事にておはしますぞと宰相殿申ければ、とにもかくにも、はらぢからがなふて、あゝかんともきんともはねられぬと申された。(この項次の「醒睡笑」兒の巻にも見えたり。文調に多少の相違がある)

○不動院のお兒、存の外もちを過され、夜半のころはんねつして、なんきなされけり。折ふし里よりめのと上り合せるたるが、起き出て、何と御いり候と問ひ申せば、しか〳〵の事有てと仰候間、さらば少御食丸を御まいりあれかしとて、ゆを持て參りければ、そなたともおほえぬ人ぢや、ゆや薬が喉へ入ほどならば、いま一つ二つももちをこそくはうにといはれた。

よしすばれすばらば若衆名やたゝん我身ひとりのすきならばこそ

○えい山の小ほうしばら、山へ行ざまにおちござまこゝに御ひるがござる。九ッをうつたらばきこしめせと申しをきて程なく山よりかへりけるに、やう〳〵四ッ時分にはやまいりたるあとあり。いかにと問へば、はや九ッ打たるとおほせらるゝ。たゞ今四ッを打たるにと申せば、さればこそ五ッと六、四ッと九ッにてはなきかと申された拙々よきさん用やとてあきれもせなんだ。

○又さる若衆、是もなかなかなり。なにとも此をなさるべきやうなければ、物語に、「山王祭を御覽じて帰か」「いや、いまだ見申さぬ」といふ。「さらば拍子をふみて聞かせ申さう」とて、「大宮のはやしは、のんのや〳〵、さんわうまつる。にこにこ〳〵や」是拍子でいきをみな〳〵ふるはれた。「さても面白き事かな」承り及びたるよりよき拍子ぢや。さりながら、まねさへ是ほどなるに、ほんのはあたりへよられまい」といはれた。

○高野聖、若衆にほれて、いろ〳〵くどきけれども、是若衆つれなうて、つひに同心なければ、ひじり重ねて申しけるは、「毎年二期に心づけをいたさうか、それもいやか。」

雷鳴笑　八卷　寛永版

人はそだち

○人里遠き寺あり、手習ふとて少人集りゐる。頃は秋のはじめ、黄昏時のさびしきに、かりがねのわたる聲きこゆ。走り出でかぞへみれば、數六つぞありける。歌よむ人のむすこ、

空よりもむつかり聲のきこゆるは雲の上にも歎きもやある

其座の人々感じあへり。又あけのひる、雁五つ連てわたる、土民の子昨日ほめられし方をうらやみおもひ、

空よりもごきかり聲きこゆるは雲の上にも汁事やある

○小者を語らひて若衆にもちたるに、小夜中の比から〳〵と笑ふ。「法師なに事ぞ今つきもない時のわらひや」といふ。「されば、我木綿布子をしたてんと、裏表をばもちてあり、綿の入れんがなきを思ひいだしたれば、をかしい」と申した。

○山の一院に兒三人あり、一人は公家にておはせし、坊主、年に二度物思ふとい

はるは花あきは紅葉のちるをみて年に二度物思ふかな

一人の小兒は侍にてありし、よるは二度物思ふといふ題なり。

宵は待ちあかつき人のかへるさに夜は二度もの思ふかな

いま一人の兒は中方の子なり、月に二度物思ふといふ題にて、

大師講地蔵講にもよばれねば月にふたゝび物思ふかな

○手習ふ小姓四五人あり、坊主「今日は雨の内ものさびしきに、中絶えてといふ題にて、こしをれ案ぜよ」とあれば、歌道を心がくる人の子、

梅は過ぎ櫻はおそし中絶えて花めづらしきささらぎのする

喝食のありしが、

釋迦は過ぎ彌勒はおそし中絶えて聞くぞまれなる法の一聲

農夫の子

早稲は過ぎ晩稲はおそし中絶えて米めづらしき七月のころ

○小人あつまりゐて、い文字ぐさりをかきけるに、菊千代丸、いがきとよみあはする。後見の法師少納言いひなほし、いがきの事のおもしろくかつれたりと感じけるに、菊千代「こゝな少納言殿は、味噌こすいがきをさへ知らいで」と。うたてや、つらにひが。

○住吉ときく松原に、ときは文月七夕や

おほせうれしき宮參り　おのづからなる手向草

その帷子のいろこがれ　花やかなりし少人たち

やすらふ影も物ふかく　知るも知らぬも浦の浪

心よせてたちきけば　あな洩增やくちなはを

一つ見付て言けるやう　鰻にしたらば五十せう

かまぼこならば大板が　五枚あらうとほどを差た

○堂前にふりたる松一木あり、老僧少人にたはぶれ、「あの松は男松であらうか、妻松であらうか知れぬよ」歌よみの子息出で、「妻松にてあらん、月のさはりになる程に。」土民の子、「いや男松にするだ、あれほど松ふぐりのあるものを。」

天のはしだてにて

橋立の松のふぐりも入海のなみもてぬらす文殊しりかな

○山に兒三人あり、師の坊難題を出し歌をよませける。

雄長老

雄長老と天の橋立の歌

小兒には　摺糊木

宇治川のはしの柱のしけければすりこぎとほる槇の島ぶね

中兒には　菜（ふな）くらふ

鳰の湖なみそふ月のかけみれば今宵ぞ秋の最なかなりけり

大兒には　藤花

あら怖や藤の花くふだう龜があこが尻をもくじりたがるは

廬忘

○若衆と寐てありし法師が、曉雨のふる音を聞き、なむ三寶とめて朝食をふるまはずばなるまい、そらねいりし、おきて歸るを知らぬふりにせんこそよからめと思案しければ、若衆そとおきて行く。もはや門の外へ出ぬべきと思ひ、心もとなきに起きて見れば、いまだ門の内にやすらへるを見付、仰天し立て居ながら、目をふさぎ、高いびきをかき事は。

兒の噂

○ふと人の來りて兒に向ひ、「法印はいづくに渡り候ぞ」と尋ぬれば、「護摩堂にかきして御座るよ。」「かきとは何事ぞ」「經陀羅尼をよみてと云ふ事よ。」「それをばかんきんとこそ いふ物なれ。」「あこもそれほどの事は知りたれど、ひもじさにかんともきんともいはれぬは。」

○兒よりあひのさんげに、大兒は「虱が鳴くものならば、いかばかり人中にて恥しからうが、せめて鳴かぬで恥をかくす」と。小兒は「いや、われは虱を鳴かせたい。其の間なりと食はれいでくつろがう。」

唯ひねれそれこそそれよ唯拈れすはうのうらにわたがみはなし

○人ありて問ふ、「兒の年はいくつになり給ふぞ」「年はくしがき」といへり。「九四の十三はきこゆ。扨がきは。」「其事よ、いつも物がくひたらで、このやうにやせて居るほどに。」

○七旬に餘る老僧、兒の數多ある中にて、同宿どもに、「此十日も廿日も、一向食事がすゝまぬ事よ。ひとへに是は年のより、困衰のしるしにや」と語られければ、大兒申されたるこそめづらかなれ、「今年はやと。十八になれど、ひだるさはまだやまぬ」と。

○大兒を、たれ人の賞翫しけるにや、けしからぬ活計のありつると見え、いねて居ながら、「あら苦しや苦しや」と云ふを、小兒「なにとて、色もよく、無病さうにはあるが、さ程に苦しいかや。」「唯食ひ過ぎて身が熱する」といへるにぞ、「けなりや其やうな煩ならばわれもちと持病にもちたいよ。」

○大兒の小兒に向ひて、「今日の腹は如何やうに候や」と、問はれける返事に、「腹は大皷ぢや」と。「さてもよき事や、うらやましや」とありければ、「いや、どうに皮がついて候よ」と。

○兒たまさかの里くだり、頃しも秋の半とて、民のかまどはにぎはへる、煙たつ田のもみをひき、米をしろめてつきうすや、誰もしるこの餅の音、きねの神垣へだてなく、なみ居て是を賞翫す。笑止は兒の餅にむせ、目口をはたけ悶ゆれば、父母は歎きに沈みつゝ、せん方涙なりつるに、山伏かけて通り合ふ。たのみて祈念するほどに、栗ほど餅が喉よりも、ひよつといづれば色なほり、心安さに兒のいふ、とても行者の奇特ならば、祈り出せし其餅を、ま一度祈り入れ給へ。」

大兒　大空にはゞかるほどの餅もがないける一期にかぶりくらはん。

小兒　大空にはゞからずとも餅もがな月のせいにてほしのかずほど

○大兒と小兒との前にて、「小兒の年はいくつぞや。」「あこはみをつくし」と云ふ。「しほらしの答や、源氏によそへ十四よの。」「さて大兒はいくつぞや」と問はれ、「我はさゝげぢや」「それは何事ぞ。」「今年十八なる」と云はれた。

○延暦寺にて下法師山へ行く時、兒にいふ、「晝の飯をば棚に置きたり。九つなりてあらば、まゐれ」と教へぬ。彼下僧、案の外常より早く晝以前にしまひて、かへりみれば兒の飯なし。是は不審やと問ふ。「疾く早食うた」と返事せらる「いまだ九つはならず、いかでか」申せば、「いやけさ五つ、さきに四つうちたれば九つなつたほどに、それに食うたは」と。

若道不知

○久松といふ子を山寺に上せおきたり。親見舞とて寺にいたり、一夜のほど泊りたるに、久松によりそふ老僧もわかきも、すばり〳〵といふものあり、あかすばりといふ人もあり。彼親父一圓此道にうとし。不審はれぬまゝそとむすこにたづねけり。久松さかしく、「此寺の習に、下戸をばすばりというてせゝる」と語る。親聞き、「けにも〳〵、下戸は酒にあうてから、口がすばるほどに」とて、大に同心したり。或時夫婦つれだち寺に來る。ふるまひあり。酒の砌、後見の法師出で、「久松殿母儀は、一つまるらぬや」と問ひけれど、男のいふ、「私は御存知の如くすばりでは御座ない、女どもは、一圓のあかすばりにて候」と申した。

よしくもれくもらば月の名やたゝん我が身一人の秋ならばこそ

よしすばれすばらば若衆名やたゝん我身ひとりのすきならばこそ

○紀州根來の岩室に、梅千代とかやいふ若衆、かたちをませの内にかくせど、其名は前にもれやすく、そばのかけはしおよばぬも、思を志賀の浦浪に、よせぬ人こそなかりけれ。かゝる折しも情なや、花に嵐のそふもけに、これかや梅千代やまひづき、一まづ里にくだりしを、涙と共に訪ふ人あれば、かたかしらなる親出でて、いひぬる時宜のうたてさよ。「これのむすはこえだしに、はれものあれど大事ない。」御親父の時宜に戀がさめた。

○幸菊といふ一人子を寺にのほせ、物習はせけるが、久しく合はぬなつかしさに、親雜掌をかまへ師のもとに行く。若き坊主の幸菊に向ひ、せうといふ、又よの人もせうと呼ぶ。そも奇異のことばやと思ひ、近づきて問ひければ、「これも此寺に、下戸のから名をせうといふ」と答ふ。さもあらんと合點し。重ねて夫婦つれだち、寺に來りし時、女房に酒をしひぬれば、よく知りたる顏に、彼親いふ、「我等は一圓のせうにて候。子もちはちとくわうなり、しひたまへ」と申した。

○若道　はうと〳〵しく、歌道にはたどし、文章にはくらし。かくてもよき若衆に千松といへるあり。かれにうちほれ執心あり。いかゞたよりていひよらんや。昔より歌は鬼神のおそろしき心をも柔らぐる道とあれば、是なんしるべに思ひたち、其道しりたる人に、三十一文字のさまを問ふ。それ歌には六儀あり、風賦比興雅頌これなり。言葉のえんは、櫻や梅の花によそへ、思の色をいひつらぬ、とまりには、らんの、けりの、かなのと、それ〴〵に置く習あり。」と教ゆるに、造作もなく得心のふりにて、其暮によゝみて遣はしたる。

梅の花櫻の花に鶯頭花千松戀しなるらんけりかな

○子を置きたれば、それにたより、親さい〳〵寺に行く。僧衆よりあひては、それがにやけ、これがにやけと語るを聞いて、子息に「何とやうなる物をにやけとはいゞ」と問ふ。「にやけとは、酒をいふと。宿

に歸り妻に伺ひ、「兎角子たらんをば、人中に置かいでは物を知らぬぞよ。酒をにやけといふ事を教へたは」と語る。今度むすこ里にくだり、長々居ければ、寺より中間迎に來る。かの家幸酒屋なり。母の見て、「やれあの使に、まづにやけのみをなりとくはせよ」と。

○若き僧一夜の宿をかりけるに、十一二歳なる少人同座敷にいねたるが、何事やありけん、冥の時はがりに「かゝよ〳〵、火が付いたは」と頻に呼ばはる。あらかなしやと急ぎふためき、火をもち來り見て、「大事もないぞ、お坊主樣が消して給はうたは。」

人はたゞ十二三より十五六さかり過ぐれば花に山鳳

○治部卿が兒の手を取り、いろ〳〵さま〳〵にことばを盡せど、ゆめばかりも領掌せず、あけくに兒の利にこそ可笑けれ。「われが守護不入なり」と。時に治部卿、にくさのまゝの返答に、「それ程結構さうなのたまひそ、守護不入のところから、さい〳〵夫のでたを、われがよく聞きまゐらせたぞ」と。

鹿の卷筆　五卷

貞享三年刊、當時京に露野五郎兵衛あり、江戸に鹿野武左衛門ありて、東西兩京の双璧と稱された落語家である。恐らく作者武左衛門は素性正しき武家の出であらうと思はれるのは、姓名の堂々たるにても想察される。武左衛門には本書の外に『鹿武左衛門に傳ばなし』がある。原本には內容に關係なきも、大半歌舞伎野郎の挿畫をもつて埋められて居る。殊に古山師重の畫は本書に幾段の光彩を添へて居る。當時野郎の風俗を描寫したるもの本書の如きは注目すべき作物の一であらう。

せりふのけいこ

市村竹之丞顔見世出來島吉之丞かげま時代

客の夢を覚かす

貞享三年刊「嵐の卷」等「絵巻」

過にし霜月より竹之亟しばいはじめてかほみぜに出る。出來島吉之亟まへ〳〵かけまのときより殊の外はやる子なり。しばいに出るによりいよ〳〵夜る壹ともに束のまもひまなし。されども敵き討の狂言せりふをいふ役なれば、心のうちにふくしけるに。夜ふけて客少ねいりけるよき隙ぞと心へて、客の大少をさし、身ふりをしてみんとやおもひけん。かの客の枕元に立ちて、幼少よりねろうといへども折のなければ、太意をとけず、ひごろ心を壹せしに、今夜に因果やさだまりけん。しかしね入たるを斬らんは、死人をきるにことならずと、歩みの板をふみならし、三千年に一度花咲き實のなる西王母が。その桃とうくわのせちゑ。うどんけの親の仇にあふはまれなりといへども、思へばやすかりけるぞやと云て、太刀をさやともにふりあげければ、客驚き

吉之亟顔見世狂言の復習

純三郎芝居

鶴之亟

竹齋物語は江戸期男色戯作の元祖

繰にて寐所をさしてにけ行く。是はいかに、親方をさきとして驚ぎきけば、さりとてはおほへなし、人たがひにてあろふと云。いや狂言のせりふなるが、あすのかほみせに出るにより、ふくしてみましたと言ふてやう〳〵安堵した。

やぼのかけまもち

さる浪人堺町へんにすみければ、かけまをかゝへけるに、かん三郎芝居へ、過にし霜月より出しけり。まへ〳〵の客それ〳〵に花など出しける。されども舞臺なれざる子なれば、やう〳〵三番三のせんさいにいたしける。客ともひる時分よりいつもくるに、あさとくにしまふやくなれば、ついに客の見る事なし。おやかたゆきて見て、きの毒に思ひて、大夫元へ參りて、親方そせう申けるは、染之丞がいたすところ、朝にて客衆もみやらいで、なにともきのどくに存まする。あわれねがわくはさんばそうを切狂言になされてくださりませいと言はれた。

八、稚兒若衆に關する假名草子

竹　齋　二卷　寛永刊

作者は烏丸光廣と稱されてゐる。本書刊記なきも寛永年間の作で、同時に刊行されたものらしい。純男色系統のものではないが、傍系の物としては注意すべき作品の一である。上卷は殆ど男色物語をもつて埋められてゐる。又江戸時代初期に屬する男色戯物語としての戯作は本書あたりが嚆矢となるべきものではないかと思はれる。

前に擧げた『濡屑物語』は江戸に於ける事實物語としての最初とすれば、前者は上方に於ける男色物語

の始祖と見なければならぬ。作者は光廣卿と言はれる丈文詞共に朗々誦すべく、假名草子中の一雄篇であり。江戸期に於ける滑稽若くは旅行文學の俑を爲した點からも重視されてゐる。こゝに引用した文例は或侍が男色に溺れ、あはや切腹せんとした戀物語の一章で、當時の眞摯と念者氣質を哀れ深き筆致によつて描かれた一文である。

扨ある方を見てあれば、若衆たちのあつまりて、源氏、萬葉、伊勢物語、古今、論語に四書五經の、難字不審をあらためて、あそばせ給ふその中に、一條殿か二條殿の御公達とうち見えて、少人一人おはします。かたちは嬋娟美容にして、せいやうけきしかけ、唇を動かせば花の物いふにことならず。一眼見まるらする人は永き思ひとなり、御ことばにあづかるものは則ち例ならぬ身と成にける。かゝりける處に、下京邊の者なるが、北野詣のそのために、立より一目見參らせ、何共物をばいはずして、たゞ茫然とあきれ居たり。まんこが玉をとられしも、かくやと思ひしられたり。かくて思ひや餘りけん、人の咎めのあるならば、とても死べきわが命、君故死なんと思ひければ、露塵ほどもをしからじ、是非に推參申さんとて、大幕攔んでうちあけて、おめずおくせず憚らす。御しらすにぞ長まる。折ふし有あふ人々達、彼か有樣おし量り。如何さま彼は公達樣に、推參申さんそのために、これまで參るとうち見たり。情は上下によるべからず。あの恐ろしき朽木の梅さへ、八重に咲き居れば、雪へ姿は荒磯の、戎に似たる人なりとも、心の花の情をば、かけさせ給へといひければ、少人きこし召されて、何とも物をば仰もなくて、御盃をぞ下されける。戎男か申やう。あらかたじけなの御なさけや。生ての名聞、死しての訴へ、何事かこれにまさらんとて、三杯酌でぞほしにける。かくて其日も暮れ行けば、いざや歸らん人々とて、輿や車を引寄せて、さゞめき歸らせ給ひけり。名殘はかづ〳〵惜しけれども、暮ひ行べき身ならねば、暇申してさらばとて、我宿さして歸りけり。かくて餘りの戀しさに、せめて一筆參らせて、若しも御返事あるならば、閻魔の前

寛永十一年寒光の上洛ならん

の家つとにつかまつらんと思ひつゝ、かたはら痛き事ともを、かきあつてぞ遣しける。(編者云、長文の七五調艶書あれど略す)

黒谷にて只今腹切る人ありといふ。折ふし御上洛砌なれば、貴賤群集の見物は夥しくぞ見えにける。たちより由來を尋ぬるに、播磨の國の人とかや、賴みたる人の供して都へのぼりしに、眼の立願有しとて、太秦の藥師如來へ參りける。向ひを見れば藥師參りの下向の人と打見えて、四五人つれだちこれもかちにて歸り來、行違ふけしきにて彼の人を見るに、年の齡十六七斗りなる若衆也。色白く、髮黑く、鬢のうへ尋常に、ゑもんなりふりけだかくして、如何にもゆうなる有樣也。心言葉はしらねども、さもあれあやしやと存じつゝ、しばらく跡へ立かへり、彼の御姿を見るに、さながら公家とも見えわかず、侍とこそは見えにけれ、よし〳〵誰にても候へかし、かゝる人を見そめしことは、偏に藥師の御引合せと存すれば、供の者よ御宿を忍び〳〵につけさせて、我身は藥師へ參りつゝ、はや〳〵立願をこそは立にけれ。南無藥師瑠璃光如來、とても御引合せの事なれば、願はくは道にて見そめし其人に、一たび契りをこめさせたび給へと懇に祈念して、急ぎ我家に歸りけり。さて彼のさまの御宿をばつけとめたるかと問ひければ、悉しくつけとめ申たるとぞ申ける、また打つけの事なれば、文まゐらせんもよしもなし、又人つてを賴みつゝ、我はかう〳〵存ずると申さん事も恥かしければ、しよせん一筆したゝめて、かのさまのいつ方へも御出の折ふし、それがしのしきに文をはさゝげんと存じ、文をぞかきにける。扨々春の花の梢をかざり、秋の月の水に澄める事も皆是けゝ衆生のため也。珍しからぬ事なれども、一樹の蔭、一河の流、道ゆきふりの袖の振り合せも五百生の奇緣とかや。それにつけて何時ぞや太秦の御歸りの折から、道にて一眼見參らせ、憂きことのみます鏡、晴れぬ思ひにかき曇り參らせつゝ、實に及びも及ばれぬ雲の上なる月影は、手にも取られぬ事なれども、うはの空なる思ひして、昨日と過ぎ今日と暮らし、明日の命も存候ねば、せめて命のうち

に此事を夢ほど知らせ參らせて、我等の心の共うちは、斯樣に思ひ申とは、露斗り此時に申さずば、又何時の世にかは申上んと存ずれば、人眼を恥ず恐をも省ずして推參を申上參らせ候と、かきてくる〳〵押卷て、彼の人樣の何方へもお通候はゝ、道にて直に上げ候はんと、御宿へ人をつけ相侍し所に、折節加茂の競馬とて、御見物に御出と聞えけり。御忍びと打見えて、上下四五人御供也。これこそ望む處よと思ひ、出立其日の裝束は、ちしろのきぬに猿猴が、水に澄める月影をとる所をそめたる袷を着、脇差はかりにて藁草履一足腰に押挾み、見え隠れの御供してこそ參りけれ。彼の人樣は明神へ御參まし〳〵て、御下向にきたはしを下りさせ給ふ。其時御草履とありければ、畏まりて候とて、腰なる草履にかの文を取添て參らする。さすが侍の事なれば、彼者が心中をや悟られておはしけん、何とも物をば仰もなく、おめずおくせず憚らず、さらぬ體にもてなし、草履をさらりと召じながら、文を受取りほゝに入、競馬見物なされ畢。かの者心に思ふやう、後の仔細はしらねども、先々文をばあけ申し、本望は遂たりと思ひて、嬉しきことは限りなく、此處やかしこにゑみ畢。漸競馬もすぎぬれば、御歸りと見えに畢。又見え隠れの御供して京へ歸り、何とか思召けん、彼者の宿所へも人をこそは遣はされけれ。扨其後にあふさきるさの事も無かりければ、兎やせん角せんとて案じわづらひ給ひけり。兎にも角にも御藥師參りの道にて、見初し人なれば、猶々祈誓をかけ參らせんと、又太秦へ參りつゝ、一夜籠り居たりけれど、さして奇特もなかりければ、御藥師へ不足をこそは申しけれ。我身眼を明にして給はり候事は、あめ山喬くは候へども、今は反りてうらめしく候。其仔細と申は、中々に見ずば戀には成らじものを、あらうらめしの眼の役やと、申心にて身のうさに、盲目に成りたらば、斯樣に憂き眼はよもあらじ。迚もかなはぬ物故に、憂き人を見せ給ふは、我身に强く物思へとや。それは御藥師樣の大人氣なし、曲も御座らぬ〳〵と、いひて、一首をぞくわせける。

かたすみにうづくみ給へうづまさのたうにたちてもたちかひもなし

などゝよみて、科もなき佛にもあらぬ口舌を申しかけたり。誠に歌にも、「人しれず我こひしなばあぢきなくいづれの神になき名おふせん」と讀みけるも理なり。扨其後我宿さして歸りけり。斯くて其日も暮ければ一間處にさし入て、誰を待とはなけれども、燈火細々とかき立て、空しき床を打拂ひ、涙片しく轉寢のおきもせずねもせでよるをあかすなどいふ歌の心などを思ひ出し、昔の人も我如くかゝる憂き思ひをやしたりけんと、問はず語りをいふ折ふしに、露地の戸をほと〳〵と叩く。もとより寢もせぬことなれば、側なる刀おつとつて、怪しや誰ぞと云ひければ、物をば何とも宣はで、歌の上をぞおほせける。「今更に身をつくしけんなにはえの」と仰ければ「あしのほのかに見つるばかりに」とつけにけり。物ごしの聲きけば、世の常の人の聲ならず、猶も怪しく思ひて、戸を開き見れば、年の齡十六七の人と見えて、下には白き御小袖に、上には黑き袷をめし。鮫鞘に赤銅作りの大小をさし、捌き髪にちまきし御草履取只一人召連れられて、緣にあからせ給ふ御姿を見れば、此程明暮れ思ひ申人なり畢。思ひもよらぬことなれば、こは如何なる事やらんと、嬉しき事は打忘れ、餘りの事に仰天し、胸打騷ぎ身も震へ、茫然として居たり畢。其後若もし樣彼の者の手をとり給ひつゝ、いつぞや加茂の祭にて文を給はりおはせしは、さもその人にてましまずや、打忘れたまふかとの給ひけれども、あきれ果たる風情にて、否ともあうとも御返事を申かねたるばかり也。やゝ暫く程を過て、大息づきて申けるは、御恥かしながら其が憚りながら奉けしなり。若もし樣はきこしめし、とくにも返事と思ひしが、風立かたの浮雲の、うはの空にや此文の、寄り來る岸のうつせがい、われては如何にと存すれば、朋輩の前と云ひ、且は奉公障もなし。思ひながらも打過る、御心も恥かしく思ひ申と有ければ、彼の人申すやうは、思ひよらずの御言葉の會釋かな、扨只今の御出は、天のおそれ冥加もなや。これと申も太秦の利生と存候へば、此世ならぬ契と存候と申ければ、若もし樣の仰には、まことに山かつの薪を負へる如くなる、如何にもふつゝかなる我身に、餘樣に深く思召し寄らるゝ事は、此

ちばと願ひ参らせ候に、これまで御出に御歪を下さるゝ、まことに夢の浮世のわざ、敵れ事やうつゝそと、思はれ申と云ひければ、若もし様の仰には、只今の御返答は心有りけることばかな。嘗言の御歌に俗や来し我やゆきけんと遊ばしける歌の心を思召し出され候か、頓て心得申たり、御歪を取納め次の間へ入給ひ、さまざまのことかたらひて、よるもふかぶかふけ渡りて、かたりはいつかつきせず、何處に心おくべきと、眼の刀に心もなく、只睦ましく頼母しけに、互につかれも知ずして、終夜の物語、千夜を一夜とせしほど世ならぬ奇縁と存候へば、御殆かしき其内にも、一入親密敷く思はれ候との給ひて、御歪と有りければ、長まりて候とて元より待もうけたる事なれば、取も敢ずに歪を取看にて出しける。先は亭主と申さんか、　　て辭退あるべしとて御歪を取上て一献参りて、扨亭主へさゝせ給ひけり。亭主歪頂戴は長まりて申やう、いつぞや假初に御文を参らせてより此方はせめて一筆ばかりをば、御返事と見るな

に、程なく東雲ほの〳〵と、空も別れに明なんとする程に、やう〳〵衣々立蕭て、立帰らんとせし時に、若もし様の仰には、さもあれ御身は何處如何なる人やらんとの給へば、猶廣の者にて候と、細やかに申ける。若もし様の仰には、箇様に申せば、我身をふかしたるやうに思召さんも恥かしけれども、今別れ候ひて又逢ひ見語らんもかた糸の、よりあふことも定めなし、限りあらねば後先のことをば語り申也。我身の事は頼み遣く檀那の情深うして、主と親しくする事は、朋輩の思ふ處、又は浮世の取沙汰も一旦りじゆんに逢ひしは、若き者の心中には、如何と人に汚まれ、爪弾きをせられんは、口惜き次第なり。假令勘當蒙むるとも此事に於ては免し給へと、度々にわび事は、人も知る此通のならひ、主と思ひながらもさてやみぬ。然りとは申せども、主の思はくある故に、親の疎もある上は、朋輩とも慰む事もなし。況やはくちの障もなく、外面へ出る事もなし。いつぞや思ひもよらざるに、御玉章に預りし、其時人の見る眼も恥かしく、如何にと怪存れとも、人かまとくも我々を、さうと思ひかけ給ふ、心もさすがいとをしく、其折加茂の祭の時、そさまのけしきは、深草の四位の少將のその姿、思ひ入れたる御風情、まことに真加も恐ろしく候也。譬へ此事洩れて、檀那の耳に入たちば、如何なるしざいに申つけ、苦しきめにも逢ふべき事、誰しら一言をはらしおはしませ。我身も逢そばとゝ思たり、是に過たる満足なし。今よりしては妄執を思ひ止まり給ふべし。再御目にかゝるまじ。箇様に申せば我命、惜み申すに似たれども、下郎の賤へに申なり。命のあれば歳月さへ、昔にも逢ふと申也。命ながらへ候はば又逢ひ見ん事もありぬべし。今此事をたのしみし人、若も漏れ聞候はばしざいに逢はんは必定也。命は前世の定り事、それは悔みは候はず、それに付てはそれ様の、御身の事を思ふ也。必亜世の習ひとて、死出の山路をもろともと、思しめされん御事を、思召さり給ひ、後世菩提を弔らひて、我に手向けてたび給へ、若も自行の有ならば、一樹の影に立よるも、

他生の縁と思しめせ、誰しも命は惜きぞや、ある歌に「君故にをしからさりし命さへ長くもかなと思ひける哉」とよみける歌も候ぞや。御様には申せとも、しせん何事候はずは、千夜も一夜も同しこと、假令高量を謂つるとも、互に命あらん限りは文の通ひは致すべし。そなたを親とたのむべし。我を童子と思召せ、契は今宵はかりなり、思召切給へ。此小袖は垢つきて恥かしく候へとも、我身を見ると思召し、折ふしは肌にも御添ましまさば、嬉しく思ひ申べし。又死たると聞給はゞ、なきあとの忘れかたみと思召せ。又御身のしたかさねを給りて、そなたに添ひぬる心地して、肌に着候はんと、互に紀念を取替し、又ひし〳〵と悲み來り　もろきは今の涙かなとて、互に衣々とりくみて、さらば〳〵と立出れば、東雲はやく明けゆけば、影恥かしく涙にて、心ならずぞなりにける。

（かくて少人は間もなく病死、それを聞いた念者は自害せんとしたが、止むる者ありて佛門に入り、少人の後を弔ひ、月日を經て後東國に下るといふのが大體の趣向である）

田夫物語　一卷　寛永――慶安前後刊行

作者刊年共に不詳である。男色女色の論を戯作したもので、頗る稀覯の珍書で、渥者はまた原本を目撃したことはないが、幸ひ水谷氏の「假名草子」にその一部を標本に收めてあるのを左に轉載する。その大意に、

文月はじめの頃、暑さをわびて作者自ら紫の庵を出、友人二三人とそゞろ歩きしけるが、其頃世上に若衆狂ひといふ事流行し、共爲には產を傾け、一命を捨るも惜しとは思はず、女色に耽るものを田夫と嘲り、自分を華奢と誇り、傍若無人の振舞をなすものあるは、誠に苦々しき事に思ひ、追かけ來りて喧嘩を吹かけぬ。此方も負けてはをらず、華奢を罵り辱しめ、互に口論果しなく、既に爭鬪にも及びなんと

「田夫物語」挿畫

女色は天理に叶ふといふ結論にて華奢者は田夫にいひ込められ、赤面しけるを機會に、主人は團扇を揚げて双方を引分け、議論も盡き夜も既に更けたれば、重ねて論じ玉へと、其場を切上げたる顚末を記したるものなれば、勝名乘を附して『田夫物語』とは名づけしとある。田夫野人の語の如きも恐らく本書あたりが、その始めではなからうかと思ふ。是又男色流行の風尙を知るべき一資料である。本文の片鱗を左に、

文月はしめの頃、のこるあつさをわひて、いふせきしはのいほりを出つゝ、ともとするひとひとりふたりするを見て、主人は先づ書くと双方を宥め、左程互に申分のある事ならば、若道女道何れが勝れるか何れが劣れるか何方にても理の洩き方は堪忍し、理の當然なる方に從ひ玉へと說き勸めければ、もつともと同じ、是より女若兩道の利害得失を論じて、口角泡を飛ばす、主人は行司役にて澁團扇を持ち、堤の緣に腰を下し、双方のいひ分を聞るたるが、男色は道に外れ、

いさなひ、さとをはなれ、河そひのきよきなかれをとめて、手あしをあらひ、人なきまゝに、たかひにたわむれことをいひつくす。なかに、そはなるものかたりしは、さためてめん〳〵もきゝつらむ、われかともとするもの、たれかれ、このほとは、わかしゆぐるひといふことをしいたし、くれる、てあしをみかき、みをたしなみ、こゝののきのした、かしこ（以下缺文）

いぬつれづれ　二卷　承應二年刊

作者不詳、例の徒然草に倣ひ、稚兒若衆の心得となるべき事を教訓めかしく書いたものである。先年國書刊行會本「江戸時代文藝資料」第四に收めた際に、本文中に、編者云、犬短歌と兒教訓とは異名同書なるが如しと言つたは誤りで、全く異文なることがわかつた。事の序に玆に訂正し置く。あの當時より十數年後の今日、今尙ほ本書の刊本に接する機會がないので、本書の卷末に添へてある。「若衆たんか」と「犬たんか」との相違、又刊本にもこの若衆短歌なるものあるか否か今尙ほ疑問とする。左に本文の一二と若衆短歌とを引用して見やう。

一、少しの事もよくあんじて言ひもし、なすべき事也。ある美しき小若衆ありけるに、又あるものゝ深く思ひ入て、言ひみたりしが、時しも夏の頃かや、うちやはらぎたる返事にて、その夜ゆきてあい語り侍りし。夜も未だ更けざりしに、若衆うちまどろみけるを、堅くたま〳〵に呼びよせて、か程のみじか夜に、思ひ入淺くもいとねる事とは思へど、驚かすべきにもあらで、つや〳〵あかす程に、曉近くなりて、目や少しさめけん、二つの手をさし出し、大のびして、まだ鐘は聞えずや、かく夏の夜も長きよと、いとなつ

犬つれ〳〵物語

かしけに言ひしかば、何となふ心の中我身恨みられて戀しさも少し劣りたりしとその人語りけんべりし。

一、短歌といひて、若衆の事を書ける小しき草子あり、その始めに、「みるからに誰も心を慱ますは、かたちはあまりすぐれねど、身もちやさしくはなやかに、心け高く大やうにて、足のはづれ美しく」などと書けり。面白き小ざうしなり。若衆は常に之を見る。又犬短歌といふものあり、その初めのまづ第一に、「かのみちのそのたしなみは嫁にて、人にはすねていぶりにて」とかけり。（按ずるに、犬短歌とは宗祇作と稱する「兒教訓」と同文なり）

承應二年刊「犬つれづれ」挿畫

一、ある片田舍の譯知らずが問ふて曰、此頃の人々のいろ〳〵沙汰しても遊び給ふ若衆狂ひといふ事は、何を以て風流となしたまふや。答ていふは、心の情を花として、互の思ひ入り深きをもつて風流とすと。又問ふ、此道を若きよりすかで、遂にその心を知らず、いまだ六七十に至るまで、人の上をよくみるに、たゞ友のしたしきのみと思ふは、ひが事にや候らん。又答ふ、かつてそれにてはあらず、一とせ二とせの中にも、僅か一ど二どあるひは一どなき事もあり。されどもその事を思はず、たゞ心ばかり情なりと。又いふ、心の情ばかりを風流の花とせば、互に年寄、命の絲るまでも言ひかはし、事たがはず親しかるべきに、必ず此道の知音、末を遂けてなかのよき

は稀なり。品かはり風こは〳〵しくなれば、心に秋風立ちて、いはれぬ慢みなどいひいで、はて怪物をも言はずなりて、ゆきゝもたえ〳〵になり、されば年若き時ばかりの物と見ゆるは、たゞいかにもしてて、やすらかなる時□□□ばかりなるべし。その事をいはず、よき樣にとりなしいふなるべし。野山四阿舟のうちにても、□をしたる人をば命のある中は思ひ出ると見えたり。たとい二とせ三とせいひわたり、數多たび話しても、心の情ばかりは忘れ易しと見えたるは如何にと問ひつめられて、えいらへもせず、後それは汝がいよ〳〵此みちを知らざる故なりといひすてゝ、逃げはんべりしと諸人に語りて可笑かりき。

若衆短歌

見るからに　たれも心を　なやますは　かたちは餘り　すぐれねど　身持やさしく
はなやかに　心け高く　おほやうに　手足のはづれ　美しく　常に空燒き
たきしめて　身をも髪をも　にほやかに　ふりも心も　人なれて　心にあふも
あはぬをも　あい〳〵としておとなしく　月を哀れみ　花ながめ　たゞ何事も
いろふかく　おもひ入たる　人をこそ　知るも知らぬも　あぢきなく　思ひまどへぬ
こゝちする　なりも心も　すさまじく　しほれん人は　いやでそろ　あまりしだるく
ぬれ〳〵と　しみたる振も　氣にあはぬ　あまりやさしき　ふりをして　心のおほき
人もうし　たゞ自ら　なにとなく　物の哀を　しる人は　一夜なりとも
かたらひ〻　たのしき時を　すごしたる　後のあしたは　たまづさに　思ひもかけぬ

こゝろばへ　夢か現かと　ばかりにて　覺束なきに　あさ〳〵と　書とゞめたる
水莖の　をかれぬ儘に　とれはてゝ　悔ゆるばかりに　あらんこそ　殘りおほくも
あるべけれ　一夜や二夜の　ほどまでも　あまりに人の　うちとけて　なれ〳〵しきも
などやらん　心あさくも　もしは又　三夜ともならば　また人の　心ふかくも
餘りに若き　人などの　物をも書ず　歌よまず　學問なども　せぬ人は
殊の外にぞ　思はるゝ　又は酒宴の　折ふしは　一さしまひて　なにとなく
立ちたるふりぞ　目にはつく　殊更歌は　おにがみも　哀れと思ふ　みちなれや
又武士の　こゝろをも　慰まぬるを　つらゆきも　書とゞめたる　事なれば
などか心を　かけざらん　かたの如くも　しらざるは　あまりに情　なかるべし
十四五六に　なる人は　春の花とも　身を思へ　秋の月にも　なぞらへて
心にかけぬ　人をさへ　ねたくも恨み　はつべけれ　盛り過れば　朝がほの
花に匂ふも　日にそへて　妄へゆけば　何事も　思ふ甲斐は　よもあらじ
此ことはり　を思へたゞ　あな淺ましや　人の身の　二たび若き　事はなし
世に美しき　人なれど　餘り心も　どことなく　相撲たちぎゝ　つぶてうち
小袖肩ぬぎ　かたびらに　かたぎぬや　小ばかまの　彼方此方は　ほころびて
髮かた〳〵に　おしゆがみ　大むねあけて　手あしには　土うちつけて　爪きらず
身をも清めず　かねつけず　楊子つかはず　むざ〳〵と　物知り顏の　りこうして
そら歌唄ひ　うそぶきて　曉しき子供と　ともなひて　それに倣へば　いふ事も
何かやさしき　事あらん　かくて過なば　いつをさて　浮世の中の　思ひ出に

忍びかくさん　あさましや　今にとしより　腰かゞみ　しはうちよつて　眉白く
耳も聞えず　目も見えず　鼻うちたらし　なることを　我人いかで　のがるべし
身も清らかに　美しく　人のこひしと　思ふとき　よの思ひ出に　なさけあるべし
たん歌をはり

承應二年癸巳正月吉日書記之開板者也

高田彌兵衛

情記目次

情記　一巻　明暦三年刊

作者不詳、前掲の『犬つれ〳〵』系統に入るべき稚兒若衆の心得、若くは仕かけ方を個條書に柔にしたもので、中には噴飯に堪へないものもある。内容は次の目次によつて略推し得られる。

一人のほるゝ次第付目もと見付の事　一初めて狀を請返事の次第　付同心の事無心同心返事
一間の使の事　一咄數の事　付重て御咄有べきと思召方へ狀の事　一御寢樣の次第　付夜いたむる次第の事　一歸る朝御いとまごひの事　一度はなし其後いやと思ふ次第　一ちいんする次第　付間あしくなる事　一物をくるゝ事　一念者をつる事　一心持肝要の事　一かたしけなき御文躰の事　一風呂入の事　一食物の事　一さかつきの次第　一茶の次第　一病中雨中見舞の事　一藝の事　一若衆御病中の事　一よろつ御たしなみの事　一第一心中の事　一口中の事　一衣裳の事　一かたぎぬ袴の事　一上帶の事　一下帶の事　一扇の事　一鼻紙の事　一手拭の事　一匂袋の事　一揚子の事　一巾着の事　一ねさまたしなみの事　一爪切樣の事　一ふりたしなみの事　一匂ひの事　一目もとの事　一よみかきの事　一毛の事鼻毛の事　一耳の事　一髪洗ひ樣の事。

「序文」

時日をうつさむもめさまし、春の花の咲きあへぬ、いつしか鏡の波に驚く、誠や昨日は今日の昔、今日あるとてもあすのことを誰人か知らんや。たゞ人は風の前のともし火、朝顔の露に同じ。つるには老の白頭となる。就中、御盛り三四年には過ぎじ、いなづまのかけとまらぬは光陰、長き浮世に生れ來て、人の心をよするうちに、御いたはりも候へ、年たけたれば、昔戀しくなるものなり。行く水にことならず、もゝさへづりの春はくれども、昔に還る秋はなし。さてこそ、

ゆく水とすくるよはひとちる花はいづれまててふことをきくらん

しかありながら、古を忘れかね、遲櫻初花よりなど、いふものもあり、御同心あるとても肌はたうりの梨の如し。よろづ昔にかはる事ばかりにて候、人は一名代、名は末代にてあるそとよ。執心深きものあらば、朝に白骨とならふと、暮には御はなしあるべく候。思へば一寸先は闇、この道は天地開闢のみなもと、いざなぎいざなみの代より今にすたれるや、いやしきを嫌はぬものと、釋迦ものべて置かれた。

曉しきに情たつるものならばしづが伏屋に月はやどらじ

これにつけても、若衆たちんは、行住座臥に、佛の衆生を救はんと諸法にのべ給ふ如く、心を碎き、人のかほもち御見つけ肝要、あけくれ戀しき床しと、空吹風松竹を動かすも、これ君かと思ふ拂ふし、向顔にあたはねば身を徒らに夏虫の鳴くばかりなり。人こそ知らぬ苦しひの、身を御たすけあらば、七堂伽らん供養に勝れり。誠に諸佛も最覺し召されん。いよ〳〵萬事につき、胸中御覽じつけられ候事肝要の眠なり。返しても〳〵君を思ひ、風のそよとするも心にとまり、ねやもる月を君と思ひ、涙の床に起伏、みちはしもなく思ひかねて、ひとりこがるゝ身などを哀れと思はぬ御人は、たま〳〵この界へ生れきて、ことに鳥類畜類には劣れり。そうじて人間は悲願の二字にてきはめたるものなり。夏の虫の飛で火に入るは如何思し召候や。執心かけ申身は、惜しき命も君に奉り、五體を煩はし、四十四のふし〳〵不自身にしみ渡る程に

なければ、これとてもあからさまも申あげぬものぢや。此度は必書狀を進上申べきと思へとも、向顔にあたへば一言なく、そのふみを引裂き火にくべ、幾千萬となく心を惱ますこそあさましけれ。それを御かはひがりなきは、海棠の花香なきに似たり、第一むごき御心中あらば、沙汰の限、中々言ふは愚なるべし。

男色二會書

羅山のとはの言ぐさ

よだれかけ　六卷　寛文五年刊

本書著作年代は、卷數によつて異なる。一二卷は慶安元年の年號があり、三四卷には同翌年の年號がある。第五六卷は承應二年の序がついて居る。よつて刊行は著作當時より約十七八年も後れて世に出たものと見なければならぬ。一寸他に見當らない例である。著者は樣條軒とある多分僧侶の手に成つたものと想像されるものである。本書は男色に關する稍傍系に屬するもので、一二卷は手工坊の由來、傀儡子淨瑠璃茶道に關するもの、三四卷に酒の由來や酒に關する議論、五六卷が、男色に關するもの、一名『男色二倫書』と斷り書をして居る。內容は本朝天神七代より衆道の始まること。異朝若衆名寄、あしき念者の戒しめ、若衆歌舞伎禁制の事など、凡そ十五項に亘つて細叙して居る。男色に關する文獻書としては可なり重要な役目をする貴重書の一である。本文の一節に、

若衆にも三の品を昔は定めぬると言へり、十六才を若衆の春といふなり唐土の人もかく定め侍ればにや、附錄にもしるし置けり。春は盛りの衆言なれば　十一より四迄をつほめる花になぞらへ、十五より八を盛りの花と極め、十九より廿二迄を散る花となん定まりし。此ことはりは羅山のとはの言ぐさとてある人は語りき又十二歳より二十迄九年が間を三つにわけて三世に比し、三時の心を教らる事あり。十二より四迄の三年は現在にたとへて主童と書なり。此三年のうちは、いかにも心をわらゝかにもちて、ひねこびさかしだたぬを道とせり。是主童の文字の心なり。又十五より八迄の三年は未來にたとへて、殊道と書なり。此三年のうちは見るにつけ聞くにつけても、皆心を迷はす時にしあれば、心の水を誘ひくるものは多しと雖も、淺澤深きえにしをよく酌しりて、心の水を濁さず。情の道すなほに意氣込の幽玄なる道とせり。是殊道の文字の心なり。十八より二十迄の三年を過去に譬へて主道と書く也。此三年のうちは、いかにも大人しく、互に道を助けて、前の事過まらざるを道とす。これ主道の文字の心なり。此三世をすごすを若衆の一むかしともいひ、又は一期ともいふなり。又白玉の草子には、七歳より二十五迄を若衆の一期とせり。此道を好むものは、三十迄をも用ひきにけりとあり。

白玉の草子七歳より廿五迄を若衆の一期

誠に月の夜、雪のあした、花の下にても、清らなる少年のうちまじりて遊びたる、萬の興を添るわざなり。又靜なる日、そゞろに若衆の入來て遊びたるも、心慰む。旅のかりや、野山などにて、ちらと見たるも目さむる心地すれ。餘所ながら時々通ひ來る中こそ、年月經ても亦絶ぬなからひともならめ。あからさまに來て、さしかはさん玉の手、速理の枕、珍らしく嬉しからまし。

弐家小姓と歌舞伎野郎

九、武家小姓と歌舞伎野郎を描いた繪本

浮世繪繪壺　一卷　天和四年刊

本書は菱川師宣筆として天下に有名な繪本の一で、民間婦女の風俗や、遊女の常態、武家小姓、歌舞伎野郎の艶麗な風俗を寫したもので、當代の世態を代表すべき人物繪壺しである。鼓には男色に緣深き武家小姓と歌舞伎野郎の姿繪並に竈頭の詞書を抄錄して繪本の代表とする。これよりさき、延寶末に古今役者物語の如きものこの系統に入るべきものであるが、活字に複製に普及されてゐるから採錄するにも及ぶまい。更に延寶か天和貞享頃刊行されたらしい菱川門下の古山師重筆の「役者繪壺し」大本三冊も複製本の世に

行はれて居ること世間周知の通りである。大部分役者の繪姿で、竈頭に役者のせりふを附してある。其他元祿期に入り、鳥居派の『古今芝居百人』『風流四方屏風』等役者繪本類が續出するに至つた。因に本書は稀書復製會本に據つたことを附言して置く。

武家と小姓

遠國より殿の召連れられし小姓、お江戸へ參勤して、始めて長屋住居をして、國元にありし時は殺生抔して野山に日を暮せしが、今お江戸の長つめに氣もつきたりとて、御機嫌を伺ひ、終日のいとまを乞ひて、かなたこなたへ遊山に出給ふ。召連られし家人に物耻かしく問ひ給ふは、國元にて聞及びし山谷とやらんへは、いかなる方へか行くやらんと問ひ給へば、若黨これを聞て、さて〳〵かやうの義を國元の御ふくろ樣へ聞かせ申したらは、さぞ〳〵おとなしくならせられたとて、御滿足なされませうと申した。

歌舞伎野郎

藝能は互に磨きあふがもとよりその道〳〵を心にかけて學びとりし中に、上手あり下手あり、世のおだやかなるにしたがひ、人の心も寛々として遊山のみを好む人多し。こゝに島原狂言壺しは、人が人の眞似をして人をうからかし、心を慰みぬ。專今の世に流布して、見物の袖をまねく。さるによつて京大阪の野郎役者、お江戸に徘徊して諸藝の威勢を競ふ、その善惡を極めて高金を望む故なり。

野郎すきなる男、歸るさの道中を見んとして、堺町の辻に立ち休らひて、今や〳〵と待所に、年の比二八計の野郎とも、肌には白無垢黃無垢、上には縮緬さや絵子、茶宇島羽二重に、それ〳〵の鹿子絞、鹿子ちらしに紅の裏、襟元揃へて着しつゝ、はつはかいらき、ちりめんの花を散らした大騷差、金鍔をうちて

京大阪の野郎役者江戸に徘徊
堺町野郎の風俗
江戸詰武家小姓

菱川師宣等「浮世繪」抔畫

おとしざしにさゝれつゝ、玉ぶちの編笠を深くきなしつゝ、連れし草履取、羽織を肩にうちかたけ、八文字踏み揃へ、わが住む宿へ歸りける。

花の都に島原といふて流れを立し女郎の街あり、かの所へ東國より始めて上りし男伊達、國の風儀を出し、なまり言葉にてりきみ出し、さま〳〵の口舌をいひ散らす。それを學びて今こゝに、島原狂言と名付て、似せ奴を出して若衆と意氣地の爭ひを狂言にするよりして、此時に至りて奴作兵衛、多門庄左衛門などいふ上手の、とりわけ近き比坊主小兵衛とて誰に勝れて上手なれば專世にはびこりぬ。面白きとてこれを見ぬ人なし。

時しも今宵三五夜中の新日の色、二千里の外まで、古人も船に乘りて出給ふ。ましてわれ等如きの野郎も、いざ月見にとて友どち屋形船に打ち乘りつゝ、淺草川の流れ

島原狂言
奴作兵衛
庄左衛門
坊主小兵衛
野郎の舟遊山

野郎の屋形舟に群がる見物の舟

を慕ひ、かちより離か待乳山、業平橋にさしかゝり、墨田川へ浮れ出、梅若塚とのの跡を慕ひ、さゝなどのうで歌三味線などに遊びし事、古へそうしせん舟にて赤壁の麓に行給ひ、酒を飲み歌を唄ひしもこれには過じとて、互に亂れあふて酒をのみけるこそ面白けれ。

こゝに堺町芝居にて、さま〳〵藝盡しゝて見物を招く。頃は世に踊りはやりて、上下萬民寵愛の子に裝束を改め、拍子を揃へ、つゞみ大鼓笛三味線にて囃し立て踊りければ、海上に屋形舟を浮めてその中にて躍る。入日に輝き、見物の舟數千艘とりまき群集をなす。その外上つ方へも召出され、踊る子供あり、しほらしきありさまなり。野郎これを學びて、それにさま〳〵の口說を加へて踊るなり。

右之一冊大和繪は四民の形像を菱川氏筆こまやかに書れしを、悉眼にも賞美して令板行出之、跡より菱の川ながれ、うきに浮てかゝれし石木花鳥繪畫しを板行して出すものなり。

大和繪師菱川氏
板本彫形屋三左衛門

天和二二年子正月吉日

十、若衆歌舞伎と野郎評判記

役者評判若くは野郎評判記として最古と稱せらるゝ明暦二年の『役者の噂』があると聞くのみで、未見の書である。其後京都の野郎評判記で、前後二年の『野郎虫』が、今日では現存中最も古いものとされて居る。ついで寛文二年に江戸役者評判記『剝野老』が、江戸板評判記の最初である。同三年伊勢古市の野郎評判記として『赤鳥帽子』が續いて出て居る。以後七八年間この種の出版が見えないが、或は出ても傳はらなかつたものかも知れない。寛文十一年に江戸板『垣下徒然草』が出た。更に延寶二年『役者丸裸』

井原西鶴作西吟等識

『野郎けぢ〳〵』『新野郎花垣』などが續出してゐる。これと前後して、西鶴作『難波の顏は伊勢の白粉』と稱するものも出てゐる。貞享元年には『野郎三座詮』同三年『難波立聞昔咄』同四年『四座評林』『役者卯月鑑』『野郎立役舞臺大鑑』此年正月西鶴の『男色大鑑』八卷の如きは特筆すべきである。これより元祿期に入つては殆ど枚擧に暇なき位例年遊女評判記同樣二三種は下らない盛況を來すに至つた。そのうち主なるものを擧ぐれば、四年『蕉張草』二冊、六年『野良鬪相撲』『雨夜三盃機嫌』二冊、『四場居百人一首』十二年『延命字學集』十三年『野良委記詳林』『芝居一代男』などである。元祿以前の野郎評判記二三に就ては、本會機關誌「奇書」並に拙編「書物往來叢書」演劇篇中に既に紹介してあるが、尙ほ洩れたるもの一二を採り、他は全部割愛し、從來活字にならなかつた代表作二三を左に採錄する。

道頓堀出替役 **難波の顏はいせの白粉** 三卷 延寶 天和刊

本書は、原上中下三卷であつたものが、其中の二卷一冊現存してゐるもので、本文中に「三芝居子供推量物語三卷續」とあるのが、或は原の書名ではないかと思ふが、恐らくこの二卷は大阪の役者丈で、上卷は京都下卷は江戸の三都役者評判記ではなからうかと思はれるが、併し果して然るか否かは全く想像に過ぎない。刊年は多分延寶か天和頃で、筆蹟は一代男の板下を書いた西吟に酷似してゐる點、その文體の西鶴調なるより、著者は恐らく西鶴ではないかとの說は肯綮に値ひする。尙ほ本書の原名は、恐らくこんな長い題名ではなかつたらうと思ふ。これは單に大阪に關する部分にのみ附した題名で、全體を總稱した外題ではなからうかと思はれる。これも推測に過ぎんことは勿論である。今左に二卷の卷首に出てゐる、上村吉彌「若女形」と同上村辰彌「若女形」の兩人の評判記を擧げて置く。

人々の御句狂歌をあつめて感吟せしめ、心知おもしろく亂れゆくまゝに、有事ない事、耳はどちらなりとあ

三芝居子供推量物語三番續

若女形上村吉彌

世の字の紋所女形の開山

川晨軒

同上村長彌

たるを幸戀には目がみえぬ減多的、かいかなくつてあだなるかるロ狂言、御望のかた〳〵御見物可被成候。

三芝居子供推量物語三卷續

附りわるふいふて藝にならぬ事

初出の子共朝の名を夕に替り狂言跡よりの仕組に極候。

難波の顔は伊勢の白粉　卷二

道頓出替委

嵐　三右衛門　座　若衆方

鈴木平左衛門　若女形

上村吉彌　若女形

順風の帆懸舟、ゆきの夜の火燵、冷酒に花柚、風呂あがりの一二寢、算用しらぬ親仁、こはひ夢の覺たの、よびいけて息のするの、脇指のこしらえの出來たの、月見のあかり雨、太夫もとの足揃、何れうれしき物の揃なり。上座に黒繻子袖ゆたかに、世の字の紋所あれば　女形の開山あの上村はと。申いかにもいかにも何をさしてもあかりをはしるはやひ事、しづかなる事、おひめさまにも前だれさしてもうつらぬといふ事なし。大狂言にながてかなはぬ物は梅さくら松の作りもの、稽古はじめより浮雲げがない。

和州川思軒

戀衣いはで亂れしかみぞとは袖にうき世の世の字でもしれ

上村辰彌　若女形

ほのかなる空おそろしや、御物もどきとも云つべきかりの香ひ、銀はんをなん朽木がくれの月影と見立、うば玉の一つかみあるおめでたしと、こんがうが手になでつけさせ、切いれの浪、本金のひかりをみがく玉

一哈

三都若女形の評判記

昇平鼓腹の御代

津姫もかくやといはぬはなし。大やつし、歌に懸つて慕ばなれの風情は、かのほうらくの舞をあざむく。少内証に小町風の所ありと云人は、あちのとをらぬゆへとぞ、村あじの立のびたる姿もおかし。ころじをれ目もとの海より見物滿て、今一度出せ〳〵と是を歎き、あみ笠傾けてなきわたり、首長ふして生うつしの鶴、此きみの盛は五百八十七まがり、玉を通せし蟻の如く、集まる人にもろ聲にいよう〳〵。

泉州一哈

うす煙たつやに通ふ伽羅かつら吹上に見るわか女形

雨夜三盃機嫌　三卷　元祿六年春刊行

三都に於ける若女形の評判記として、最も著名なものである。作者は京都嵯峨の山麓に隱棲する無轍軒と呼ぶ色の諸埼を卒業した通人の筆に成つたものらしい。書名の三盃は水道、江戸、一盃、難波一盃、白河「京都」一盃の三水を飲んだ氣持であるとの寓意であらう。左に頭書評判一二と顏見世吟以下の狂文二三を採り、畫像其他の狂詠は全部割愛した。

夫天高うして物にさはらず、地廣うして物にかまはず、其中になれるものは蠶、蠶は生とし生るが中に妙なり。妙なれば種々の不思議をなす。斯に我朝年改り、富士の蓬萊を嚴り、住吉の門松を立渡す。四海波治り、砂は巖となりて、吉三鳳の衣を肩にかけ、金は山となりて吉彌流の帶を腰にまとふ。所謂聖の御代には腹鼓を打て謠、口笛を吹て舞。今八乳に糸をけへ、三地に調をしめて、扇を開き袂を翻す。是豐なる世のしるしなり。若飢渴あらは、呵夷りても見人閑人なければ、省も揃も孤露離山椒味噌、鹽米麥みちみちて、犬猫も鬻かぬ時に臍の緒をきるは、なんぼうめでたき事にあらずや、將芝居の行はるゝもとひ、つかへのさがる始めなり。蓋女男の姿をわかつに、鳳凰孔雀其外鴛鴦雄雞まで、雄は妍よく雌は醜し、是男色

女形の風姿は都女郎にもなし

の勝れたるゆゑん也。今飛きりの女方の最情とりなりは都女郎にさへなし。況や鄙に於てをや。されば室町邊大福長者の子に、敏と行ぬけたる風流男あり。此野郎界へ吝遊をかへし、多くの箱をうつす。父是を追打、悲しや嵯峨山の麓に思はずの弱腰居、垂蘆軒無幽と名づく。予嗣染のよしみあれば、雪の暮辻蕭をはやめて、こゝなりけんと笹の徧戸を扣けば、無俟の腰者手づからあけて、是へといふ物あばれなる體、昔を殘す玉章にて鶴をはられたり。さて何を賞み日を送り給ふや。幽のいはく、杉の葉楢柴なんど折くらべて藥鑵の尻をふすぶる片手に、いにし惡性のわすれがたく、ほつ〳〵かいやり捨たる物をとて、本古籠より出すを見れば、浮世の色の大よせ。狂か、謡か、平仄とやらんにはかゝはらず、唯口まめなり。予無理に懐にして歸りぬ。つく〴〵歳をのし吟ずれば、甘き物を獨で喰ふやうなり。こは本意にあらず、一切衆生の野夫たちへ喰らせん事を。又は三ケ國に渡り、安からぬ人のためにはよき家土産と思ひ、櫻にあづけつ。實にや水道一盃、難波一盃、白河一盃、此三水を呑まぬ人の、ならぬ事ども冷しく、其品々を定めたれば、これなん雨夜の三盃機嫌と名付侍らんか。

木笛庵復牛

水木嵐之助
諸藝三國一

干時、元祿六、若水日、浸筆於賀茂川流

木笛庵　復　牛

評曰

水木龍之助　御色飛きりとはいはれず、雪のうちの梅なり。諸藝三國無双、ことにけいせい事、御姫様又は曉の女にしていやしきわざ、若衆がたにてふらせても、のこる所なし。しかしけいりこうすぎて見ゆ。是は拍子に生れて口給へ口、とかく今時の上村吉彌ともいふべし。扨御内きのわけなや〳〵。

櫻山林之助

雨夜三盃機嫌口上

元祿年刊「雨夜三盃機嫌」挿畫其一

櫻山林之助　御色遍櫻、諸藝日本無類、せりふもじぶんにつくり給ふ、其とばの情ふかさうな、うつりふだうのつめひらき、我物にして今のよの若衆方のたて物の手本成べし、しかし御かほにしわ折々見ゆ。是は生れつき也。たゞをしきは入あひの花、されど追付立役になられて、幸左衛門などにかたをならべ口、扨さかつき事のこうしや〳〵

口　狀

東西〳〵、扨御理を申上ますは、序よりどれ〳〵も面白からぬ事ども、殊に新板の儀で、文字何か前後がちなること皆大やうに御見物あり、判本は申に及ばず、批判の面々いかほどかありがたふ存じ奉ります。されども若衆立役其外御剛染又は御最屬にも黒召者多きに、何とて此仕組へは出さぬぞと御腹立のかたもあるべし。さほど氣の通らぬ私等でも御ざらぬ。且は世間の目水精に打まかせ、其色共藝の立ふるまひを以て、大かた御評判の者共を入ました。されは此道の開山藤田小平次申ますは、唯奇妙物は役者なり。先私宴を得ず、古嵐三右太刀打がならず、とかく一色に飛きつたる所あれば、是を上役とす。況狂言により相手により、一月半年の間にも上手になり、又は勝たるも座組仕組により秀たる事もいたさねば、潤と落ちてみゆるもある筈。こゝが白人のえしらぬ所也。併て此外三ケ津に骨切と云も何程か

此書にもらせり。それは今時簡略の折から、か様の物は三杯機嫌で御覧有、やがて澁紙にか書狀にかあそばす分もなき一旦の笑草なれば、つまる所が錢礫也。只かさ高になふて然る直がやすく、うれの早きを待まるらせ候。若我に似たる大隈馬髻あらば、追付仕組をかへ、子共立物の殘れるを御つかひなさるべし。次に第二當流の狂哥、是に出ますは藤十半左其外十二芝居の重役不殘罷出ます。其息込の詩に移る所心を付らるべし。次に第三活計濤附たり態晩の夢。此儀は殊の外手をこみ、あやぎれのいたしにくき事共取集たれば、眼ゑ賦りそこ〳〵に氣を付、細な所を御一覽あれば、疾と御慰にもなりまするで御座ります。彌其元御神妙に仰合され、明るより早々御買くださるべく候。切に至り草刈の辭、跂是が慾やう樣への御暇乞、左樣に御心得なされませい。

（編者云、中卷に坂田藤十郎以下三十六人の「當流狂歌」と題する狂詩あれど採らず。）

同上挿畫其二

恨男色短歌

我等重レ色遊二傾國一　頃變レ氣逐二男色鄉一
二階高處敷二花席一　樂器風飄處處狂
緩歌浸舞合二絲竹一　盡日遊興看不レ長
木戸太鼓動レ地節　東西行離各茫茫
三日以前爲レ掛置　食同志連麻階麻
誰不レ生二若衆一產レ女　爲レ瀧床入和語芳
在レ銀顯山頭麋鹿　在レ命顯池中鴛鴦

柳髪桃顔縞十歳　此恨綿綿何日亡

美少國歌

可レ愍河東衆道市　黄金用盡幾人僵
頭踏孔子又伯陽　竹林腕利毫揮レ玉
論聲壓レ身玉村艶　坊主殺耶寳二高唐一
律疎者輙晒大將　金支二北辰一滅時裏
無何馳走別天地　顧レ控戀慕易二本望一
阿娜濡城芝居遊　玉半呑顔樽無レ當
一返遊吞于二此界一　富買二東山一一黄粱
自レ是洛中諸惡性　豊屑二西施與毛嬙一
振處片レ我水木辰　野暮天成二粹骨張一
夢不二結敢一部郎契　不レ重レ狂レ女重二野郎一
頂レ星郊原藁莊林　人間萬事無爲場
題二陰間一或云二飛子一
鳧水濯レ身襠褓中　可レ悲恩愛一時空
間鍋宴長只居睡　編笠畫傾無二腹允一
早爲二太夫一懷二役者一　朱勤二陰子一憂二客衆一
曾臻二夜食一不レ握レ箸　人說二錢銀一何爲レ遷
私語床移否氣味　數書文體起二頭風一
隙時猿眼火車頻　寢覺狐疑大靈衷
麥手經回邊鄙愼　芝居方遠在江通

同上挿畫其三

蠅尻に題す

此町年季明暮樂　主掛恨數鳥恥餞

題二蠅尻一（彼里云二若者一或金剛）

非レ僕非レ牛又非レ雲　且向二親方一高二鼻筋一、不調際減多公事　及利時下手慇懃

因レ雲飛回如二蠅集一　見レ紙這蹲似二羊群一　能得土足赤頬類　一琢二磨水精君

愛二野君一說

世界男女之花、可レ愛者甚書。大坂藤屋伊左、獨愛二夕霧一。自二中古一來、世人甚愛二地若衆一。予獨野郎之出レ其色一而不レ染、濯二化粧一而不レ妖。心通氣直、不レ曼不レ泥香遠益、清、勃然皇華、可二近觀而愛一レ不レ可二濫褻一。予謂、傾城者牡丹花也。唯若衆者紫冬花也。野君者梅花也。噫愛二傾城一、身代瓦解。名高者伊左、後鮮レ有レ聞。愛二野郎一、世帶蕭瑟、頓的同レ予者何人。愛二地子一野事子、宜乎衆矣。

同上　挿畫　其四

牧童の辭

牧童曰。推人不レ凝二滯於物一。能與レ生推移。親達皆堅。何不レ爲二其作顏一。屈二其腰一。一門皆醒。何不下語二其樂一而噇二其分一。何故高邁深壺。自追出爲。無轍曰。我知レ之。新押者必乘二三枚肩一。新揃者必芥二數兩金一。安能以二身之寬濶一受二物之煩約一者乎。寧入二此澤一。食二於鯉鮒一。安能以二破落理艶一請二世智一。異見乎。牧童莞爾而笑。扣レ牛而去。乃歌曰。四條之水呑兮可二以遣二吾銀一。四條橋渡兮。可二以濯二吾足一。遂去不二復與言一。

無色徒然。對二三盃機嫌一。不レ言不レ笑。耿　酢　如二石投一水。抹香先生。讚レ眉云。男龍道者。所二以孔釋嫌レ之。朱程戒レ之也。予大息云。此諸埒哉。非二小人所一知。來前。啓二汝蒙駑一。夫天道知理不レ過二五常一。五常不レ出野郎界一。故錢右過此燒手一。露レ火打レ金不二萬芥一。物哀從レ此知。所謂仁道也。琢レ城立レ張。上詰有二下氣一。所謂義道也。延二三指一和二卷舌一。和爲レ貴。所謂禮道也。知二諸品之品一。不レ食二手管之管一。雀入二水一爲レ鮎。野夫入二四水一爲レ飾。所謂智道也。斷レ髮初會床一、落二指貧乏屬一。捨二金山屋階一。沈玉浪屋杯一。是色顯レ外示二底心一。所謂信道也。朱之若二男色篇一五割引者也。宜哉三水。於二此道一識二初心之垢一。外二算盤之桁一。嗚呼痩牛子。艸二此文一。非二小盆一。寫流二分於二千載一。元祿癸酉春正月之吉。少嗜堂布川　販。

板本夕顔宿遺

古今四場居百人一首　一卷　元祿六年刊

本書は市川團十郎以下百人の名優の姿繪を主とし、頭書にそれが品評を加へ、畫像に百人一首に擬した狂詠を試みたものである。本書の原本は關東大震前は日本に二部あるのみと稱せられた珍書中珍書とし

て矢釜しかつたもの、一は東京の安田松廼舍文庫に、他は大阪の雅俗文庫に、前者は言迄もなく燒失し、今は雅俗文庫舊藏本が現在は東京帝國大學圖書館に移管されてゐる天下の稀本である。本書の價値は無論鳥居清信の役者委納にあるので、評判記としては左程重きをなすものではないが、かく有名となつたは、出版に際し、當時曉しき河原者を小倉の選に模するは不都合であるとて改題を命ぜられ、「古今四場居色競」として開板したが、何故か又もや絶板を命ぜられ、印本は勿論板木迄も沒收されて仕舞つた。左に序跋と本文挿畫一二を採る。因に大正三年演藝珍書刊行等から本書の翻刻本（原本安田本）のあることは世間周知の筈である。

元祿六年刊「古今芝居百人一首」挿畫其一

古今四場居色競百人一首後序

色はいろあるをもて色とす。花なき梢の木男むかふ葉まはらの姥樓、何を思ひ出の春とやせん。月雪のあした夕さし擔の鴻の池、行かふ振合には、八攻倍のかほり、假なる色にさへ六根のときめくといへるも、いろあるが故なればなり。往昔二柱のめぐり初めの打出しなりしを、鶺鴒の尾おもしろおかしきに感動して、今人倫の一太極となれり。それを一轉して玄の又玄、衆妙の門、忽然としてしりへに有ことを、三國傳來つかふまつり、二葉の色とこ

しなへに荷はゞ、天秤棒も中絶ゆべし。靈公の子瑕が喰さしを忝ふし玉ひ、潘岳が車に茶屋のかゝ州もめりやす煎餅をなけ入しためし、あつちもこつちも諸埒はないとこそ覺ゆれ。爰に都難波武江神灘の四州の地に芝居の色林あり、一枚看板にいつわりのなき髮無月、たがまことよりうかれいで、櫓太鼓のとふから半疊にしりうたきし、仕切の札の柄頭にひらめくも物詮し。あるは棧敷に下簾かゝけさせて、豐瀾を杉楊子にふれて、わけある盃にさはり、高蒔繪の重箱を傾くるは人の中の人とや言はん。よしや紅葉たつまみ菜も同穴の古狸、腹かゝへて樂しむにかはる事なきとぞ見ゆ。しかはあれども、其色に濃あり薄きあり、人の知らぬ流れはすへも知らねばこそあれ戀しきものをと、それに染る奇助芝の惑をわきまへしめんとて、性章戀頓の四生官城子にさへづらせて一卷として、色競

同　上　挿　畫　其　二

べと號す。上は梵天の四序を連ねて、四のちまたをわかてり。下は次第適等を亂して百囀りの鳥の跡たへぬたはれ歌に其かたちを評せり。口の輕きこと琴の助か連臺を打わり言葉の上なること、播磨が年代記をない物かなんぞのよふにす。擔を廻る點滴も、こあかりの音にうけたまはり、瓦燈の殘る曉も、かき金のはつるゝ笑を催す事、すべて此書の德ならずや。下官事難波津の色盛なる比、齋藤の小與五郎か彫切、切の

狂言しづまか夢の浮橋なと、肩車にかゝりて見しを、此道のいろはとして、漸く物心覺ておやつきやうの一聲をも味ふる時は、武藏野の草かくれに出る月は、眞如の玉川氏の河内通ひ、多門庄左が谷中奴子の面影、それさへもはや手足のゆひを折てもまた足らぬ年の、今は老の猫背中、鼠戸の下くゝる事もなくて、片田舍のかたくなゝる中に、笹ふきのあばら屋にふせりて、七年の夜の雫をしらぬかといひし盧毛か心はとつぶやき、折かけ戸のあくれば、へついの下くゆらかし、わつかに鼻の下のをこめくを樂しむ折柄、四生の筆して遠き海山をこして此書を示す。あまたゝひくり返せば、見しあり聞しあり、其時其心になつて、揚幕のもとにかさし扇してうつくまるこゝち、しばらく物我をはなる。思ふに此道のおほひなる、是をほしひまゝにすれば、天つちくれをふみとゝろかして、忽ち白及の下に喉笛をならし、是をつゝむれば、悛のうちにして僅にたか〳〵指のうるをふにて事足りぬ。嗚呼床ひかな。

みつのとのとりの陬月はしめに三味緣山下の鈍翁土脚にふんでを道樂軒にそゝく

色戒歌

四場居山庄の百人一首には、苦集道滅の四諦の御法の四菩薩も影向隨緣眞如の心の波も靜に、四弘誓の船に乘り、四華四無明の風穩にして、四種定學にうかみ、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷の四衆の佛弟子も、鐘鈴鐃鉢の四具を拋ち、阿毘珠夜波摩阿達の四章陀論を辨え、生老病死の四苦を免れ、地水火風の四大を悟り、四種業を離れて慈悲喜捨の四無量心を得、四手の田長のから尻馬の四つ手もとけ落、四種の曼荼羅も破れて律儀不生坊護修習の四正斷に至り、圓頓の四卷も破れて歡喜微笑の四情を動かし、子淵子貢子張子路の四友も切磋琢磨の四行をすて、捨惡修善の四導を起し、四王の八子も四科を遁れ度、解脫安樂涅槃の四弘願を令し、定家家隆寂連西行の歌人も、風賦比興の四義を忘れ、定光末武綱公時の四天王も戀慕愛著の四垢を洗、作止任滅の四病を去、眼耳鼻舌の四識の色を戲ては、四角四面の親仁も滅を流し、臭服屋米や酒

や肴屋の四商も四二天作の秤棹もをれ、四方四百の藏ひらき、金銀珠玉の四の寶も消つべし。統て四の芝居の振袖には、東夷南蠻西戎北狄の四州のえだすも、虐暴賊有司の四惡も屏くべし。誠に鵜の眞似するあんかう烏の明日もしらで、四つ時分命毛を限と云爾。

頓作庵　四藤鹿　跋之

野眞委記評林　二卷　元祿十三年刊

上方野郎評判記、前記の「三盃機嫌」をそつくり模倣したやうなもので、勇巴堂嵐吹（蘭水トモ）の作、元祿末期のだらけきつた世相の一端を看取すべき好資料であるが、今はたゞその片鱗を擧ぐるに止めて置く。

委記評林序

排二平寂寞扉一遊下行于案外上何謂也。面當矣。賺二湘之紙帳一不レ構下于浮世上者何謂也。氣詰。諸設諸埒。我聞二諸老聰一燒手手管。我聞二諸火車一也。死則塋原土。嗟是唯怨乎。我有二野郎評林作一。藏而祕之尙。同志空人。寞吼壽下梓行于世上。予曰者本辭亦固。何爲腐云。是爲レ序。吁棄狼。

干時元祿歲次二流星一日。

一切衆生氏　勇巴堂嵐吹

鰹といふ魚類は、滑坊主といへど、餌にかゝるわづらひ有。上一の人より下紙屑ひろひに至るまで、恐懼のあはひに形骸を可愛がるは、皆是面門の四寸に御評判をくるしむ故なり。箒婦なく主奴もなからんほど〳〵には、火打箱のきづかひもなく、天の破れて首打をらんかなしみもなし。先に我愛妻にほだされし時は、親仁鮫骨もなく呵りしも、雅意に彌嗔くおもひ、

妻荒面倒。　猿舉丸木懸。　腸匾踵粘地。　僵反頭歷天。

瓢箪紺駄馬。　嚢著羽化錢。　死増睦暫暫。　鬼様俟居先。

とはおもひしが、早晩野郎界に遊恣をかへし、能風圖の外にいづることを得て、娑婆即寂光のしめしをお つひらいて、得不知節をまけだす折から和韻す。

娑婆荒面白。　何有二片心懸一　鵬偃三千里。　鶯笑尺寸天。

盛空杵信レ足。　憔悴腕即錢。　浩霹幾回問。　閻泳赫是先。

されば娑婆に御座彌史達を見るに、或は瓊瑤の裏に二人かはせし私語、たれしらぬ姉も後は綢繆ものを推 蟄かなしみ有、或は參差にかよふ意氣の松原、蔓がうんならたかんまん、眞四腹きるばかりとおもふも、

元祿版「委記評林」挿畫其一

皆是なづみのいたりなり。嗚呼當世我とおなじき剽輕野郎界に遊んで、娑婆即寂光のしめしをさとつて、涅槃の床に入れ。さても有難いことの、何樣もつらりと、御念佛〳〵。

元祿執徐落花十六夜前日
華蓋軒爾水鴨川徹咲書

の面影、神ぞ牡丹をあざむく、勃然としたしなし、どふも一座の興は見いではしられぬ味ひ、公頭めきて 稽子のやうにないと云々。本に晒れたる京の餉をこかし、訛おほきぼん様もころり、餘のかたとちがふて 悪性な事もないけな。そも〳〵牡丹は面體にあらず、古人のほざきし内証までの事、しかし御吻に申分あ つて玉に疵、かいたゆるるまもなし。去るは此親仁麥畑に求食雁金の子孫と見へて、行つきいやなり。人 しれぬ床の内、客の意によりてかはるけな。なせに、いはぬが昶みつ。

遊二宮川一賦

登二二階一以四望兮。聊假日以消レ憂。覽二斯屋之所一處兮。實顯敞而寡仇。挾二鴨川之通流一兮。倚二石垣之長岸一。背二東山之廣陸一兮。臨二四水之沃流一。西彌二五條一。南接二松原一。華容藏レ屋紅顏粧レ閨。雖二信美一而非二吾處一兮。曾何足二以少留一。隨二浮沈一遷逝兮。漫踰レ旬以迄レ今。情緩緩而忘レ歸兮。孰憂思之可レ任。憑二軒檻一以遙望兮。向二窓風一而開レ襟。洛中遠而極レ目兮。藏二祇園之後峯一。路遙迄修遒。川既濃而濟淺。悲二吾宅窮屈一兮。沸横墜而弗レ禁。昔孔子之在人情同於懷レ土兮。苟口舌而異レ心。惟二貧乏

同　上　　挿畫其二

上下孟の一
ばれ〳〵ぶ
らり〳〵ぶり〳〵
おらいぼも
きの〳〵〳〵
く
ぜんの様よ
目きすつく
すして
の乳状ぶ
山八月〳〵れ
ぶ〳〵

レ陳兮。有二鴛鴦之歡音一。水辰舞而芳澤奏兮。玉半去而霧波起。

之逢遇分。俟二河清一其未レ極。冀男色之繁昌分。假二富貴一而盡レ税。懼二盃之徒乾一分。畏二椒干之莫レ食。歩鳥獸以徒倚分。白日忽其將レ暝。風瑟並興分。天慘慘而無レ色。懸尻狂顧以設レ禮分。過車相逢而談レ分。四橋轟其多レ人分。貴賤行而未レ息。心悽愴以感發分。意餘餘而不レ往。循二階除一而下降分。思塞二於胸臆一。夜多半而不寐分。恨盤桓以反側。嗚呼何時復來二遊此里一

評林跋

末世の比丘少童を犯すと、波羅奈國の寺町にて辻談義せし人も去りぬ。賢を賢として色にかへよと、魯國の二條邊にて寶講釋せし人も今何くんかある。三界は皆戀、一すさきは闇、いでや此世に生れての世話是なり。頃日蘭水先生の撰せる淫男評林を見るに、三千世界の戀をあつあ、十方淨土の聖衆をつらねて、つまびらかに其評を盡せり。是亦世話の一端にあらずや　蓋此書に對する則其分そのいき、あたかも秦鏡にむかふが如し。いまだ此界に至らずといへども、屋暮なりしがすいとなんぬ。先生のこゝろ、只世のかいかづきする客おあはれむがために、是をあめり。其功史記の評林といづれ。

土口堂　尺水跋

兒玉新四良

元祿十三春

延命字學集　巻數不詳　元祿十二年刊

本書は從來世に紹介されたことのない珍本であるが、惜哉缺本で枚數廿四枚以下缺丁である。歌舞伎野郎評判記の一種で、本書と相前後して出て居る「雨夜三盃機嫌」や「姿記評林」抔と同質のもので、それ等と稍異つて居るのは日常使用文字の字學を配したることである。今其概目を擧げると、言語、人倫、支躰、食、衣、器財、草花等以下丁數缺く、その用例〔言語〕「い」の部に闘爭、器量、妨嫌、早意「は」の部に治合晴敷、放埼、破却等いろは順にて「す」までその用例を擧げてあるこれ一種の通俗體の辭書を兼ねた野郎評判記で、書中に出て來る野郎の名は、玉澤皆之丞

元祿版「延命字學集」挿畫

津川半太夫　神崎　歌流　松本　兵藏　岸田小才次　西川岡之助　澤村　小傳次
村山　九重　水木染之助　松本小四郎　杉山虎之介　橋本　金作　出來島大五郎

山澤林之丞　以下缺く。

尙ほ畫像の畫工は有名な「芝居百人一首」を描いた鳥居清信であることも、署名は不完本故未詳なるも」異ひない。又江戸版であること言ふ迄もない。

「序」　夫天高ふして日月星晨の父、地は廣ふして草木山川の母たり。其中に人亦子として夷狄禽獸生とし生るが中には妙なり、妙なれば種々の不思議をなす、斯に我が朝年改まり、富士の蓬萊を嚴り、千秋萬歲に住吉の門松を立渡す。四海の波治、砂は米となりて水木風の小袖を肩にかけ、山は金となりて荻野流の帶を腰に纏ふ。今扇を開き袂を翻し、歌三味線一唱三嘆の調、都に滿ち鄙に盛也。是廷憲は理世安民の政こと厚く、武家弓箭干戈の爭なく、民の風俗畔を讓る。五日の風吹ば時十の雨霑はふ。偏に聖代に異ならざるゆへならん。所謂堯舜の御代には腹鼓を打て鎚ひ、口笛を吹て舞。蓋し女男の姿をわかつに、鳳凰孔雀雉雞など雄は妍よく、雌は醜し、是を以天地開闢の濫觴にも國常立の尊より泥土瓊の尊まで拜□□立給ふ。是皆男色の勝れたる所以なり。今飛去りの□□にいと最情めくとりなりは、都女郎にすらまれなり。況や鄙にをひておや。故に顏子が一瓢の水清く、相女が四壁の風凉して、山居せし人も、或は德高く、富貴も其外葛天の民迄つかへをさけ、命を延る事なん。依之各趣所好美少人の姿を繪がき、縱に和名の文字を集む。徒らにも此繪形を見ば必ず其眞字書に移り、天然と所用の文字覺なば是生涯の德ならん。古語曰乞業を得酒といふ、抑是ならむ。

于時元祿十二卯ノ五月淺三筆於男女川流一

出雲國

逸名「野郎評判記」　刊年冊數共未詳

本書は著者刊年共に未詳であるが、書冊の體裁、人名、書風等より考察して貞享、元祿年間のものなる

野郎評林噺
中村七三郎

男色を描いた浮世草紙の元祖

ことは明かである。按ずるに、柱に「評」の一字あるより推察して、或は元祿十三年に刊行されたと言はれてゐる。「野郎評林噺」と同書ではないかと思はれる。江戸役者評判記の一種である。

中村七三郎

▲ないぞ〳〵世界の稀もの、當代較べものなき諸藝の仕出し、四座隨一と譽むるは道理、めいたいものせんせいの花開き、三ケ津の名人、色丹前の源、前代未聞の好色第一のつや男申はくだ。藝の品け高く大名の若殿になり給ひて本まの能かゝり上手にて、橋がゝりの振出し、至らぬ筆の先にて申もおろか、猿樂一通の藝殘る所なく勤めらるゝ。難を言はゞ武道のつめひらきのぬるく見えてかゆき所へ手とゞき兼たる樣なり。まごの手進じたき事多し。やつしはんどう出來、口輕くして吉。此人中村の家にてひやうしなきはいかゞ、おたしなみか知らぬ。過し市野やの狂言に大皷を打ちて子をあいしての愁嘆には、見物の涙しやじこの如し。遊女かいぬれのといや、立髮見事、すめん餘り勝れず、然し難にはあらず。今を盛りの若丹前、あやかり人行末さぞやと思はるゝ。此人のぬれには衞府の女中思ひを增すこと恰も四位の少將は數ならず、夜もすがらいも寢らればこそ。しんかんたる日待に同じ床の枕もうきに浮かれて、うつゝか夢か寢言にもやれた村の業平の七三樣とゆふてのあとは、あゝしんきとさる女中が話したとさ。

十一、男色を描いた浮世草紙

浮世草紙の濫觴に就てはいろ〳〵議論もあるが、何は兎もあれ、西鶴の『好色一代男』に指を屈しなければならぬ、而も主人公世之介は、七歲戀心を覺えた色道の天才で、十歲にして早くも念者狂ひ、十四歲仁王堂の飛子宿に假寢の夢を結び、十九歲には香具賣を手なづけ、遂て三十八歲の分別盛りに、京宮

川町に野郎遊びは、「散りかゝる花の下に狼が寢てゐる如し」と粋な斷きに若衆念者の思ひを遙けしめた幇法師は、貞享に入り、江戸時代を通じて空前にして、絶後の大作「男色大鑑」八卷を物して、浮世の好色親仁輩をして驚倒せしめたであらうことは想像に難くない。これを宗とし且つ依據した作物は元祿以後享保頃まで純男色正系と謂むべきもの約十數種を產出してゐる。傍系となるべき部分的男色を描いた作物の如きは、浮世草紙の過半數はその臭味のないものは殆ど稀である。限られたる紙面にて今それ等を網羅することは到底不可能事であり、殊に稿者は、左記書目に擧げたるもの丶內、活字本以外に觸目したるもの殆どなく、昨今古書殊に左記軟派本に至つては一部何百圓から數千圓に値ひするものも尠くないので、吾等貧老には最早見ることも讀むことも出來なくなつたことは何としても遺憾の極で、本の骨董化は軟派研究家を狩つて茫然たらしめた觀がある。又活版にある位のものは別に紹介する必要もないので、玆には單に書目を列擧するに止めて、下篇の花街篇に移らなければならなくなつたのである。

男色大鑑　八　西鶴　貞享四年
男色色の染衣　四　不角　同
男色十寸鏡　二　好處居士　同
男色子鑑　五　九思軒　元祿六年

本書の著作年代と作者について別に意見あれど、今は姑く刺倉の日本小說年表に據る。

男色通鑑　三　同　九年

男色大鑑の抄本に過ぎない。

野郎實語教　一　嗜兒軒好遊　同　十年
男色義理物語　四　同　十二年

男色木目濱　五　漆屋圓齋　同十六年
男色比翼鳥　六　東の紙子　寶永四年
野傾色競　五　同五年
男色今鑑　五　同
野傾今樣梓弓　五　如鱗　同六年
衆道鑑墓櫻　三　西澤與志　同年間
野傾百物語　五　同　同
男傾城文枕　五　同　同
野傾旅萬籠　五　共磧　正德年間
野傾咲分色孖　五　自笑　享保三年
古今武士形氣　五　享保年間

男色大鑑の略本

和國小姓氣質　六　鱗長　延享三年

本書は元祿版の男色十鑑を改竄して改題したるもの

以上の他に滑稽本に風來山人作の諸作や洒落本としては、寶曆頃の『男倡新宗玄々經』や江戸芳町のカゲマ茶屋を描いた『安永の芳深交和』の如きは活版本にて誰も知る所である。

花街本の元祖
あづま物語
そゞろ物語

花街篇

小引

花街文献の正系たる細見若くは評判記は、その傍系たる戯作類に比して、文學的價値の稀薄なものであるが、順序として細見評判記を擧げない譯には行かない。以下花街文献の概略を記して更に一通り目を通したものに就て、部分的梗概を試みたいと思ふ。

花街本の元祖は何といつても寛永十九年の『あづま物語』がその濫觴であることは否むべからざる事實であるが、嚴密な意味からではないが、本書の前年三月に刊行されたといふ三浦淨心の『そゞろ物語』は戯作の事實物語としては、或は後者が元祖の榮冠を負ふべきではないかと思ふ。共に元吉原の遊女を扱つたものであることは言ふ迄もないが、一は花街本の本流たる細見の元祖となり、他はその傍流たる戯作本の濫觴となつたことは注意すべき點であらうと思ふ。以後萬治頃まで十五六年間は江戸吉原關係の文献は途絶へてゐるが、或は出ても傳はらなかつたのかも知れない。その間上方『京島原』の花街本に明暦元年刊の『桃源集』その翌年には『島原集追加』『吉原鑑』の原本たる『寢物語』が出版され、同年大阪新町の遊女評判記『滿佐利草』が同時に開版されたことは、上方花街書としては特筆大書すべきものであらう。殊に『寢物語』は最近の發見に係り、『吉原鑑』がその改竄本なる證跡が歴然たるに於て一入愉快とするものである。

上方に於ける遊女評判記細見類の板行は、江戸の吉原に比して殆ど問題にならない貧弱さで、花街の軟

吉原物

吉原遊客の變化

書とさへいへば『吉原物』といふに一致してゐるのでも知れやう。併し開版には至らなかつた延寶の『色道大鏡』の一書には上方に於ける花街書も可なり見受けられる。その「大鏡」に引用されてゐる當道の上方本かと想像される未見書に

山鳥物語　雜波物語　都物語　寢覺床

以上が島原若くは大阪新町の花街書かと推量されるが、その他元祿五年の書目に、

しらやき草　島原　朱雀遠目がね　同跡追　朱雀しのぶづり　同諸わけ鑑
島原袖かゞみ　雜波紅古かね買　茶や友りんき　祇園丸裏　色里案内者

これ等が延寶から天和貞享にかけての上方花街書の重なるものであらうが、尙ほその他にも春本と思はれるものも尠なからず見受けられるが、それ等は本題以外に渉るから省く。

上方に於ける花街本は元祿を轉機として、其後は餘り見受けないが、それに反して江戸吉原の發展と共にそれ等の水先案内たる細見や評判記の類本が、續々開板されるに至つたのは自然の趨勢で、今も昔も變りはない。特に寛文以後延寶にかけては雨後の筍の如く、後世江戸文藝中『吉原物』なる特殊の名目の出來たのも蓋しこの時代の産物が特に原因をなしてゐはしないか。寛文五年には、江戸市中に散在してゐた風呂屋女「私娼」を「法令をもつて」廓内に收容するに至つて、廓内は俄然として一大變化を來したと言はれて居るのは、この時以來散茶女郎なる者起り、その勢力侮るべからざるものとなつた。殊に寛文以後は大名族本の爛客が衰へて、吉原の世界はそろ〳〵町人の獨舞臺と成らうとする時であつたから散茶の鼓風はいよ〳〵煽揚せられ、需用供給の理法で、この購買力ある町人相手の細見と評判記は、之が爲めに際物出版書肆の手で濫發されたことは昔も今も不思議はない。寛文初頭には、萬治三年の『吉原鑑』の出版を初め『吉原根元記』『吉原雀』『吉原よぶこ鳥』『ぬれほとけ』『吉原丸はだか』『吉原袖かゞみ』

吉原評判記類の族出

此頃の評判記は信用出來ず

『吉原六方』『吉原くぜつ草』『吉原讃嘲記』等はその重なるもので、その他今日傳はらないものも若干はあらう。下つて延寶には『吉原失墜』を始め、『吉原大雜書』『山茶やぶれ笠』『さん茶評判胡椒頭巾』『三茶三幅一對』『吉原芥川』『吉原下職原』等で吉原以外の地方開版のもので有名な島原物で、『たきつけ、もえぐゐ、けしずみ』が出て居る。大阪からは新町の『浪花鉦』又『古今若女郎衆』があり。遠く長崎からは丸山遊女の評判記『長崎丸山土產』五冊は異數として特筆するに足る。次で天和貞享に至り京都から『島原大和暦』の出てゐるのも見逃してはならない。吉原物では、『吉原買物調』『吉原大豆俵』『好原女郎花』を始め、其角の筆蹟を板下に彫つた『吉原源氏五十四君』は著名なもので、斯の種類本中の絶作と稱へられて居る。こゝに確に天和か貞享頃出版された失題評判記の跋文に、此頃出る評判記は餘り信用出來ないものばかりであるとけなしたものがある。それは「土佐節を語る者に色里の咄しせんものなし、そばきり好の者に大磯や虎右衛門を知らぬ者もなし。松屋に膏藥も天滿喜三がいよ〳〵といふにてこそ流行らめ、頃日猥に評判双紙といふ事を我勝に書き出せ共、どうやら伊勢物語のなりそこないの樣にて、さして替りたるものなく、其女郎の相方内證の善惡は一つも書かず、さるによつて出ることの新板にそんをせさして、板屋を懲らしむるなり。例へば女郎と家名をば古より見合せて、ゆはう事に事をかいて酢のこんにやくのと嘘を吐き散らかすまぎう文法、それ程かうぜいがつきたいか、是が嘘ならよく聞き合せたがよい。さるが中にも去年の紙屑の仕掛かはりたる驅たん煙草入、是なん近年の出來に好色源氏とも言ひつべし、さて此一通わたくしの知る所にあらず、ふとしたる人の物語を聞くならく、世の人の眠り覺しとならさかや、此手をかしわのふたまきとするのみか」云々とある。師宣風の挿畫四頁中本形の餘程趣きの替つた體裁で頗る古拙なものである。これより元祿寶永は別として、正德享保と年數を經るに從つて細見若くは評判記の類本が加速度的にその數を增して行つたが、元祿は格子女郎や散茶女郎の

太夫拂底の元祿時代

遊女を黑評した廉で發賣禁止

全盛時代であつた爲めか、廓内を通じて太夫の數が三四人に減じ、多き時でも十人には充たなかつたらしい。最近入手した元祿三年板の『金剛砂』五冊本で細見と評判記とを兼たものであるが、それによると太夫はたつた三人しか出て居ない。同十四年に出た『色三味線』及びそれと前後して出たものらしい『遊女名せよ』といふ枕本、これは『色三味線』から名よせの部分丈拔抄したか『色三味線』がこの『名よせ』本に據つたかは判然しないが、これにも太夫は僅に五人しか擧げてゐない所を見ると、元祿は太夫の拂底時代であつた事が判る。或は量よりは質を選んだせいかも知れない。又最近拙編『書物往來』十二冊に忍頂寺氏が『花街本に就て』と題した元祿十二年の『五大力菩薩手鑑』にも江戸の部に太夫九人を擧げ、京の部に十人大阪の部に十三人を擧げて居るに過ぎない、又元祿七年に『吉原草摺引』六冊本は未見書であるが、例の種彦の書籍目錄に依ると、本書は絶版の上作者版元共に罪せられたとある。そして遊女の評判記として可笑しからざる冊子なりと、是より遊女を白地に讃る冊子は、作者もなく剞する者もなく、且つ評判に係はらざる冊子にても、遠慮したりとおほしく、古き寛文延寶の冊子は、多く今に傳はれども、却て此元祿七年より寶永の初めまで十餘年の間の年號ある本を見ず。絶て無きといふにはあらねど、昔より少なき故、予(種彦)が目には觸れざるものなるべし云々と言つてる通り、此年間の花街本は寂々寥々たることは事實で、寶永年間では未見書『吉原大黑舞』横本六冊石川流宣作が六年に開版されてあるが、多分細見と評判記とを兼たものであらうか、戯作に『吉原一言艶談』が出て居るのみである。惟ふに當代に「吉原物」の出てゐさうで出なかつた理由は、他にもいろ〳〵原因はあらうが、種彦も言つてる通り『草摺引』一件で出版屋がおぢけがついたのと、一つは元祿寶永頃の出版界は上方が全盛時代であつたが爲め、それ等に押されて進んで江戸で出版しやうと試みるものが居なかつたのか、若くは當時太夫の拂底よりひいては遊女全體に亘つて素質が下落して敢て進んで評判する物好

な閑人が居なかつたのかも知れない。何れにしても、不可解なのはこの時代の吉原物の行方である。次の正德に入つて擡頭し來たつた花の魁は例の有名な『吉原七福神』と『吉原ゑにし染』の二書である。享保以後元文明和安永天明にかけては細見記の發行は春秋二期に必ず二冊乃至四五冊宛は出てゐるらしいが、大半は散逸して傳はらない。享保の『吉原丸鑑』や『兩巴尼言』共に著名である。下つて寶暦には『交代繁榮記』『吉原出世鑑』などが評判記としての主なるもので、それより以後は單なる細見記丈で評判記はこれより委を替へて江戸特産の洒落本と躾替したと見るべきであらう。

惟ふに寛永末年に『あづま物語』や『そゞろ物語』が花街書の俑を作して以來約十年間は全く出なかつたわけでもなからうが、殆ど見受けない。たゞ明暦頃出版『增り草』に正保年間「左繩」と號して此道の事を書きたるものあり云々とある丈で何等文献に徵すべきものが出てゐない。辛うじて最近京都の島原關係のもので完本ではないが、例の『桃源集』に先んずること僅に二年の承應二年中春の年號ある『こそぐり草』一名『島原しかけかた』と題する遊女の心得又仕掛け方等を書いたもので、遊女の心得となるべきもの五十五ヶ條名づけて囲情花傳書云々と跋文にある位だから、本書の內容推して知るべきである。それ故本書は別項に評記するとして、こゝにはたゞ一言丈に揭ける『桃源集』以前に世に出てゐたことを擧げて置きたい。

細見と評判記

桃源集　一卷　承應四年（明暦元年）

京都島原（島原を桃源と洒落たものである事は言ふ迄もない）の遊女評判記愛細見記で、現在では上方に於ける遊女評判記としては、江戸に於ける「あづま物語」と比肩すべき最古のものである。本文中の

島原は十餘年前六條町より移轉島原の歴名山島

大阪最古の遊女評判記

狂詩狂歌に遊女の名を交へて戯文體に評判することは、かの『あづま物語』に濫觴し、後には萬治に至り役者評判記『野郎虫』は全く本書に範を採つたもので、後に『島原集追加』も出てゐる。本書の跋文の一節に、十餘年前六條町を今の所に移し、名けて島原と曰ふ。蓋し島原兵亂之時、城郭一門を構ふ。今の傾城町亦然り、因て比並して之を稱す。或は匿名を設けて山鳥と曰ひ、或は眞讀を用ひて多字計武と曰ふ。此頃好事の者有り、島原中傾城之名を書して各々之を評判す。且つ狂歌を詠ず。其數五十に餘り、其部を二箇に分つ。松の部は太夫之名を載す。松は太夫に封ぜられたればなり。梅の部は天神之名を載す。梅は天神に愛せらるれば也。名けて桃源集と曰ふ。予未だ彼地に到らずと雖も、世人に問ひ、且つ彼集を考へ、略其風體を知れり。暇の日彼集書す所の次第に本づいて各五言絶句之狂詩を作り。且つ名の字を句の頭の句中に寓す。狂歌と并び書して世に行はば後覽之人改めて之を正さば幸甚ならん。承未之春毫を盧白堂に抽ず。躰田鈍太郎末孫白面書生敬白」「原漢文」とあるので大體本書の由來と體裁とが知れやう。尙ほ序文には小藤原定家の戯名を署して、例の古今集序文に擬して、本書に出て居る松之部太夫格の八千代以下十三人の名を擧げて面白可笑しく品評してゐる。かの六條時代には吉野にその名を止め、島原に移つてからは八千代に如くものはゐないと讃稱してあるその八千代を卷頭に太夫「松之部」十三人、天神「梅之部」四十人の妓名を擧げてゐる。本書に就ては全文を希望の方は拙編『書物往來叢書』第二編花街篇を參照されたい。次の『まさり草』も同上所收。

清佐利久佐　一卷　明暦二年刊

本書は大阪に於ける最古の遊女評判記ともいふべきもので、その發行は實に明暦二年である。序文の筆者は「色道大祖麻光菴眞月居士書」とあるは、恐らく『色道大鏡』の著者畠山箕山先生あたりではなからうかと想像される。自ら稱して色道の大祖と豪語する傑物は渠が色道大鏡を書いた口調にそつくりで

ある。『色道大鏡』の序に――然り山者是色道の大祖也。――六十餘州を歴行し、積年三十有餘にして始めて是書を作爲す云々とある。本書『増り草』序文の一節に――竊に惟みれば、當道盛んになりて三十とせ餘り以來、貴となく賤となく此道を好む人多かり、然りと雖も傳記敎書を記し置て、初心の輩に示さんとする人稀に是なし、嗚呼悲しき哉や。當道は邪惡の戯れとのみ知りて、心あるは早く退くによつて功をなすべき暇なし。卑賤の輩は我身一つを業みて、衆人を悲む心なし。集記を殘さんも文盲先立ては便りなし。抑昔日十三歳の秋より此道に列坐して、振袖の下より手をしめ目配せ抔に採れて、壁年の末より自ら戯墓對談の實否を糺す。かるが故に我世に出でゝ三十年、道を見る事十有八年、旦夕斷絶なく修して、當道至極の理を知り、而して我斯道を立て、始めて之を色道と名付く、于時自ら終つて後、誰か色道の開基となつて、若輩の妄人を示さんや、我今大極の格式を定め置かずば末世の輩當しく邪路に入て人氣散亂せん事を悲み、救世の大願を興し、舊年の春より思ひ立ちて深秘決談抄と云ふ貳拾卷の書を編集す云々――は兩者相通ずるものなしと斷ずることは出來まい。併し年代が約二十年も離れて居るので、その點は如何かと思はれる。餘談はさて措き、遊女を二類別に分ち、上官部に土佐以下十一人。中官部は高天以下六十三人を擧げて評判すること例の通りである。本書も文例を省く。

吉原鑑と寢物語

本書に就ては曾て掬翫幹の『奇物往來』誌上に田中喜作氏の委しい紹介があるのを幸ひ、左に轉載することを許して頂くことにする。

吉原關係の古書中最も稀覯に屬する吉原鑑が石川氏のお藏で、僅に其の面影を流布してゐることは我々にとつて譬へ難い洪福の一つであつたことは云ふまでもない。そして其の複製の原本が舊狩野氏の藏本で敎樂の落丁があつたとしても僅に今日に遺存された一二の古版本であつたことと、また其の得難い珍籍すら霞災と共に亡失したこととは已に周知の事實であり、それを外にして他に珍藏されてゐるものの有無に

就いても殆んど知る人すらなかつた霞亭文庫には一本を藏してゐる樣に聞いてゐるが、自分もまだ其事實を確めたことがない。それで偶然に最近になつて不思議な姿を市場に現はした。而もそれが表紙こそ變つてゐるが一葉の落丁もない完本であつたことはどれ程我々を喜ばせたか知れない。自分はこんな機會に石川氏複製本の落丁の部分を補ふと共に、此の吉原鑑の原本として、今日まで如何なる文獻にも其の書名すら傳へられなかつた島原ものの『寢物語』があり、前者は要するに此の寢物語の改題改刻本であることを明にしたい。

狩野氏舊藏本吉原鑑卽ち石川氏複製本は一丁表目錄の半と、同裏及び二の表の町割、名寸しと、三十五丁裏より三十八丁裏に至る三丁の落丁がある。(國書刊行會本江戸時代文藝資料中に收められたものも同樣であることは云ふまでもない。)

(三十五丁裏)

衣かつき　　丹　波　(江戸町茜左衛門內)

或人の云年十六七はかりなる男に節句正月の進上の位是如何、たんはのいはくおやにかゝり又主もちなれば何程ふけんなりとてもやうじなどよし。いかにといふに何もしらぬ月又かねのさいかくなりかたうおやにかゝりなとへ或はきる物かたひらやる事なし。もしかの男かねのさいかくならさる故其進物もとす事有、其上は面目なきとて音もいたさぬ物也。又物もしらぬ月或はつらのかわのあつき水なとにある物つかへは返報もせす、ほかのけいせいにはなし申物也。よく〳〵見謀(はかり)かんように待る。小袖進上にいたし、けつく我身にかつく故に衣かつきと申也。

(三十六丁表)

(丹波繪委に『白なみのたんはて人を大江山かすみのきぬやかつきかくれし』の歌を題す)

（三十六丁裏）

庭　櫻　　外　山（江戸町太郎兵衛内）

或人の云花をとらせ申次第是如何。とやまの云花のしたいあまた有。たとへば櫻をはなす男なればはしめてあけやへ行時あけやのていしゆかゝに一分一つつゝ肴にとらせたかるよきと見へたり。雁をはなす男なれば始のあけやならは三度めはかりにかゝに一分一つとらせ侍らんや。さて又けいせいも始てはなし三度めほとに鶴位ならばやりてに一分一つ。雁くらるならは銀二兩か十匁はかり、扨あけやへ五度斗行時に下おとこ下女に銀一兩位の花を出すかよく侍る。さすればよくまはるもの也。庭鐘といふ心をもつてにはさくらとは申なりと。

（三十七丁表）

（外山繪委に『いかにせんとやまの春もおしけれどなれにしにはのさくらちらなん』の歌を題す）

（三十七丁裏）

夢　契

えい山の小ほうしばら、山へ行ざまにおちゞさまこゝに御ひるかゞざる。九ッをうつたらばきこしめせと申しをきて程なく山よりかへりけるに、やう〳〵四ッ時分にはやまいりたるあとあり。いかにと問へば、はや九ッ打なるとおほせらるゝ。たゞ今四ッを打たるにと申せば、さればこそ五ッと六、四ッと九ッにてはなきと申されたと申された。扨々よきさん用やとてあきれもせなんだ。

（三十八丁表）

（藤枝の委繪に「名もたかきふしえを戀にするがなるゆめのちきりはうきしまか原」の歌を題す）

吉原鑑と雅物語の相違

（三十八丁裏）

奥付

右吉原女郎の名ことゝく書しるして吉原かゞ見と名付今開板者也

明暦二年刊「寢物語」挿畫

萬治三年九月吉日　　[illegible]新版

以上を加へて珍書保存會本吉原鑑の詞章が完全するのであるが、元來この吉原鑑には上記の『寢物語』と題する原本があつて、吉原鑑の詞章はこの『寢物語』の大部分の二度の勤めであると云ふことは餘り弘くは知られてゐない事實たらうと思ふ。

寢ものがたりは中本一冊目錄一丁を除いて紙數二十二丁、奥付に『明暦二丙申歳仲春吉日、政開板』とある。此の『政』と云ふ板元は明かでないが、已に本書以前に最古の島原評判記として桃源集の開板がある事によつて知られてゐる。

本文は左記一より三十に至る三十章の手管を記したもので、一々遊女の談話に擬して章毎に遊女の名を掲げたことは吉原鑑と同樣で、たゞ本書の異つてゐることは各遊女の年齡を書き加へたことである。

一、二人拍毬　左門　二、戀のいすか　浮舟　三、印卷　初音
四、鵜羽がさね　小藤　五、水月　八千代　六、夢契　富士江
七、打替　藏　八、忍付　明珠　九、腰切　三笠
十、伽羅卷　金太夫　十一、雀子飼　勝山　十二、鸚鵡留　小太夫
十三、庭櫻　金山　十四、衣替　千珠　十五、內甲　長島
十六、諸枕　三夕　十七、忍妻　八橋　十八、亂曲　初島
十九、戀玉章　爪木　二十、戀別　玉葛　廿一、言葉戀　吉高
廿二、袖斜　下ノ町　吉野　廿三、玉水遊　生田　廿四、曲水盞　八重
廿五、戀釣針　小藤　廿六、衣かつぎ　吉野　廿七、情類火　下ノ町　初島
廿八、新枕　雲井　廿九、長枕　定家　三十、文返し　出雲

以上三十章に對して吉原鑑は二十八章を收めてゐるが、兩者を對照すると寢物語の第八、第二十の二章が吉原鑑に缺けてゐるだけで、其他の章句は殆んど同文であるが、まゝ數行の省略があるばかりであり、一見して本書が寢物語と云ふ島原ものを、吉原に移して師宣の姿繪を挿入し、尙是れに戲歌を題して鱗形屋によつて版行されたものであることが解る。

寢物語には三葉の挿繪があるが、無論師宣ではなく多我躬之上、可笑記、錦木等と同一畫者の手に成つてゐる。

今、吉原鑑に漏れてゐる第八第二十の二章を左に掲げてこの一篇を擱筆する。

忍付　明珠　とし十九なり

第八　或人間云もし歸るとて其男道よりもどる」事あらん。是如何。明珠の云やりてかかぶろをもんさす迄茶やにつけて置待り能々分別肝要也」

戀別　玉かづら　とし廿三也

第二十　或人間云けいせいの、ほの字成知音にすり切有。此品は是如何。玉葛の云我すきたる男なれば、さい〳〵かうしへもせず、又はかはせず外の」男のたしかに、との字ならず又は夕もじに來り」書はさだまりて、ひま入男とけいやくいたし、咄申時」は、かの我ほの字成男のかたへふみつかひ、よびよせ」外のあけやにてはなすとみへたり。又は茶屋にて」さい〳〵出合申事よく侍り。さやうの男ほうばいにも」かくし、やりてにもふかくかくし侍る。それをいかにと云に」おやかたへきこえ、又はやりてなどの才覺にてすりき」りの男なれば、けつくさし合などにもかまひ、知音」つきがたし。其上つれてはしるなどいひて、お」や方やりて、あわせぬ物也。さすれば二人の內如在」なくて、わかれ申ゆへに戀のわかれとは申侍るとかや。

因に云、……上記田中氏の記事によつて、花街に關する貴重なる一文獻を本誌に發表されたことは非常に光榮とするものであると同時に、聊蛇足を添へて置きたいのは、先年(大正五年)國書刊行會の江戸文藝資料第四『吉原鑑』の解題中に、大阪新町の廓話を集めた延寶年刊の『なにはどら』を本書の扮本なりと斷じたのは田中氏の發見によつて、遠く江戸にその先蹤を索むる迄もなく、お隣の島原にあつたことは玆に贊する迄もなく、自らの不明を大方に謝すると同時に、いつもながら軟派書の改題と改竄には思はぬ失敗を繰返さゞるを得ないのは自他共に痛感する所である。今田中氏の擧げられた明暦二年版の『寢物語』と僅々、一年を隔つ承應四年(明暦元年)春開版の而も同一版元と思はれる「政開板」の『桃源集』に見ゆる遊女細見と對照するに、前記『寢物語』の左門以下十三金山に至る十三人は『桃源集』松の部遊女十三人同數同名で、たゞ順位が前後してゐるのみで『桃源集』では八千代が松の部の首坐を

占め『遊物語』の一番左門が八番目になつてゐる。それ故一より十三までの遊女は松の位の太夫であつたことが『桃源集』で解る。次に殘る十四番目の千珠一人を除き他は全部『桃源集』梅の部に出てゐる抔も兩書の關係がよく解つて面白い。そして『遊物語』に出て來る遊女は當時島原で何れも評判高き、選ばれたお職連中であつたことも首肯される。

尙ほ左門以下の遊女評判記を知らうとする人は拙編『新從吾所好』花街編若くは最近の書物往來叢書第二輯を御覽下さればよい。又『遊物語』は最近稀書複製會から再刻されてゐる。

吉原大全新鑑　中本、寛文五六年刊

細見と評判記とを兼ねたものである。卷首八葉の細見を附すること萬治の『吉原鑑』などの例に同じ。其次頁に女郎見立表を作り、極上人、慈悲善人罪人、いやな者、うわき者等の目を擧げたると、遊女の紋所の堂々たるを異色とす。挿畫は師宣風にして次に出づる『讃嘲記時之太鼓』と同一筆者と思はれる。軟書通の柳亭種彦すら本書を未見としてゐる。但し種彦編の『吉原書籍目錄』には單に『吉原大全』として『袖鑑』と『根元記』を合せて增補なしたる物なり『失墜』『つね〳〵草』等の引書に見えたり、近年上木なしたる『大全』とは別本なり云々とあるが、『吉原大全新鑑』のことであることは言ふ迄もない。

稿者の閲讀したのは王本共上卷丈であるが、或は次の跋文に見ゆる如く、「太夫評判あけやの俗性記は根元記に之を記す云々とあるから、下卷は『根元記』となつてゐるのではあるまいかと思ふ。紙數二十葉、左に序文目錄及び跋とを擧げて本書の面影を偲ぶに止めて置く。

『序』　善と惡とは其品により折により時により千さまん別の義と覺ゆ。既に釋迦は提婆に恐れ、孔子も時にあはず。我朝の菅相丞も時平のおとゞにさゝへられ、名を西海に流し、佛聖人だにも惡きに交はり給ふ。ましてや人倫に於てをや。こゝに吉原讃嘲記といふぺんこうをちらし。文字の義理分明なる書は、文珠の

智恵を借り、ふるなの辯舌を以て書集めたる也。哀れ是を世俗のもてあそびには世の爲め人の爲めよしといはゞゝ人はいよ〳〵理を磨き、惡しきと言はるゝ人はそのあやまりを改むる身ともなるべし。しかはあれと集人これを致せばその名のあらはるゝを哀しみ給ふにより、是非なく所望に及ばず是を除く。此書を見るに三德をかさねたる人を譽め、まだ學びてその利きくに及ばぬをくたし、まなばざるをそしりてさま〳〵功者品々書わけ異儀なきやうに書をかれし。かるが故に我體の愚なる物の言語に及ぶ所にあらねば、彼書一見のそばを走り、所々にこれが力を賴み、かたことまじりに書あつめをはんぬ。猿猴が月を指すに異ならず、名づけて新鑑と云をはりぬ。右讃嘲記の拔書くわしく根元記に有之。

吉原評判目錄

よし原圖の事　上郎や名つくしの事　よし原善惡人の事　同紋盡しの事　同町割の事　はし上郎名盡しの事　かうして上郎批判の事

「跋」　むさし野や廣き江戸町二丁目よりはしめて、年久しくもすみ町の、京町人もさふらいも、皆全盛を新町まで不殘批判する事さて〳〵二九の十八や、觀音のほとりなれば御神禮の馬じや〳〵御免あれ。

右は端格子の評判此卷にて終、太夫評判並にあけやの俗性記は吉原根元記に是をしるすもの也。

はん木や　又右衛門板

吉原根元記　中本

寛文六年の開版なる由高尾年代記に見えてゐる。前記『吉原大全新鑑』の姉妹篇で、上卷は『新鑑』下卷は『根元記』といふ書であるらしい。『高尾年代記』に依れば、此『根元記』次に錄する『讃嘲記』『袖鑑』の三種は、一旦寫本にて流布し、其後に添削し刻したる物なるが故、是には彼書をそしり、彼書には此冊子を難じ何れか前に成りし書なる事詳ならず云々」とありて、三代目高尾の評判と姿繪とを模刻

してある。稿者は原本を見たことがない。参考に三代目高尾を評した一文を採る。

此君四方に名高し、手跡よし、文者也。能者也。全盛ならぶものなし。今の世の名とり第一はこの君なり。讃嘲記に曰く、いにしへのたかを紅葉しては外山かくれなければ、その跡をふんでまだ二葉なりしをもとむるに尤傾國の心ざし發明にして勿論美麗なり。或人の曰くつほめる花のまだ妙なる色なきが如くなれば、曲水の坐配面白からずといへり。よし〳〵子ともの知る事にあらず、此君かうようの時來たらば日月も光りを失ひ、佛も座を立て小手まねきあるべしと云々。

名もたかを今そもみちの盛りなる花よりもなを深き色哉

吉原讃嘲記時之太鼓　寛文七年刊

紙數三十七葉　内師宣風の挿畫四葉入つて居て、吉原遊女評判記中の名代物である。近頃板に成つた『讃嘲記』は原版に比してお話しにならぬ粗本で、殆ど原本の面影をすら傳へて居ない俗悪なものに出來上つて居る。恐らく明治に成つてからの木版本であらう。稿者曩に原本から直接謄寫印刷に附したことがある。至つて粗末な印刷ではあるが、それでも流布本の讃嘲記に較べて優つてゐると自信してゐる。

秤彦が『吉原書籍目錄』に本書と他書との出入を細記して居るから參考までに引用して置く。遊女評判の書、卷尾に鱗形屋加兵衛開板とあり、剞梓の年號なし。されど寛文七年の印本なる證卷中にあり。序に曰、爰にある人吉原かゞみ、吉原根元を集めなして、大全といふさうしを携へ來りて、此さうしのうちに花のあと枝となりて折らぬやつもあり、新樹のわかばえの出來たも多し。所々に墨つけくれよといふ云々とありて、卷中に『袖かゞ見』と『根元記』の二書を合せて『大全』を作り、又それを補ひし冊子なり、末に犬枕と題して今の物は附ともいふべき事を載せたり。延寶五年印本『もえぐゐ』「けしずみに犬枕のあとを追ひ、おもて裏ある詞をならべ云」とありて、此たぐひの事を記したれば、昔は行はれ

寛文版「讃嘲記時之太鼓」挿畫

し冊子なるべし。箕山が『大鏡』の引書にも此『讃嘲記』を載せたり。さて今傳はる『袖鑑』『根元記』等を見るに、『讃嘲記』に曰くと云ふ事所々にあり、是は『讃嘲記』出版の後に『袖かゞみ』『根元記』どもそこ〳〵を彫り改め再び賣りたるものと覺し。是等の冊子のみに限らず、あるは增補なし、或は外題を替へたる物あり、心をつけ見るべきなり。『袖かゞみ』の末に替り犬枕といふことを載せたるあり。是等は全く讃嘲記出版の後に彫添へたる事、替りとあるにて明かなり、再按ずるに『根元記』『袖かゞみ』讃嘲記の三本寫本にて一端流布したるなり。それ故に延寶六年「寛文六年の誤植ならん」印本『根元記』に七年の印本『讃嘲記』の記事あり是寫本のうちの校合也——とあるは異論

吉原袖鑑本文の典入

四天王

若四天王

のない所で、以上の三書は穂彦の説の如く、姑く寫本にて世に行はれ三書互に相前後して印行されたらしく何れが前後なるや決定し難きものである。本書も矢張三代目高尾以下三十七人の評判記で、一々遊女の紋所を附して忌憚なき評言は痛快を極めたものである。

吉原袖鑑　中本

書中師宣風挿畫六葉、卷首に吉野、夕ぎり、うす雲以下八十七人の紋章入細見が附されて居る、刊行年代未詳であるが、前記穂彦の説に據つても原刻は寛文六年で同八年以後更に增訂再彫したものであらうとのことである。今原本を目擊するに、確にそれらしい形跡が充分に見受けられる。第一本書のよしの夕ぎり、うす雲以下目錄と本文とは違つて居ること、本文中改彫した形跡が所々に見えて居る。完本を得られないので確實な丁數は判らないが、曾て見た本は三十四枚で、終りが二三枚で終りが二三枚缺丁して居るかと思はれた。本書と他書との出入に就ては前掲の『讃嘲記』を參照せられたい。左に「目次」卷末「四天王若四天王の事」を參考に擧げて置く。

四天王　よしの　彦左衛門　うすくも、夕きり、八橋、先書に四天王は大に非也。利生をいはゞ『讃嘲記』にも心中寒水ゆへこれをのぞけり。つしまは美成といへともその位はやし。いこく、かく山は格子也。御の字にならべてゐらふ事ゐことやいはん、あやまりとやせん。

若四天王　小紫　つしま　にしを　からさき

此外の四天王は先書に撰ぶ所珍重々々

吉原よぶ子鳥　原本未見

本書は未見であるが穂彦の書籍目錄によれば、中本一冊紙數三十九枚、卷尾に皐月中旬うろこ形屋加兵衛開板卷中に卷文申のとしとあり是寛文八年なり。『讃嘲記』開板次の年の印行にて、同じ板元なり。同書

に說き漏らしゝなど記して、かこつけの松のことあり、すべて『讃嘲記』に似たる遊女の評判にて、是にも末に物は附のやうな事あり。暖に云「尻もむすばぬ絲ながら、折々に之を綴り、またこそ『吉原六ほう』にあらまし、猶くはしゝは『袖鑑』にこそとあり。此文たしかには聞え難けれど、『袖かゞみ』は既に前に見えたり。されば『吉原六ほう』も是より先きに出でし冊子なるべし」云々とある。

よし原六方　中本　寛文版

前記に見えたる通り、寛文年間の刊本にて、原本は中本にて序文一丁本文七丁のさゝやかなる本、太夫の紋所を上部中央二段に分ち、上に詞書下に遊女の肖像とやり手かむろ等の名を記入す。繪は師宣風である。姿態それ〴〵變化あり、文樣も面白く、頗る可憐又古雅なる小冊子である。當時歌舞伎に六方といふ事流行り出したのを眞似たものである。これと同體裁で『いとなみ六方』といふ商人職人の類を集めたもの、寛文七年には『奴俳諧』といふ六方詞の俳書が出、少し後れて延寶元年には歌舞伎專用のなのが出、「六方詞」多門庄左衛門、あらし三右衛門、鈴木平左衛門直傳の正本も出てゐる位だから當時流行物の一つであつたらうと思はれる。用捨箱に吉原六方の模刻を擧げて――上に模したる吉原六方は板木今に傳りありと聞けり。按ずるにこゝに寫したる六方詞三種のうちにては此草紙古かるべし（三種）とは（かはりなのりことば、いとなみ六方、吉原六方）今に至りて百七十餘年板木の傳はりしは奇といふべし。序と卷尾半葉を模す。新町九兵衛とあるは鬼甲屋なり。序の末に年號及作者の名もありしなるべけれど缺けたり、卷尾に如此正本屋とあり、（用捨箱參照）名は缺て門の字のみ存、かぶきの六方詞と同じ正本屋千右衛門の板歟――とある。本書は言ふ迄もなく、六方詞は附會で、純然たる一種の評判記とも見るべきものである。

延寶年間に於ける花街書の隆盛

延寶度に於ける花街書の板行は蓋空前にして絶後ともいふべく、特に江戸吉原丈でも十指を屈するの盛觀を呈してゐることは注意すべきである。或はこれをもつて直ちに惡所の全盛を裏書するものと斷ずることは早計かも知れないが、又もつて社會人心歸嚮の一面を推知することは出來やう。當年間に刊行された三都花街文獻書の重なるものを擧ぐれば、延寶二年乃至三年には吉原失墜、吉原大雜書、山茶やぶれ笠、同六年乃至九年には、吉原戀の道引、らいでん、さん茶評判胡椒頭巾、吉原芥川、吉原下職原、吉原三茶三幅一對、吉原小唄戀まくり等で、京島原からは、有名なたきつけもえぐゐけしずみが延寶五年に、朱雀諸分鑑同遠目鏡が同九年に刊行され、大阪新町からは浪花鉦六冊延寶八年に刊行、その翌年には遠く長崎から丸山遊女評判記、『長崎丸山土產』五冊は異數として特筆すべき花街文獻の尤なるもので、更に島山箕山著の『色道大鑑』十八冊乃至三十冊に至つては花街文化史上驚異すべき時代であつたことを想起せしむるものである。以下評判記及び細見記に關する文獻書を抄出して解說を試みやう。

吉原大雜書　中本

延寶三年四月の開版である。例の『三世相大雜書』に倣つて、吉原の太夫格子百三十三人を評判したもので、太夫の總卷軸たる三浦屋の吉野、薄雲、高雄、小紫の國色以下を毀譽褒貶の漫罵をあびせかけた此種評判記中の一異色とすべきである。卷首に例によつて新吉原町繪圖を出し、圓形を描いて、太夫格子の風姿相似たるもの二人づゝ一系におさめて六十人をくらべ物にした圖があるが、いふ迄もなく三世相の眞似である。挿畫五ヶ所に入つてゐて、最初は「どてのおりくち」「大もんの茶屋」「大もん通り」「靑侍見物」「新町の三浦屋隱居」の暖簾なども見えて居る。「新町若紫」「京町からさき」「三浦八はし」等の道中を見物する嫖客の圖、「京町やまと」「三うらよしの」各座敷の體、「うしのごぜん」「角田川」「金龍山」等の風色に舟を浮べたる山谷通ひ嫖客の圖等で、全卷四十五丁で終つて居る。圖の筆者は署はないが菱川師宣なること一見して明かである。本書に注意すべきは、萬治寛文の盛時を過ぎた延寶度

に入つた吉原の妓風は日に增し低下し行かんとする際のこととて、六法好の奴女郎と意氣地も張もなき來たるを拒まず、去る者を追ふ、類ひの、散茶女郎と相對抗して色を競つたので、勢ひ多寶主義が勝利を得て、それを立證するに屈强なのが本書序文の一節である。その結果風儀が衰れ、行儀が惡くなつた。

初春のあしたに筆を染め、書集めたる藻汐草、めを出しつゝ鶯の一ばんとりより硯に向ひ、心もせいもつく〳〵し、ぢわけも見えぬつちのふてのふつゝかなることの葉は、わか面白きに世のあざけり給ふもかへりみず、笑ひ草とのみなし侍る。されともよしや腹にちやとわかし給ふもありぬべし。さて又おかしと思召、きゐつのまゆを細めつゝ、ゐみを含むもおはすべし。ひるへにあしとなんせしもよし有がたき情と、深き思ひのよひのふち、首たけうちこむかた〳〵はお情ふりに、ほたされてあら有がたや寛文のねんごろもはや、いつのまに今延寶と遠ざかり、さんやの閨に迷ふ身は、土手吹風の身にしみて、おほし召す君たちをあしゝと書けるを見給はゞ、よし腹も立ちぬべし。それはともあれ東風馬耳をふく如く、聞かぬ顏におはしませけふ此頃の風俗は、有し昔にこと變り、今よし原をひきかへて、あし原ともいひやせん、中々けびたるありさまは、小唄の品さへはらすじな親はざいごに子はよし原に、だいてねよろのつまもちながら、さても物うやのほん〳〵のふいよしたりや、さりとはけびたるはやり歌、このほとにをのぢからきやしや風流のかこひにて一ふく立し君達も、今はさんちやのにが〳〵しくお茶ひくばかりになり給ふ。そのいにしへの籠には、色よき花のさま〳〵に、客まちかねておはせしは、きやらの煙にうちまきれ、いとかすかなる其內に合せかるたうたかるた、源氏酒盛歌合せ、歌や連歌や詩を作り、さも氣高くも尋常にしほらしくおはせしか、今の女郎はあさましや、ぶんこの蓋に花かつほいとあら〳〵と手自らかき、小夜更け方に蕎麥切を待ちかね給ふ體たらく、燒蛤に立ち煙り、籠の內にみちみちて鼻もちならぬ其內に、歌や

連歌はひきかへて鈍田樂しゆを好み、お茶挽お敵のあらざればから酒盛の茶碗呑み、かゝるふぜいも見るからに思ひかけたる常陸帶、結びし緣もきれ果てゝあかぬ別れをし給ふぞや、たしなみ給へ。ある歌に△花を見よまかきのうちのひとふさに心をよせてちきらぬはなし

吉原評判　原本未見

延寶八庚申孟春鶴屋板、菱川吉兵衛畫とある。『吉原書籍目錄』に據れば、『さん茶評判胡椒頭巾』一冊紙數三十五張半歟、標題の意は口をあかせぬといふ事なるべし。序に「近年開板のらいでんに載る所の女郎は大方略す云々」末に「さん茶本草」として、遊女を食類に見立しことあり、近年何れの人か再刻したる一枚摺に「吉原本草」といふあり、延寶八年と記し、是には高尾を始め、太夫格子の名見えたり、此冊子にはさん茶女郎ばかりなる故、太夫格子を一枚摺にして出しゝものなるべし」とあるのが此『吉原評判』であらう」と今より約十數年前『奇書珍籍』第三輯吉原號に擧げてあるが、以上の說明丈では『さん茶評判胡椒頭巾』と同書か否か未詳であるが、當時何か據り處あつての事か兎に角附載して後考を待つこゝとする。

吉原あくた川　原本未見

『吉原書籍目錄』に「作者あさぢ原角田川都鳥とあり。缺丁本を見て年號は知れざれとも、次に載せし延寶九年の印本『下職原』に此頃出でし由記したれば、延寶八年頃の印本なるべし」とあるから、同年頃世に出たことは明かである。本書の一部分は柳亭種彥が『高尾考』に引用されて居ることは世間周知の事であるが、同書種彥按に、元祿四年『新吉原暴揃』と改題再版されたる由見えてゐる。それに據るとー此暴揃といふ草紙は元祿の印本にあらず、延寶八年の頃の印本『吉原芹川』といひし冊子の外題を替へ元祿の年號を入木したるものなり。其證萬年曆、けし鹿子、しづめ石、袖鑑、ふる狐、くらべ物の一書

に云々」とあり此等のさうし委くは見ざれども、袖鑑、くらべ物は寬文なり、しづめ石は延寶なり、天和貞享元祿に至りてさる古さうしを取出てゝ言はん理なし、されど所々彫改めしか委くは不知、此さうしを『あくた川』といひしものといふ證は延寶九年印本『吉原下職原』の序に曰「こゝに」あくた川」といふさうし此頃出でたりとて童の持たりこれこそ我が古への赤烏帽子なりと思ひて端を見けるに、せんしやうなるかな十王は硯の墨に筆を染め、浮名を流す芹川と書そめて作者がゐんま王となりて、女郎の善惡をわけたりかゝる所に人は類を以て集る習ひなれば、己が如きのひりこきども四三五六人よりあひ此評判にめさし、かなたの一から十迄讀で見るに、多くは三浦山本兩家ばかりの評ばかりにて、御全盛の君達まゝあれども、そこ〳〵に言ひ捨てぬ」又同じさうし小紫を評する詞の中に、「第一仔細らしくて人の惡むによりて、言ひ弘むなり。あくた川の都鳥が此君と伊勢屋にて人のたいこの一座の時あくた川の都鳥とは作者の事をいへるなり、照し合せて見るべし。」云々とある。

吉原下職原　原本未見

種彥の『吉原書籍目錄』に曰く、紙數三十三張、卷尾に延寶九年酉三月上旬、さうしや權右衛門開板、作者は例の醒し名か、若信述と序にあり、『職原抄』に倣ひ、遊女の位を別ちての例の評書なり、前に出版せし『芹川』の作者を盲目なりと嘲けれども、此作者もさまでに筆はしらず、狂歌やうの事最も拙し。天和三年菱川の畫本『岩木壺し』の引書に見えたりとある丈で前項『芹川』引用の序文にその片鱗を覗ふに過ぎない。按するに、時代は大分隔たつてはゐるが、元祿七年の『吉原草摺引』なる遊女評判記が單に遊女を白地に譬つたといふ理由で筆者版元が笞刑にまで處せられるといふ官尊民卑の專政時代に官員錄とも云ふべき職原抄に擬した黃色の下等民族の名を列ねた本書の如き名の下に公刊されて無事に收まつたとすれば寧ろ奇蹟と言はなければならぬが、その事從來何等文獻徵すべきものがないので、何とも斷

定は下し兼ねるが書名から云へばどうしても禁賣物である。

吉原三茶三幅一對　原本未見

「繪入一冊、延寶九年印本、太夫格子を載せず、散茶といふ遊女のみの評判なり、三幅對とは、當時さんちや女郎をさしていふ也、天和板菱川の『百人女郎』にあり、近くは『石井盟どうし』にありとぞ。是亦『胡椒頭巾』の類にて、散茶ばかりの評書なり。此冊子に吉原の圖あれども、散茶見世のある處ばかりなる故、全圖にはあらず」云々と例の『吉原書籍目錄』に出てゐるのみである。

以上吉原遊女評判記であるが、以下京島原關係のもの二三を擧げて延寶度の評判記細見記の項を終らうと思ふ。但大坂からは此年度には純評判記としては一冊も見當らない。或は出ても傳はらなかつたのかも知れない。

朱雀諸分鑑　上下、延寶九年刊

委くは『島原もん日朱雀諸分鑑』とあつて、半紙繪入本、挿畫は吉田半兵衛風にして、天和の『島原大和暦』の挿畫と同筆である。奥附には、延寶九年辛酉卯月吉日、萬屋庄兵衛、丸屋源兵衛とあり、最近名古屋の平出本中にあつたのを瞥見した丈で、次の『朱雀遠目鏡』と同時に發行された姉妹篇とも見るべきもので、前者は書名の如く紋日物日の年中行事を、後者は遊女評判記である。惜哉本文を寫す餘裕がなかつたので序文丈を辛ふじて寫し取つたことをせめてもの慰めとしたい。

「序」いふも管、思ふも野火なり、夢の憂世とは縱命が百年の御定であんすであんすとも、十露盤に物し侍れば著と三萬六千日、扨て無意氣に夢がまし、是さへござるに、出る息が入息をまたぬ遣背なさ無常の使が通欲にはやき事は、巾着剪が手もとは礫なり、夫槿花の戯を思ひつゞれば神ぞ辛氣や逸卒に居鼠と搗腕の、木端ともなりて、くゝり袖を墨染にしてくれうと願ひ頻也。斯る所に夢でもなく現ともなふて、若干の女郎出現して告て云、まてしばし〳〵、いかなる山の奥に入るとも、そこも憂世の外ならねば、目烟鹿の妻戀に氣をもたせ、惡らしき無常の便は如在なく來るべし。關思に無二無三にかよふべし。どこへ是、此島原は無比樂城、此遊興は世界の伽藍、可仰可信、我は是朱雀の名女、何屋の何がし、たれがしじやと名乘給

延寶九年板　「朱雀遠目鏡」挿畫

ひ、諸分の豐卷をあたへて、是此書は女郎柄の秘要詞、いかなる野火も通者となるべし。汝遠に弘通すべしと、光をはなちて西をさして飛去給ひしは、有難かりける奇瑞なり。それより感涙肝に銘じ、渴仰の萠ふかうして一向彼地に通ひ其おもしろさ屢々踊ばかりなり。さて止事をえず彼一卷を梓にして、大臣の御玉子にときをうたはする事爾なり。比は延寶九とせ卯月のはじめ、蕉がもつれし松之助がぬれに催され、山時鳥の一聲から又一聲に書終ぬ。

朱雀遠目鏡　上下、前書と同年の發行

委くは「島原松梅之評判朱雀遠目鏡」「延寶九年辛酉正月吉祥日」と奥附あり、書の體裁前書と全く同じ、左に序文の一節其他を少しく紹介しよう。

上略、然るに此評判昔より島源集、難波物評の先例にまかせて、わるざれの大臣編集して朱雀遠目鏡と名づけり、夫遠目鏡は遠鏡を引よせてみするもの也。るながらに彼地の諸わけを見るがゆゑにかくは名付たり。扨此書を見たまはん御かた、片意地に心得給ふべからず。能申とて其上鳶の雲をわけて天にも昇りたまはゞ、あし

手とて地をほりて品くだりもせず、それ〳〵のえにしにまかせて、わけはたちてゆくなり。誠に諸氏はゝき木の巷にかけるが如く、今は只品にもよらじ、かたちをばさらにもいはじといへり。只心のひと節をこそもつぱらにはせまほしけれ。さして上薦のかたちをばえらばず、心中をあひし給ふがおもはくの玉藻でありそうなり。

延寶九年正月之紘日　　向得方序

太夫十四人、かうし五十四人、かこひ五十三人、はし百四十八人、合二百七十人外に北向十五人、かぶろ四十五人、やりて三十三人、あけや二十六軒。ちや屋二十けん

松之部　金太夫　薫　小太夫　唐土　倭國　高橋　吉野　長門　大橋　花崎　奥州　唐橋　九重　萬殊

外に梅、かこひの綱見ありしも省略す。左に金太夫の評あり。

金太夫

流るゝ〳〵、枕流るぬれのわけ、首丈沈むうたかたの、哀れ戀地の思ひだね、宛轉たる御容色、諸體の見事さ女郎花の露をふくみたる如く、清らかなるありさまは、櫻の咲き亂れしに譬ても、未だ不足なり面體いづくに難なし。につとゑめる目元、世界の伽羅なり。さてふり出らるゝ道中のかゝり。座敷つき殘る所なし。御床入よし。されば月には村雲めがでくさる。花にはにくき風あり。おが屑も言へばいはるゝとや、何やつが此人を難じたるといの。御　のあたりはふくらかに、饅頭を欺く如くなるこそよけれ。肩腰の所に肉なくこけたるやうなり。是はこゝでの事、それは〳〵仰山しわき御人なり。又此君に似合ぬ物は鹿子の帶に中入の多く入たると、びろうどの帶なり。柳を欺く御腰に、心なき藤こぶのまとへるが如し。

花の顔やそこでなけうつ金太夫。

因に云、本書と姉妹篇たる「朱荏信夫摺」頁享四年九月下旬刊上下二冊評判好色軒、文法南花軒の序あり。矢張松梅丈の遊女評判記にして、上卷松の部もろこし以下十三人。下卷梅之部大橋以下六十八人を擧げて評判して居る。

昭和三年十月十五日印刷納本
昭和三年十月十八日發行

著者　石川巖

東京市牛込區西五軒町三十四
發行兼印刷人　鶴山鶴太郎

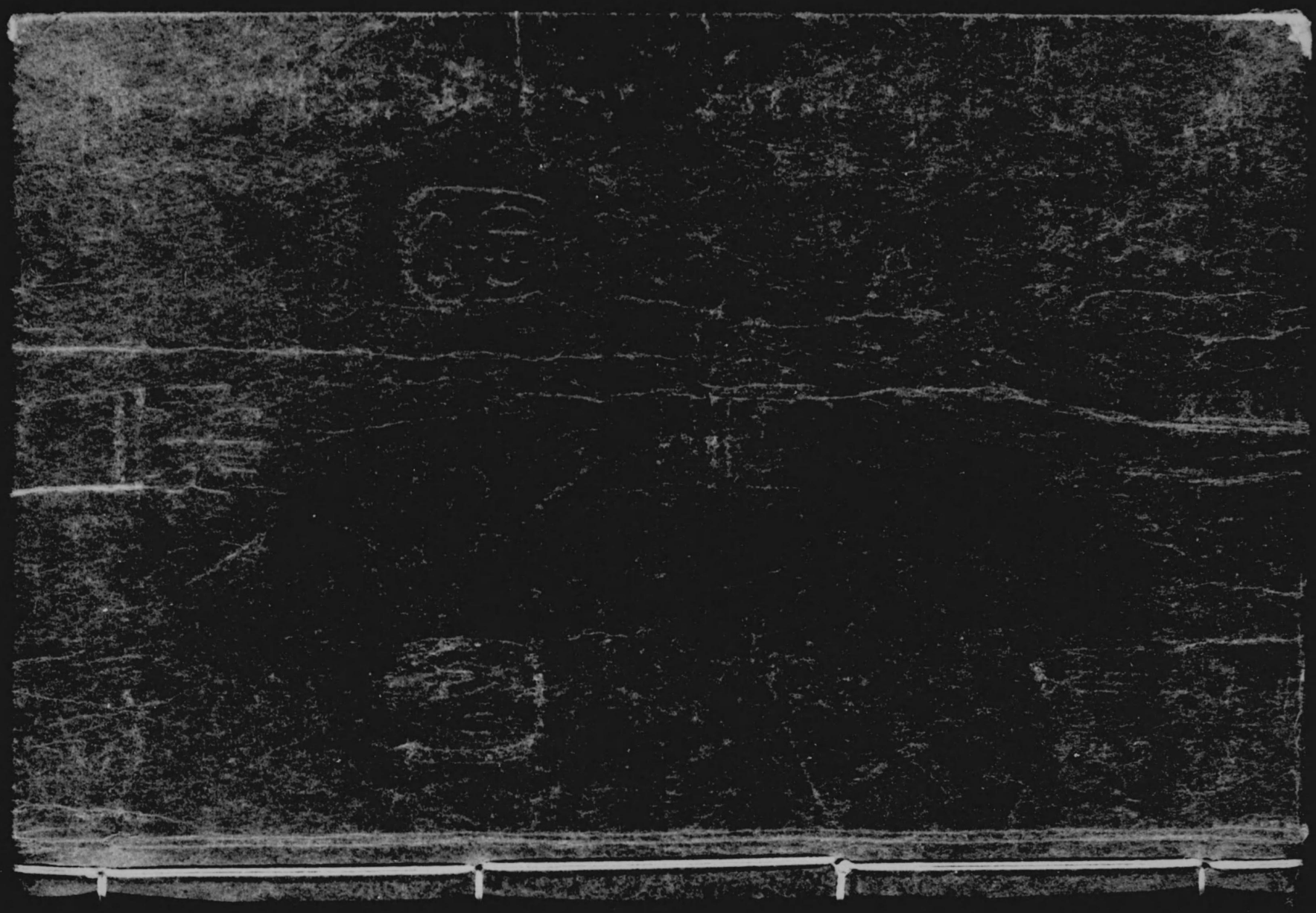
東京市牛込區西五軒町三十四
印刷所　鶴山印刷所

發行所

東京市牛込區西五軒町三十四番地
文藝資料研究會
電話牛込四三六〇番
振替東京四二三八七番

このところにはっかうしよのけんいんなをはにせはんてす
もしけんいんのないものがありましたらおしらせくたさい

183
589

1983
F.C.7

183
589